



島山 健 講述

集釋義

東京專門學校藏版



萬葉集釋義

畠山 健 講述

本書はわが國最古の歌集にして、上は仁徳天皇の御代より、下は淳仁天皇の天平寶
 字三年正月までの歌を載せたり。其の數すべて四千四百九十六首。そのうち長
 歌二百六十二首、短歌四千一百七十三首、旋頭歌六十一首。（註）今方に異同あるわか
 ちて二十卷とせり。詠する處、昔情の發するにまかせたれば、當時の世態人情、言
 語ながら見聞するがごとし。決して後世の歌のものとめて構造せるたぐひにあ
 らず。されば、中にはたゞつぶくと言語を并べたるが如きも見ゆれど、大かたは、其
 の委たかく、其の意をかくこと、にめでたきにいたりては、吟詠の間、おのづから吾を
 わすれしむるもの少しとせず。巧みてもいやしきに陥らず、飾りてもまことを失
 ふことなく、實に作歌の好模範たりされば、つねに歌よむ人は、いふまでもなく、また
 今より歌をよまんと志すものは、ひたすら古今以下にのみ徘徊せず、必ずすゝみて、
 この集に溯りて以て反復翫味すべきなり。いま、本書を講ずるにつき、まづ大體に

關する必用の事ども左に述べし

(一) 題號のこと

本集を萬葉と名づけたることにつき、古來兩説ありて、いづれども定めがたきごととし、一は萬代の義とし、一は萬言の義とせり。前なるは、文選、顔延年が三月三日曲水詩序に

招世貽統、固萬葉云々とありて注に葉代也、また養老令に

詔垂萬葉とありて、義解に毛萇詩傳曰葉世也、また

續日本紀十二天平八年葛城王諸兄公等上表に

萬歲無窮千葉相傳

など、其の外、漢文に多く所見あるを據とし、後なるは、たゞ萬世の義としては、何を集めたりとも聞えず。かつ後の撰集に金葉集、玉葉集、また南朝の新葉集など、皆本集によれる名なるが、葉は言の葉の意とせるを據とするなり。されど、前説の方に従ふべし。いかにとなれば、萬世の義としては、何を集めたりとも聞えずといふは、一

わたりさることながら、金葉、玉葉の類は、本集によりて後世の人の名づけたるなれば、證に立ちがたし。もし、強ひてこれを據とせば、前なるにも、千載集、後葉集、萬代集など、本集にならへるを引き出づべければなり。ことに、本集の詞書のなべて漢文なるに合はせ考へても、必漢籍上の文字をとりいでたりとせざるゝに、本集のころには、いまだ言の葉といふことさへ聞えぬをや。されば、萬葉は古今集の序にも、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて云々などある意にて、長く久しく萬代の後までも傳はれとの名なりとすべきにこそ

(二) 撰者及撰定時代のこと

本集を撰べる人、および時代のこと、古來諸論ありて一定せず、撰者は、一は橘諸兄公とし、一は大伴家持卿とし、一は諸兄家持兩人とせり。(この外の説、畧く時代は、一は聖武帝とし、一は孝謙帝とせり。撰者を諸兄公なりとせる説は、榮花物語、月宴の巻に

むかし、高野の女帝(孝謙)の御代、天平勝寶五年には、左大臣橘卿諸兄、諸卿大夫等集りて、萬葉集をえらび給云々又

古來風躰抄に

ならのみや、聖武の御時になん、橘の諸兄の大臣と申人勅を承りて、萬葉集を撰まな
どある古傳を據とせり。されど本集は上にもいへるが如く、仁徳天皇の御代より
淳仁天皇天平寶字三年正月までの歌を載せたるに、諸兄公は、同元年正月に薨なせら
れしのみならず、集中前後の體裁も同一ならねばとて、つひに萬葉といふは、今本の
一、二、十三、十一、十二、十四の六卷にして、餘は、家々の歌集の混じたるなりと斷定した
り。家持卿なりとの説は、止と同じく年代の違へる、集中のどよのはぬをばじめ、本
集は、大納言以下は、大かた名を記すが例なるに、大伴旅人卿家持の父、いまだ賤官の
時より名を書せずしてこれを敬ひ、また家持の姑坂上郎女を尊母といひ、室坂上大
娘を家婦といひ、みづからの歌を拙歌としるせるなどを證として、家持のかつて見
聞に隨ひて集めよけるが、草稿のまゝ傳はれるなりと決したり。諸兄家持兩撰な
りとの説は、古傳を探り用ひてなほ集中家持の歌を諸兄の改められしを家持のそ
れを用ひざりし趣また盤余伊美吉諸君イミキの防人トヨリの歌を抄寫して家持に贈れるなど
を據とせるなり。みな理あり。然れどもかゝる事は實はいかに考究すとも其の

まことを得ん事甚難かるべければ、まづは穩當なりと認め得らるべきに定むべき
なりされば右の諸説のうち、第三諸兄家持の兩撰とせるに従ふべし。たゞし、勅撰
にはあらじもし勅撰とせば聖武帝の崩御に引きつゞきて、諸兄公の薨去せられけ
れは、もしは、其の事のみなどして、稿のまゝ傳はれりとも定むべきにや
時代のことは、上の榮花風躰抄等によれば、一は孝謙帝、一は聖武帝なり。まづは不
審といふべし。されどよくおもへば、孝謙帝は聖武帝の皇女にましく、同じく
「ならのみや」にましく、ことに聖武帝廿五年御在位の後、太上天皇にて八年間、天平
勝寶元年より同八年まで、おはしましければ、そのほどのこと、すれば、この二傳は、
畢竟一傳にして疑ひあるべからず。いづれにてもあるべけれど、なほ榮花の方と
定むべきなり。

(三) 訓點のこと

本集はもと漢字はじめは草書なりけんを、仙覺などの楷書に改めたるにやといへ
りのみなりけんを、村上天皇天曆五年、梨壺の五人に仰せられて、はじめて點を加へ
しめられぬ。(今より九百四十年前)つぎて法成寺入道關白太政大臣以下、各點を加へ

六
へ、その後鎌倉の僧權律師仙覺點を加へたるなり。はじめなるを古點といひ、次なるを次點といひ、仙覺の加へたるを新點といへり。尙左の引證ともによりて、委曲を知るべし

成明親王の位につかせ給たりけるに、女御あまたさぶらはせ給ける中に、廣幡の御息所はここに御心はせあるさまに帝もおほしめしたり……此御息所、御心おきて賢くおはしけるゆゑに、彼帝の御時、梨壺の五人に仰せて、萬葉集をやはらげられしも、この御すゝめこそ、順筆をされりける云々(十訓抄)

天曆五年宣旨ありて、はじめてやまご歌えらぶまじりななしつばにおかせ給ひて、古萬葉集(新撰萬葉集)に對して本集をいへるなり(なよみまじり撰)はしめ給ふなり云々(源順集)

天曆御宇、詔大中臣能宣、清原元輔、坂上望城、源順紀時文等、於三昭陽舍(梨壺)加和點、此號古點、亦追加點人々、法成寺入道關白太政大臣、大江佐國、藤原孝育、權中納言匡房、源國信、大納言源師頼、藤原基俊等各加點、此名次點、亦權律師仙覺加點、此稱新點(岡林桑葉抄)

以上三等の訓點に基き、世々の學者等のなほ考へよみて、今日のごとく、何人にも解し得るやうにはなれるなり。仙覺の時(殆六百五十年前)無點の歌、長歌、旋頭歌、合はせて百五十二首に推點を加へぬとあれば、その頃まではいまだ讀むことだに能

はざりけんちもふべし

(四) 部類及歌體

本集部類をたてたる、毎卷同一ならざれども、まづこれを六種にわかちたり。左のごとし

一、雜歌

これは、後世の歌集どもの雜の部なり。されどそれよりはやゝ汎く、行幸、羈旅等をも載せたり

二、相聞

これは、後世の戀の部に於て、これまたやゝ汎く、親子、兄弟、親族、朋友等互に相おもふをも載せたり

三、挽歌

これは、後世に哀傷の部なり

四、譬喻歌

これは、他物によそへて、戀の心を詠めるを載せたり

五、四季雑歌

これは、雑の歌にて四季に属せるを載せたり

六、四季相聞

これは、相聞の歌にて、四季に属せるを載せたり

歌體は左の三種とす

一、長歌

これは、五七五七とつゞけて、終に、更に七言一句を添へて七句四十三言以上
上に調ふるものをいふ

二、短歌

これは、五七五七七の五句(三十一言)に調ふるものをいふ

三、旋頭歌

これは、五七七、五七七の六句(三十八言)に調ふるものをいふ
但、こゝに五言といひ、七言といふは、たゞその格をいふにて、歌によりて
は、或は五言にいふべき處を、三言四言、または六言などにいへるもあり。

(五)

本集文字の用法、種々ありといへども、大抵左の四種に過ぎざるがごとし

一、假字

二、借訓

三、正訓

四、義訓

一、假字にまた二種あり。字音をかれるものを音假字といひ、字訓をかれるを訓假字といふ。
音假字とは

安己鳥廷憶(あいうえお)

可吉求鷄居(かきくけこ)

散新周西則(さしすせそ)
 丹遲通天得(たちつてと)
 男而農年乃(なにぬねの)
 芳賓副返朋(はひふへほ)
 馬民謀梅門(まみむめも)
 楊○遊○容(や○ゆ○よ)
 樂隣流連路(らりるれるろ)
 和謂○回越(わゐる○を)
 など用ひたるをいふ
 訓假字とは

- 余射兎榎○(あいうえ○)
- 日本來異兒(かきくけこ)
- 猿石渚背苑(さしすせそ)
- 田乳津直利(たちつてと)

- 魚煮沼根笑(なにぬねの)
- 齒乾經戸帆(はひふへほ)
- 間身六目裳(まみむめも)
- 矢○湯○世(や○ゆ○よ)
- 等入○村○(らり○れ○)
- 猪○咲男(あゐる○を)

など用ひたるをいふ。○はすべて集中に用例なきものなり
 右のうち己鳥可求居の類は正音假字にして安延憶吉鷄の類は略音假字なり。
 余射兎榎の類は正訓假字にして猿石苑の類は略訓假字なり
 また訓假字には二字一訓なるものあり。嗚呼馬聲羊蹄石花峰音牛鳴海藻の類
 とす(嗚呼兒乃浦^{あいの}馬聲峰音石花蜘蛛荒鹿^{いぶせく}池羊蹄恨之^{いけしう})
 猶入成牛鳴^{なほやな}何如荒海藻^{あいかい}
 二、借訓にまた二種あり。字音をかりて他意に用ひたると、字訓をかりて他意に
 用ひたるとなり。ともに二音以上のものとす

字音をかれるとは

鬱^{ウツ}膽^{タン}乃^ノ世人^{セカイジン}うつせみのよのひと現^{ウツ}身^ミなりみは

可^カ久^{キウ}也^ヤ歎^{タン}敢^{ガン}かくやなげかむ^カ辭^ジなりは

薩^{サク}雄^{ユウ}さつを獵^{リョウ}男^{ナリ}なり

絶^{ケツ}塔^{トウ}浪^{ライ}たゆたふなみ^タ獵^{リョウ}男^{ナリ}なりは

戀^{ケン}度^ド南^{ナン}こひわたりなむ^ナ辭^ジなりは

遣^{セン}之^シ萬^{マン}々^ザまけのまに^マ辭^ジなりは

有^{ユウ}藍^{ラン}君^{クニ}叫^{ケウ}あるらむきみを^キ辭^ジなりは

越^{エツ}乞^キをちごち^ゴ彼^カ方^{ホウ}此^シ方^{ホウ}なり

など用ひたるをいふ

字訓をかれるとは

秋^{シュウ}足^{ソク}目^メ八^{ハチ}方^{ホウ}あきたらめやも^メ鮎^{アサ}火^カなりは

受^{ウケ}日^{ニチ}鶴^{カク}鴨^{カウ}うけひつるかも^カ所^{ショ}野^ノなりは

辛^{シン}人^{ジン}からびと^ト辭^ジなりは

泉^{セン}鳥^{トウ}かほどり^カ泉^{セン}の音^ネカウなるなり

今^{イマ}悔^{カイ}拭^シいまぞぐやしき^キ辭^ジなりは

人^{ニン}見^ミ點^{テン}鴨^{カウ}ひとみてんかも^カ辭^ジなりは

福^{フク}路^ロ庭^{テイ}ふくろには^ニ袋^{フクロ}なりは

敏^{ミン}馬^バみぬめ^メ地名^{トコロ}

相^{サウ}樂^{ラク}念^{ネン}者^{シャ}あへらくおもへば^バ尾^ビなくは^カ照^{テウ}

射^{セツ}去^{キョ}火^カいさりび^ビ漁^{リョ}火^カなり

息^{セツ}津^{ジン}藻^ソあきつも^モ與^ヨなりは

雁^{ガン}羽^ウ之^シ小^コ野^ノかりばのを^ヲ辭^ジなりは

與^ヨ從^{ジュウ}酒^{シュウ}管^{カン}あまゆさけなむ^ム將^{シヤウ}進^{ジン}也^ヤ

夢^ム爾^ニ谷^コゆめにだ^ダ辭^ジなりは

冷^{レイ}雲^{ウン}梨^リさむけくもなし^シ寒^{カン}しけなりも

山^{サン}常^{ジョウ}庭^{テイ}やまどには^ニ辭^ジなりは

伊^イ去^{キョ}羽^ウ計^{ケイ}いゆきは^ハかり^リは^ハ憚^{ハヤシ}なり

荒^{クワ}卷^{ケン}惜^{シキ}毛^{モウ}あれまくをしも^シ辭^ジなりは

八^{ハチ}重^{ジュウ}六^{ロク}倉^{ソウ}やへむぐら^ラ辭^ジなりは

客^{キヤク}乃^ノ屋^ヤ取^キたびのやどり^{ドリ}宿^{シュク}なりは

綿^{ワタ}之^シ底^{ソコ}わたのそこ^コ辭^ジなりは

など用ひたるをいふ

三、正訓にも種類ありされと言の意と字の義と相當せるは一なれば今はこれを
わかつたす即

アメツチ に 天地乾坤

カミ に 神神祇

アシタ に 明旦明

コトドヒ に 言語

サカヅキ	に	酒杯	スガタ	に	形容儀
タワヤメ	に	手弱女	ツマ	に	夫婦
ナニ	に	何、何如、何物	ヌル	に	沾、所霑
ハタ	に	緞服	ホノカ	に	髣髴
マスラチ	に	丈夫、益荒男	ミノギ	に	身潔、潔
ヤド	に	宿所屋	ヨソハン	に	將裝、筋
ワラハ	に	童子	ヲトメ	に	女娘

など填てたり。右のうち、カミに神祇、ナニに何如また何物、ヤドに屋所と書ける類は、その言の意をくはしくせんとてなるべし。また、アシタに明、ミノギに潔とかける類は、はぶけるなり。またハタに服をあてたる(カツラに緞、クラに掠、ハシに椅をあてたる類みなおなじ)は或はや、字義に疎く、或は、全く字義にあはざるものも多かれど古よりしか訓み來れるはなほこの類とすべし

四、義訓にもまた種類あり。されど、義を得て、よませたるは一なれば、これまた、わづらはしくわかつたず、即

アメツチ	に	玄黄	アミ(網)	に	留鳥
アタラシ	に	今造	イナ	に	不聽
オデ(田)	に	山上復有山	ウツル(移)	に	不所 <small>本の所に あらしむ意</small>
カタナク	に	西渡 <small>(月西渡)</small>	キミ	に	夫君
ク、	に	八十一	ケブリ	に	火氣
サ、メク	に	耳言	シゾマル	に	安定
スソ	に	下	ソメ	に	綵色
タエズ	に	不怠	チ、ハ、	に	親々
ツ、	に	喚鷄 <small>古鷄をよぶについ さいひひしなるべし</small>	テシ	に	義之 <small>義之は手師(香 家)なればなり</small>
ナミダ	に	戀水	ニホヒ	に	色葉
ヌサ(幣)	に	布施	ヌル	に	少熱 <small>イマソナ 今曾水葱少熱</small>
ハル(春)	に	暖	ヒトヨ	に	全夜
フユ(冬)	に	寒	ホノカ	に	風
マチカキ	に	不遠	マヂ	に	諸手 <small>トモシキマヂニ 之諸手丹</small>

ミカヅキ 　　に 若月

モリ(森) 　　に 神社

ヤマト 　　に 日本

ユク 　　　　に 至

ヨドム 　　に 不通

ヨコクモ 　　に 東細布襦の横

ワカナ 　　に 春菜

ヲバナ 　　に 草花

など用ひたり。右のうち、アメツチに玄黄、イナに不聽をあてたる類は正しくして、イデに山上復有山ウツルに不所をあてたる類は、ことに戯れて書けるものなりといへり。上の訓假字のうちに出だせる馬聲、蜂音、牛鳴もこの類なり。

以上はたい用字の概畧のみ、なほこの外、字畫を略けるあり、健を建、起を已、陸を玄、と書ける類、文字をはぶけるあり、山下出風也といふを略して、山下、下風と書き、左右、手を左右と書ける類、また、文字の異なる、キコカキ稗震致、キコカキ奕、キコカキ鞠の類、但略解には改めたるも多し、もあれど、今はみなもらしつ

(六) 註釋本のみと

本集を註せるものども古來甚多し、刊本なると、寫本なるとをあはせば、六七十種もしくは、百種にもいたりぬべし、これいやくしくも、國學に従事するもの、皆この書を

研究せぬはなければなり、されど本集は、大部のものなれば、全篇に通ぜるもの稀なり、今や、手近きものを擧ぐれば左のごとし

一 萬葉集抄

二十卷(刊本)

釋 仙覺著

一 萬葉集抄、一名萬葉集註釋、また、仙覺抄ともいふ。わき、古訓の誤を正し、註釋を施したり、また、本文を假字交がきに改めたるも少からず。既に言まれば、數百年、本集の埋もれたりしなごり出で、世にあらはしたるは、この律師にして、この抄は、本集註釋のおやぶみなれば、尤、貴しといふべし。殊に、今はなき、諸國の風土記をも多く引きたれば、考古の材料となる事夥からず

一 萬葉拾穂抄

三十卷(刊本)

北村季吟著

この書、すべて本文を草假字にして、漢字を傍に填て、註を首書にせり。多くは、古人の既に據り、まゝ、今案を加へたり。師、道遊軒貞徳の志をつきてあらはせるなり。拾穂は、季吟の號なり

一 萬葉代匠記

二十二卷(寫本)

釋 契沖著

この書、卷數定まらず、諸本異同あり。今は、群書一覽によれり。總釋二卷(余がもてるは一卷なり)あり、語説に泥ます、厚く、古書を引證して、發明せる説も多く、更に、前二書の比にあらず。本文は、おほかた、草假名まとりにかき改めたり。また、まゝ、全文を擧げず、下を略けるもあり。これ、阿闍梨が、その友下河邊長流にかはり、四山公に奉らんとしてあらはせるなり。

代匠の題序文に見えたり

一 萬葉考

二十卷(七卷以下寫本)加茂貞淵著

別記三卷(人麿集一卷刊本)

この書は下め六卷は、今本の二、二十三、十一、十二、十四の註釋にして、餘の十四卷は、今本の三、四、五、六、七、八、九、十、十五、十六、十七、十八、十九、二十の註釋なり。おほくは一二句もしくは三四句の下ごに註したり。まゝ、舊來の文字を改め、左註、或本の歌等を刪れるもあり。卷次の今本と違へるは、舊の今本の二、三、十一、十二、十四の六卷を、まことの萬葉集とし、餘の十四卷を、家々の歌集なりと定められたるにより。本書また、發明の説多し。ここに、古言古意にくはしきは、この書の特徴なり。七卷以下は、舊の授後、同人等の、その遺稿をあつめて、今案をも加へたるものなり。別記三卷は、下めの六卷中、所説のつきざるを、別に記せるなり。人麿集も、おなづく註釋を施したり。これより後の註釋も、皆、本書と代匠記ともさしせざるはなし

一 萬葉集略解

三十卷(刊本)

橘 千蔭著

この書、まづ本文を舉げ、更に草假字をもて、左にしるしたり。師翁の萬葉考、また、代匠記をもととし、本居宣長、村田春海、清水浪臣等の説をあげたり。みづからのもあり。刊行の後、なほ改正したることあるにや。まゝ、いさゝかつゝ違へるも見ゆ。全部の註釋とも、のうちには、間偶なる書なり

一 萬葉集古義

百廿五卷(刊本)

鹿持雅澄著

この書、萬葉のひろきは、卷數をもて知るべし。本集の註釋九十五卷、この他、總論、枕詞、品物、名所考、名所圖分、人物傳、玉時考、註釋目錄(これは、門人松本弘隆の編なり)あはせて三十卷なり。著者生涯の力をつくし、世を去るに至るまで、校正してやまずと、福羽翁の序文に見えたり。げに、まゝありけん。これ、近ごろ、宮内省、めして、刻本とせられたるものなり

この外、釋萬葉集(五十卷)

源光圀卿萬葉童蒙抄(八十卷) 荷田東瀟翁萬葉辭案抄

卷三 同翁萬葉集燈(五卷)

刊本 富士谷御杖萬葉集玉の小琴(二卷) 刊本 本居宣長翁萬葉

考 槻落葉(三卷) 別記二卷

刊本 荒木田久老萬葉拾遺(五卷) 刊本 橘守部等もきこえたる書

なり、釋「童蒙抄」は知らず

但釋は、代匠記の説に異ならずといふ。辭案抄、僅かに、本集

卷一の註のみなれど

その見、讀みるべし。但、よろしきは、皆考にとり用ひられたり

童蒙抄の原本なりといふ

燈は、一ふしある説とまにて、殊に言語にくはし。玉の小

琴は、老の説を正したり

槻落葉は、本集第三の解なり。その説、穩當發明の説は、別記

にしるせり

拾遺は、地理に明らかなり。また、萬葉繁要(二卷) 刊本 守部も歌のよしあし

を辨じれば、心得となるべき事どもあはし

一講本は略解本を用ひて取捨すべし。これ普く世に行はるればなり
一左註また或本の歌は本文に頗關係あるものゝ外は擧げざるべし

萬葉集一之卷

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代 ○泊瀬朝倉宮、雄略天皇の大宮所の名なり○御

宇、御は治なり。宇は上下四方なり。天下を治むるをいふ○天皇代、本集一二の
卷はすべてまづ宮の名をあげてさてその御代の歌を載せられたればかくいへり。略
解この下に天皇の御名を載せられたれど今は古本の無きに從ひてはぶきたり。そは
あのづから解釋のうちにあらはるべければなり

天皇御製歌 ○天皇、即雄略天皇なり。書紀には大泊瀬幼武天皇とあり○御製

歌、玉篇に製、作也。裁也とあるがごとし。集中の例天皇には御製、皇子には御作、諸

王以下庶人には作とかけり

籠毛與美籠母乳布久思毛與美夫君志持此岳爾菜採須兒家告開名告沙根「鹿見津山
跡乃國者押奈戶手吾許曾居師告名倍手吾已曾座我許曾者背跡齒告目家乎毛名雄

毛

◎この御製は天皇のある時大宮わたりのある岳に御遊などに行幸まし／＼け
るが、とりしも愛らしき女の若菜つみけるに御目とまらせ給ひて、とひよらせな
どしたまひてよませ給ひしなり

さてこの一篇二段にわかれたり。初句より名告沙根まで一段、鹿見津より以下一
段なり。上の一段は天皇の少女に家と名とを問はせ給へるなり。下の一段は天皇
御みづからの上を少女に告げさせ給へるなり

○籠毛與美籠母乳、籠ハカフなり。若菜を摘みて入れん料なり。この訓、略解はカ
カマとよめるに據れり。されどなほこゝは三言の句、次は四言の句とちばしけれ
ば今は古點に從へり。毛與はどもに歎辭なり。こゝは籠のうるはしきをほめ給
へるなり。但この與の辭は歎く方より、あのづから下の詞を呼び出だす意となる
こと。つねのことなり。こゝも然なり。美籠母乳は御籠持なり。美は稱辭にて、草を
御草、雪を御雪などいふにあなじ。この辭はむる方より、また尊ぶ方にも用ふるは
いふに及ばず。○布久思毛與美夫君志持、布久思は堀申なり。菜を堀り採る具之

の訓夫の字、濁音の假字なるを以て、舊來、ミナクシとよめり。されど、集中夫を清音に用ひたる例もあれば、今は、古義「萬葉新考」等の改めたるに従へり。毛興美は、上に准へて知るべし。さて以上の四句は、下の菜摘須にかゝるにて、もはら、小女の状態をのり給へるなり。實はたゞ、うるはしき籠と堀申とを持ちてといふを、かく、二句對にあやなし給へるなり。句ごとに、歎辭、或は稱辭をちぎ給へるは、その器物どものたゞならぬをほめ給へるなれども、其の主を妾容の勝れたるも、自想ひやらるゝなり。○此岳爾菜採須見、岳は前にもいへるが如く、大宮わたりの岳なるべし。菜採須見は、菜つむ見といふを、あがめていへる古言にて、即少女をのり給へるなり。これ、古は、貴賤にかゝはらず、人をあがむるが、つねのならばしなりければなり。○家告閑、名告沙根、家告れ名告れといふを、あがめていへる古言なり。沙は世の轉じて名のらせといふにあなむ根は、戀に催す辭、この辭によりて、少女の黙し居たるさまもふべし。さて、この二句は、一篇の眼目なり。たゞ、家名を告れとの意なるをかく、わけてのり給へるは、答をうながし給ふことの、切なるなり。告閑、諸本、古閑とありて、キカン、またキカナなど訓みたれど、人に、其の名を問ふ詞

つきどもあはえねば、今はまばらく、一本、告閑とあるに據りて、ノヲへとよめるに従へり。但これは、閑を閑の誤とせるなり。以上一段。○一段の總意、さて、うるはしき籠よ。さて、うるはしき堀申よ。この二つの物を手にとり持ちて、愛らしくも、この岳に、若菜つみたまふ見よ。汝はいかなる人にてかちはず。誰が子ぞ、家はいつく。名は何ぞか申す。つゝ、まが、家をも名をも、われに告げてよ、いかで、いかに、となり。○鹿見津、山跡之國者、鹿見津は、山跡の冠詞なり。舊紀、神武天皇の卷に、及至饒速日命乘天磐船而翔行大虛也。是鄉而降之。故因目之曰、鹿空見。日本國矣。とあり。これより、冠詞となれりといへり。山跡は、今の、大和國なり。天皇、大和に都したまひたれば、さしあたりて、この一國をとり出でたまひたれど、おのづから、天下にわたりにてきこゆ。○押奈戸手、吾許曾居、押奈戸手は、押並而なり。俗に、一圓などいふに同じ。吾許曾居は、天皇の御代、まろしめして居たまふよしなり。許曾は、事物の多かる中より、たゞ、一つをとり出で、いふ辭なることは、口語の上に准へても知るべし。今日こそは、云々せんとおもひしに、なごいはんがごとし。こゝは、大和國に、人

も多かれと吾こそ其の主としてましませとの意なり。○師告名倍手、吾已曾座、師告は敷なり、領する意、この二句上の二句の對にて、意ももはらひとつなり、吾許曾居師告名倍手、この二句略解、ソレコソテラシ、ノリナベテとよめるに據りたれど、さてはきこゆべくも覺えねば、今は玉の小櫛の説に従へり、たゞし、これは告を吉の誤とせるなり。○吾許曾者、背跡、齒告目、家乎毛名雄毛、背は夫なり。跡はとなりての意、すべてかゝる處のとは、下になりて、またはして、などの詞を添へてみるべし、そは、梢の雪の花を散りつゝなどいふは、雪のたゞ花となりて見ゆる意、降り来る雪を花とながめてなどいふは、雪を花としてながむる意なり、このどの辭をの如くと説くはくはしからず。齒は歎辭、いかはなどのには、おなじ俗に「ア」など譯すべし。告目は、告らんの意、上にこそその辭ある故に、めと轉じてとぢめたるなり。家乎毛名雄毛は、天皇みづからの御うへをのり給へるなり、この結句上の告目へ立ちかへりて、きくべく續けたまへり、そも、天皇のかく、夫となりて云々などのり給ひたるは、いにしへの女わが夫とすべき人ならでは家をも名をもあらはさぬが習俗なりければなり、燈にこそ、の我は、上の二つの吾をう

けてさる吾こそはその意なり、許曾を三つおかせ給へる、上の二つは同意にしてこゝなるは、またその二つをうけたるにて、ことに重しといへり、まことに、然きこゆ。舊本多く許の下、曾の字を脱せり、今は、ある方によりて補ひたり、また背の下跡の字、古本に、背、尔とあるがあるは、尔は跡の字のかけたるなりとて、補ひたる「古義の説によれり。○この三句、古來、おほかた吾をこそ夫として、家をも名をも告るべきなれと、天皇の少女にのり給へるなりと説きたれど、きこえぬ説なれば、とらざ余は、代匠記「燈の説を取捨して、字が意をもくはへたるなり、天皇の少女に家名をもども給へども、なほ、答へ奉らざりしによりて、さらば、まづ、吾より云々とのり給ひて、さて、その家と名とを、切にうながし給へるなり、その語勢よく味ふべし、また結句の家乎毛名雄毛は、小關重年の詞の珠衣に、二句としてあげたり、げにも、この句は今の歌になれては、こともなく、一句とはみゆれど、上の家告閉名告沙根の二句に應じたれば、しか見ん方、理あり。さてはこの御歌、三言四言にあたり、四言三言に收まれりといふべし、以上一段

○一段の總意 少女よ、われこそはこの天下の主たる君にてはますなれ、われこ

そは、この世の中をしろしめす君にてはあるなれ。汝の家名を答へぬかきりは、われも告げじとはあもふものから、さてあるべくもえあらぬば、いとちしつげがましけれど、われよりこそは、まづ夫となりて、家をも名をも、あちはさめとなりさて、かく、天皇の強にも、少女の家名をもとめ給ひつるに、その家所をきこしめさば、やがて、めしに遣はされんどの意、言外にあらはれたり。また、この少女の事、古來たゞ、一の賤女としたるが多けれども、その持てる器物よりはじめて、姿容のすぐれたるを、あもふに、なほ、さるべき良家の女と見たる既、穩當なるべし。そは、さる女の、うち、霞める春の野邊に、と行きかく行き、若菜など、探みて遊び居たらんこそ、よく、人の目にもとまりぬべけれ、いやしき女のもしはつれ、着たらんなどは、いかでか、さまでほどちほゆればなり。この天皇正史にては、たゞ、雄々しく、たけくまし、ける御性質のみあらはれたれど、かゝるやさしき御心も、あはしたりけるにこそ。

高市岡本宮御宇天皇代 ○舒明天皇なり

天皇登香具山望國之時、御製歌 ○香具山は、大和國十市郡にある○望國、下の

國見乎爲者とある處にいふべし

山常庭、村山有等、取與呂布、天乃香具山、立國見乎爲者、國原波、立龍、海原波、加萬目、立多都、何於國、曾崎島、八間跡能國者

○この御製は、端詞のごとく、天皇の、香具山に登りまして、國見したまひける時、よませ給ひけるなり

○山常庭、村山有等、山常は、大和國なり。庭は、辭、村山有等は、群山あれどなり

○取與呂布、取は、すべて、手にとりて、物するやうのことに、添へていふ詞、取りかさね、取り認むなどのことし。こゝは、香具山の手して、取りよろひたるが如く、見ゆるを、のり給へるなり。與呂布は、よろづ、具足せるをいふ。即、香具山の、羣山にまさりて、見はらしよく、景色の備はれるを、ほめ給へるなり。○立國見乎爲者、山に登り立ちて、國見をすればなり。國見とは、巡狩などの義にあらざ。たゞ、高き處に登りて、見晴るかして、樂むをいふ。古は、たゞ人も、したりしことなり。○國原波、煙立龍、原は、遙かに、廣く平らかなる處をいふがもとにて、同類の、むらがりて、その見わたしの、廣きをもいへり、松原、檜原などのことし。こゝは、國々の、むらかれるを

のり給へるなり。但國とは古は、大くも小くも、すべて一郷村をなせるをいひしと吉野國、泊瀬國、難波國などいへるにて知るべし。されば今も香具山わたりの村里をさし給へるなり。煙立龍は右の村里の民の籠のにぎはひたるさまなり。煙のさかりに立つといふ。龍、略解、諸本に籠とあるによりて、コトと訓みたれど、この二句は下の二句に對したるにても龍なること著し。舊くより籠の字ながら、タツとさへよみ來たれり。されば今は一二の古本に従ひてあらためたるなり。○海原波、加萬目立多都、海原は香具山の麓なる、埴安池をいふ。この池當時甚廣かりしこと、諸書に見えたり。さてこの池を海原とのり給へるは、その廣きが故に、潮海になぞらへ給へるは、あらざる、すべて古は、潮にもたゞの水にも海といへりしなり。加萬目は、或本に、加茂目ともありて、鴨の羣れたるをいふともいへど、なほ鴨とみたる方おたやかなるべし。○何怜國曾、何怜はすべて何事にもあれ、形容しつくされぬばかりなるをほめていふ詞、常に食物などにいひ、またもの巧なるにもいふかごとし。こゝは即、大和國を愛で給へるなり。この句一篇の眼目なり。百の辭、こゝに心をつくべし。何怜の字、オモシロキとも訓めれど、まひて改

むるまでにはあらざるべし。○蜻島、八間跡能國者。蜻島は、また蜷島とも書けり。八も、大和國の一小地の名なりしが、孝安天皇百餘年、こゝに都し給ひしかば、いつとなく、枕詞のごとく、この地名を以て、大和國に冠らしめていひならへりといへ。オキツは、書紀、神武天皇の卷に、皇興巡幸三十二年、因登腋上兼間丘而廻望國狀云々、猶如蜻蛉之聲、由是始有秋津洲之號也と見え、また、孝德天皇の大宮所の御名も、秋津島宮とあるを、蜻蛉などかけるは、右の猶如蜻蛉之聲、由是始有秋津洲之號也と見え、また、孝德天皇の大宮所の因りてなるべし。また、この書紀の文によれば、秋津島といふ名も、この時よりはこまれるなり。されど、はやく、神代紀に、大倭豊秋津島の名見えなければ、いかゞあらん。今は用なければいはず。八間跡能國者は、大和國はなり。こゝの二句は、上の何怜國曾の上にあるべきがつねなれど、すべて、事物の心に感ずることの甚しき時は、まづ、その物、その事より、うち出でらるゝものにて、あつから、詞もつよく、驚けるさまを見ゆべし。今も、村里のみならず、池中までもにぎはひたるを、深くよるとびて、歎かせ給へるなり。

●一篇の總意、この大和國は、四面みな山にして、畝火、耳梨など、きこえたるもあ

れど、ことに眺望のよろしく、景色のすぐれて、よろづわかぬとなき天香山にのぼり立ちて見晴るかせば、遠く近く、うち連なれる村々里々には、こなたにも、かなたにも、民の煙の煙立ち靡き、麓なる池の面のいと廣らかなるには、水鳥どもの飛び去り、飛び來たりなどして、まことに、まもいはぬさまなるかな、何れ國なるぞ、この嶗島大和國はとなり

天皇遊獵内野之時、中皇女命使間連老獻御歌 ○こゝも、舒明天皇なり ○内

野、大和國宇智郡にあり ○中皇女命、即間人、皇女にして、舒明天皇の御女なり、後に、孝徳天皇の后に立ち給ひて、間人皇后と申せり、女の字、考の説に従ひて、補ひつ、古義には、命を女の誤とせり ○間人連老、皇女の御乳母方なるべしといへり、御の字を補ひつるも、考に従へるなり、さるは、この歌は、正しく、皇女の上ませ給ひたるにて、たゞ、老をして、表せしめ給へるなりと、おぼゆればなり、目錄に歌の字の

下并短歌の三字あれども、一の卷には、外に例なければ、ことに補はず、八隅知之我大王乃朝廷取撫賜夕庭伊織立之御執乃梓弓之奈加弭乃音爲奈利朝獵爾今立須良思慕爾今他田渚良之御執能梓弓之奈加弭乃音爲奈利

この御歌は、皇女の、父天皇の御獵に出でたゞせ給ふを羨みてよませ給へるなり。さて、この篇二段には、わかれたれど、畢竟、おなじことをくり返してのり給へるなり、れば、その意かはることなし

○八隅知之我大王乃、八隅知之は、枕詞にて、天下を安くしろしめし給ふ意なり、我大王は、御父、舒明天皇をさし給へり、我は親みていふ詞 ○朝廷取撫賜夕庭伊織立之、朝には、手に執りて、これを撫でたまひ、夕には、御身づから、そのもとに、倚り立たせ給ひて、深く愛し給ふ意なり、伊織立之の訓は、古義に従へり、伊は發語、さてこの四句、二句づゝ相對せり ○御執乃梓弓之、御手に執り給ふ弓といふ意なり、また、うつりては、たゞ、御執といひて、弓のこと、せり、御佩之劍といふを、たゞ、御佩といひて、劍のこと、いせるも、おなじ、梓弓は、梓の木にて作れる弓をいふ、古は弓には多く、この木を用ひたりと見ゆ、されど、後には、たゞ、弓のことを、梓弓といひ、ならへり ○奈加弭乃音爲奈利、奈加弭は、中筈にて、古に、この製ありといひ、また、加は利の誤にて、鳴箭なりともいへり、これによれば、弓を射るときに、弭の鳴るべく製れるなるべし、また、或人のいはく、古の弓には、長き筈ありて、鹿角など、嵌めたるも

のなりといへり。されば、長弭か、今は、姑く、本文のまゝに訓み、弭は、弓の末をいふ。音爲、奈利は、天皇の、御獵に出で給はんとて、御弓とりしらへ給ふ弓弭の音の、近く、皇女の、おはし所へきこゆるよしなり。奈利、歎息の辭なり。されば、古人は、これを、ア、と譯したり。これは、何なりなどいふなりとは、異なり、まがふべからず。この方は、オ、アルと譯せり(以上一段)

○朝獵爾、今立須、良思、暮獵爾、今他田、落良之、朝獵は、朝に獵するをいひ、暮獵は、夕に獵するをいふ。今立須、良思は、今出で立ら給ふらしとなり。良思は、この事によりて、かの事を想像する辭なり。さて、この朝獵爾、暮獵爾は、朝獵に、夕獵にて、ての意なり。朝獵せんとて、夕獵せんとてといふも、おなじ。花見に行くと、夕獵にて、行く、花見せんとて行く、みな同じ意なるを、おもふべし。たゞ、獵といふべきを、朝夕におけて、文をなし給へるまでなりなど、いへれど、さには、あらじ。たゞ、この朝獵の詞は、上の朝庭、夕庭とある。朝夕の詞に、應じたりといふは、さることなり。この四句、また、二句の對なり。○御能、能、梓弓之、奈加弭、乃音爲、奈利、これは、前段の四句、おなじ、び、くり返して、のり給へるなり。おなじ、思の、切なる時は、おれし、ら、ず、

なむことを、幾たびも、くり返さるゝが、つねの、ならひなり。たゞ、調のためにも、とめて、添ふるものには、あらず。今も、皇女の、もし、男にても、あたまし、かば、即、御供も、仕へまつらましと、羨み、歎き、給ふ御心の、おのづから、あらはれたるなり。されば、この御歌の主意は、全く、こゝにあるなり(以上一段)

○一篇の總意、かしこきわが天皇の、朝とも、いはず、夕とも、いはず、つねに、愛撫し給へる梓の弓の、奈加弭の音の、いさましくも、聞こゆるは、(一段)朝がりしたまはんとて、夕獵し給はんとて、はやくも、今朝は、出で立たせ給ふらし。梓の弓の、奈加弭の音の、いさましくも、きこゆるは、となり

反歌、これは、カ、ヘ、シ、ウ、タと訓みて、長歌一篇の意を、約めても、あるは、長歌に残れる事をも、短歌に、うち返して、よむ故の名なりといへり。但、伴、菫、の、閑田、次筆に、は、上、畧、此、頃、日本、後、紀、を、補、へる、日本、逸、史、を、見る、に、延、曆、十、五、年、夏、四、月、丙、寅、宴、掖、庭、酒、酣、反、歌、曰、氣、左、乃、阿、沙、氣、奈、呼、登、以、非、都、留、保、登、々、擬、須、伊、萬、毛、奈、可、奴、加、比、登、能、綺、久、陪、久、この文、或は、正しきもの、に、あらず、といへり。是、前に、長歌、な、ければ、か、へ、し、う、た、ど、は、い、は、れ、ず、み、じ、か、歌、と、訓、ず、べ、し、といへり。田中、芳、樹、の、古、風、三、體、考、にも、この

歌を引き、かつ古今集異名序の、逮于素盞烏尊到出雲國始有三十一字歌、今反歌之作也とあるをばじめ、種々の例證どもを引きいで、ミツカウタとよむべきよしを詳論せり、げにも、ことわりありげなり。されど、カハシウタと訓むべきにあらざるといふは、さもあらんか。ミツカウタとよまんは、強ひたるに似たり。よみてあらずに、これは、或説に字音のままにマンカ(ハンカ)と訓むはまた別の説なり。これも、考ふべき説なれど、今は、わづらはしければいはずと唱ふべしともいへる方、或は、穩やかならんか。さるは、この集中、三體の歌を、今はたゞ長歌短歌旋頭歌といひならひて、たれ一人あやしむ者もなければ、實は、よく考ふる時は、上の二體のみ訓讀して、下の一體を音讀するも、ころゆかず。古今集異名序にも、長歌短歌旋頭混本とつられ、また本集中、端詞の、すべて、漢文さまなるなど、かれこれ、おもひ合はすれば、當時は、もしは、いづれも、音讀せるには、あらじかとおぼゆればなり。さては、端詞の處には、かならず、何々歌并短歌とありて、長歌の奥にいたりて、反歌と書けるは、筆者の、勞をいとひて、書すくなき同音の字をかり用ひたりとの、三體考の説の如くには、あらで、特に、通俗なる同音の字をかりて、そのヨミを知らせたるには、あらじか。

もし、これを當たれりとせば、之に對する長歌二字の音讀すべきは、もとよりなり。たゞし、反は、つねの反の字には、あらで、もとは段の草體より訛れるものなりといへり。げに、さることなるべし。今、俗にも、段別、段物を反別、反物など、書けど、反に返、幡などの音こそあれ、丹などの音の字番の上にも、見えねばなり。なほ考ふべし。さて、この、長歌に短歌を添ふることは、きはめて、古には、みえず。この御代(舒明天皇)のころよりや、はじまりつらん。

玉刻春、内乃大野、爾馬敷而朝布麻須等六、其草深野

上の長歌には、天皇の今、いでたゞせ給ふよしをのりたまひ、こゝにては、その御獵場のありさまをよびしやりて、羨ませ給へるなり。

○玉刻春、内の枕詞なり、また命にも、世にも、かけていへり。年月の經ゆく間の意といふ。さて、内と續くるは、現とかけたるなりとぞ。現は、人の世に在る間をいふ。○内乃大野、端詞にみえたる内野なり。大野とのたまひたるに、その御獵場の廣きこと知られたり。次に、馬敷、而とさへあり。○馬敷而、御馬を、あまたの御供人となり、給ふよしなり。○朝布麻須等六、朝に、野をふみわけて、獵し給ふらんとなり。

長歌には朝獵、暮獵とあれども、こゝにはまづさしあたりての朝獵の事のみを給ひて、暮獵の事は言外におき給へり。○其草深野。即内乃大野をさしたまへり。草深野とは草木どものいたく生ひしげりて、あれまされる野をいふ。かゝる野を、こゝに朝まだきにふみわけ給ふ、いかにその獲物の多からんと、おしはかり奉らるゝなり。さて、この深野を、フカヌと訓み改めたる本もあれど、今は舊訓に従へり。そは、しか訓み改めては、たゞ尋常の草深き野ときこえて、なか／＼に御獵場の景色を損ふこと、のなきにしもあらじと思へばなり。考の説こそ、あだやかならぬ。この深の字を、フク(關)といふ動詞の義訓とすれば、こどもなかるべし。二の卷に、佐夜深而など、みえたる深も、おなじすべて、このフクといふ詞は、たゞ深くなる意のみにあらず、ものゝやうやく、末さまになる意ふくみれば、あつから荒れまされる状見えたり。月ふけて、露ふけて、秋ふけてなど、よく味ふべし。さて又、こゝの野を、諸注、いつとはいはねど、大かた、春野とせるがごとく、槍抓には、あきらかに春之繁野とさし、譯したり。されど、これ、六の卷に、朝獵爾十六履起夕狩爾十里陷立馬並而御獵立須春之茂野爾とあるに、よれるにて、今の御歌の上には、さらに見えぬと

り、舊訓(フカヌ)によれば、かへりて、秋野のごとくもきこゆるをや。こゝにもかくにも、歌は道理を先とすべきものならねば、詞は、おほらかにして、意の深きがつねなるを、古人のは、こゝに然りとす。花を雲にまがひ、紅葉を錦とみし類も、たゞ、うち見てふと、心にちもへるをいひ出でたるなれば、草のいたく、生ひ繁れる野邊など、見もし、おもひもやりては、いつにても、草深野といはざらんや。されば、かゝる處は、證なき限は、みだりに、いつなど、必きは、いふべきにもあらざるべし。

○總意 あはれ、わが、父天皇の内乃大野の御獵場に出でまして、數多の御供人等とともに、御馬を並べさせ給ひて、朝獵をし給ふらん。暮獵をし給ふらん。その草深野よ、いかばかり、多くの鳥獸どもの、かくれふすらん。隨ひて、御獲物もかぎりやなからんと、こゝながら、御興のほど、とこそ、おもひやり奉られて、いとどうらやましどなり。

幸説 岐國安益郡之時、軍王見山作歌。○書紀、舒明天皇の卷に、十一年十二月己巳朔壬午、幸于伊豫温湯宮。十二年夏四月丁卯朔壬午、天皇至自伊豫、便居厩坂宮。と見えたり。この春、路次、讀岐へも、行幸ありけんといへり。○軍王、傳つまびらかなら

「燈」に供奉の軍をつかさどる人なるべし、姓名しられずといへり。震立長春日乃、晩家流和豆肝之良受、林肝乃心平痛、奴要子鳥、卜歎居者、珠手次懸、乃宜久遠神吾大王乃、行幸能山越風乃、獨座吾衣手爾、朝夕爾、還比奴禮婆、大夫登念有我母、草枕客爾之有者、思遣鶴寸平白土、綱能浦之海處、女等之燒鹽、乃念曾所燒吾下情。

○この歌、久しく旅にありて、郷を思ふ情のたへがたきをのべたるなり。端詞に「見山作歌」とあれど、甚ふぼつかなきことなり。山風の寒きに催されて、家をおもへるさまこそあれ、見山の意いさゝかも見えねばなり。されば諸註の論もあれど、あつちにはしければ今は省きつゝ、
○震立、長春日乃、晩家流、和豆肝之良受、震立は春日の形容なり。長春日乃、晩家流はきこえたるが如し。和豆肝之良受は別著も知らずの意、長き春の日の、晩れぬといふ、その辨別も知らずとなり。この「ツギ」の詞「ツギ」(便)などいふと、同例の詞なりといへど、外に見えねば、誤とする説もあるが中に「古義」には「豆は衍文にて、この句を「ツギ」モシラス」と、六言に訓みてあるべしといへり。そは、四の卷に「夜盡云別不知」十一の卷に「月之有者明覽別裝不知而」などあるを例とせるなり。なほ考

ふべし。さてこの四句に春のうららかなる空ともいはず、思ひ沈める状、あらはれて見ゆ。○村肝乃、心の枕詞にて群肝なりといへり。即、五臟六腑をさせり。この物、腹中に凝り群がれば群臟腑の凝るとついでたるなりといへり。心の語義、凝なりといへばなり。神代紀に「田心姫命なども見えたり。○心平痛、今のことばにていへば、「心」は「心」なり。山を高み、風を寒み、などみな同じ「心」をがと譯し、「心」を「心」と譯すべし。さてこの句下の「卜歎居者」に「かゝれり、痛は、郷をおもふ情に堪へずして、痛みくるしむをいふ。○奴要子鳥、卜歎居者、奴要子鳥は、卜歎の枕詞にて、鶯をいふ、子は、そへたるなり。この鳥、鳩などの如く、咽のうちにて鳴くゆゑに「裏歎」とついでたり。卜歎は、浦歎なども書けど、裏歎の方、正字にて、表にあらはさず、そのひに歎くをいふ。さてこの句は、いま、從駕の旅なれば、たとひ、家をおもふとも、それは私情にて、表にあらはすべきならぬは、憚れるさまをいへるなり。○珠手次懸、乃宜久、珠手次は、懸の枕詞にて、珠を飾れるがもとにて、たゞはめてもいへるなるべし。さてついでたる意は、つねに、褌をかけてなどいふにても知らるべし。懸乃宜久は、言にかけていふこと、の宜しき意なり、言にかくとは、なほ、詞に出だすと

いはんがごとし、この句六句を隔て、下の還比奴禮婆へかゝれる句なり、あよそ旅にしては家に還るばかりうれしきはなきを、その還るといふを言にかけていふに、打ちあひのよろしく、山風のかへるく、吹きぬればといふ意なり、玉の小琴に懸乃宜久を、一首の眼なりといはれたれど、なほ還比奴禮婆をこめて、まか心得べきなり、○遠神、天皇を尊みて申しまつるなり、天皇は凡人の境界に遠くはなれおはします意なるべし、○山越風乃、山のあなたより、吹き越して来る風のみなり、山越とあるによりて、この風を、おはかたは、寒風と釋けども、必まか見ずてもありなん、霞立長春日乃云々、とつゞけるさま、おもふべし、この山、即行宮の在る所なり、○獨座、吾衣手爾、獨座は家をはなれてなり、妻子とわかれてなり、衣手は袖をいふ、○朝夕爾、還比奴禮婆、朝夕は絶えずの意なり、下の反歌に、寐夜不落とあれば、こゝも、一日のみの意ならぬは知られたり、還比は、幾度となく、過ぎ去り、過ぎ来るをいふ、たゞ、還りの延びたる詞のみとはいふべからず、すべて、詞は、處により、時によりては、延びもし、約まりもすべけれど、その意、また、おのづから、異なるが多しと知るべし、散らふ、散らしくは、とも、散るの延びたるもの、見らくは、見る、云はく

恨むらくは、云ふ、恨むるの延びたるなりといへど、皆、いつれも、その用處のあなじからざるを思ふべきなり、さて、こゝの句どもの意は、なほ、上の懸乃宜久の下にいへると、合はせ考ふべし、○大夫登、念有我母、かねては、よろづに屈する事もなく、ア、バ、レ、大丈夫と、おもひはこれる我さへもとなり、念有は、おもひてある意、燈に、めめしきことを思はせたるなり、われと、わが上を引き揚げて、さて、つよく、あどす爲なり、云々、これを抑揚の法といふ、この人、軍王なれば、いよ／＼めでたしといへり、大夫、諸本、丈夫の誤なりとて、改めたるも、あれど、集中、多くは、大夫とかければ、今は、古きに從ひたり、○草枕、客爾之有者、草枕は、旅の枕詞なり、古の旅は、今の如くならず、宿るべき處もなければ、たゞ、草を引きむすびて、宿りしより、いひそめたるなるべし、之は、つよめの辭、俗にソレなど譯すべし、○思遣、鶴す乎白土、思遣は、愁情を遣り、思むるなり、今の想像の意にあらざ、愁情こゝにては、即、本郷を、おもふ情をいふ、鶴すは、便著にて、方便の意なり、白土は、知らずの古言なり、○網能浦、之、海處女等之、燒鹽乃、網能浦は、和名抄に、讃岐國、鞆足郡、津野郷あり、その浦なるべし、といへり、但、この網の字、古來網と書ける本もあるによりて、カ、ミ、ノ、ウラと

よむを正しともいへり。こは行囊抄に讃岐國阿野郡に網浦あるなどを證とせる
 なり。されど、これもしこの歌などをもとせしむるならんには詮なし。いづれかあ
 れるならん。今は知られず。海處女等は海人のを定めともなり。をどめは、すへて
 壯なる女をいふ。處女の字に泥むべからず。集中また童女未通女なども書けれど、
 みなたゞ若きを主としたるまでなりと知るべし。こゝも鹽を汲みやく葉は、むね
 と壯なる女のするわざなれば、いへるなり。海は海人の略書。燒鹽乃乃の下、こ
 の詞ふくみたり。さてこの三句は下の念言所燒といはんための序なり。處の狀
 をもてつけたり。念言所燒吾下情。わが下情の念ひやくるといふ意なり。句
 を返してこゝろうべし。念ひやくるとは胸のいらだちて焦るゝがごときをい
 へり。下情は裏のこゝろにて表にあらはれぬをいふ。これも憚れるにて。上の裏歎
 の詞に應じたり。この句言の辭ことに心をつくべし。燈に供奉といひ、丈夫といひ、
 かく思ひやくる事いともくす。なまきことよとの心といふなり。そふまじきす
 ぢ。そふ敷なりといへり。これこの辭、ちもまが故に、こゝにては、ちかきこゆるな
 り。

○一篇の總意 うら／＼と霞みわたれる長き春の日は、さらぬだに暮らしかぬ
 るが、つねのならひなるを、その長き日の暮れ行く辨別もしらず、わが本郷のこひ
 しまにたゞそなたの空のみうち守られつゝ、鷗島の聲のごとく、しのび／＼に歌
 き居れば行宮の山のおなたより吹き越して來る春風の、この穢居る袖に、絶えず
 行き遣り行き遣り、吹きぬれば、その山のおなたは、即ち本郷なるからに、ことわ
 はれの、身にしみては、かなくも、その遠る、といふ言すら、いとよなづかじきに堪へ
 ぬを、從駕のわが旅ともしらず、風は、こゝろにもまかすかなど、かねては、大丈夫
 と思へるわれも、旅情の慰めがたきに、このわたりの、綱の浦の海處女どもの焼く
 鹽のごとく、わが下こゝろの、わりなくも、思ひ焼くること、のくるしきよとなり。

反歌

山越乃風乎時自見、寐夜不落家在妹乎、懸而小竹櫃。

上の長歌には、もはら、晝のさまをいひ、こゝには夜の狀を述べたり。

○風乎時自見、風が時なさになり。いつともいはず、吹き來るをいふ。長歌に朝夕
 とあるに、なじトキマクを、たゞに、非時の意とのみあもふべからず。この方は、か

その道のほどなる、兎道の行在所の借慮のよろづおろそかなりしさまのをかじ
かりしを、今も忘れがたくてよまれたるなればし。たゞし、この行幸は、紀に見えず、
濡れたるにや。齊明天皇の紀に、五年三月庚辰、近江の平浦（ひらうら）に行幸ありしよしは、見
えられど、それにはあらし。この時、同天皇は、川原宮にましまさればなり。どにもか
くにももし、この歌、齊明天皇の時のならば、次の後岡本宮の代の下にもつらぬべ
きをたゞ、この一首のために、川原宮を標記したれば、皇極天皇の時のとさだむべ
きなり。

○金野（かねの） 秋野なり。集中、なほ、金芽子（かねめこ）、金風（かねかぜ）などあり。秋は、五行の金にあてたればな
り。○美草（みくさ） 美草、美はほめたることば、眞草といふも同じ。たゞ草なり。薄のこと
なりとは極めいふべからず。薄も、もとより、草なればほめては、ミクサ（みくさ）とも、マクサ（まくさ）
ともいふべし。されど、これ、たゞちに其の名なりとはいふべからず。又、この草便よ
ければ、多く、屋に葺き用ふべし。されど、屋を葺けるは、必、この草なりとは限るべか
らず。されば、こゝは、たゞ種々の草どもを葺りとりて、屋に葺けりとすべし。この美

草を、千草（せんそう）に作れる本さへあり。○屋（や） 宿里之、宿りて在りしなり。たゞ宿りしと
いふとは、異なり。在りといふ詞に心をつくべし。○兎道（うさみち） 乃宮子、兎道は、山城の宇
治なり。こゝは、大和より、近江への路次なれば、行宮をたて、とまらせ給ひしなる
べし。されば、宮子といへり。宮子は、宮所なり。○借（か） 五百磯所念、借五百は、借慮な
り。わがやどれりしをいふ。されど、これにて、行在所の、すべてのさまおもひやら
るゝなり。磯は、例のつよめの辭、所念は、おもはるゝにて、忘れがたきをいふ。さて
この句九言なり。

○大意 近江に行幸のありしとき、をりしも、秋のことなりければ、野邊に句ひた
てる、千くさ百くさ葺りとり来て、屋に葺きて、やどりたりし、兎道の行在所の借慮
の様かはりて、なかく、にめづらかなりしが、今にもおもひ出で、忘れがたしとな
り。

後岡本宮（のちのくにのみや） 御宇天皇代、○後岡本宮、國郡川原宮に同也。○天皇、齊明天皇にて、皇
極天皇の重祚なり。

額田王歌
萬葉集釋義
四七

熱田津爾船乘世武登月待者潮毛可奈比沼今者許藝乞菜

この歌は書紀に齊明天皇七年春正月丁酉朔壬寅御船西征始就于海路甲辰御船到于大伯海備前云々庚戌御船泊于伊豫熱田津石湯行宮とありてこの時額田王も御どもにてよまれたるなるべし

○熱田津、伊豫なること右の書紀の文にてしるし○船乘世武登月待者、船に乗らんとて月まてばなり登はどての意なり月待者はおもては海上のくらくて行くべき方の知られれば月の出づるをまちてさて乗り出でんとの意ながら實は潮を待ち給ふなり潮と共に月の出づればなり○潮毛可奈比沼、船の漕ぎ出でぬべく潮のかなへるをいふたかなふといひて潮のさし來たる意にきこゆるは上よりのついでのためでなければなり味ふべし毛の辭にものづから月も既にさしのほり沼の辭に潮も今さし來たる意あらはれたりこの句も實は月も出でぬとの意なるをかくかへていへるなりさてこの二句ごとにかく主客違つたるは歌に趣あらせでなり○今者許藝乞菜今者といふに時をまち得たるさま見ゆ。許藝乞菜は漕ぎ出でんななり菜は歌辭かゝる所の判を引の古言なりとて

出でなは出でむ行かなは行かむと同意とするはあろそかなりみなむの省かりてなのそはれるものなり四の卷に吾者將戀名なども見えたり乞は豆の誤なりとてコキテナと訓めるもあれどなほ出の借訓なりといふ方あたやかなるべし集中乞通來爾乞吾君などありこの乞は發語なり

○大意 熱田津より船出して行かんとおもふにあやにく暗夜のころにて海上あぼつかなければ月まてるほどに月のみならずおもひの外に潮もみち來てうれしくも船出すべくなりぬ今は疾く漕ぎ出でんなどなりたゞしこの歌左註によりて御製とする時はその意もまたものつから異なるものと知るべし幸于紀温泉之時額田王作歌 ○紀、紀伊國なり○温泉牟婁温泉なり○この行

幸は同天皇四年十月のことなり

莫囂圓隣之大相七兄爪調氣吾瀨子之射立爲兼五可新何本

この歌端詞にもあるがごとく齊明天皇の紀伊の温泉へ行幸の時王も供にてその途上などにて夫の君を慕はしくあはしてよまれたるなるべしさてこの歌集中の難讀とて古來説々あれどもいつれもげにどうべなはるべき

も見えぬ。また實は、いかに考ふとも、これぞ正しかりけると、きはめらるべきにも
あらねば、かゝる類は、すべてさかかん方なく、にちたやかなるべし、されど、
また試に訓み釋かんも、いたづらごとく、はいふべからず、故に、余はいま諸説を考
へわたして、まづ、最も、王の口調に似たりと、おぼゆる訓どもをまじへとり、さて、そ
れによりて解釋をも施さんと、はするなり、見ん人、その心してよ

○莫器圓隣、香具山なり、大和國なること上にいへり、○大相七兄爪鬮氣、國見
がさやけさになり、國見のこと上に、既にいへり、○吾瀬子、瀬は夫なり、吾も子も
親めることばにて、こゝは、大海入皇子命(天武天皇)を指せりとすべし、この詞、妻よ
り夫をよぶに用ふるは常ながら、また、たゞ、女より男を親みても、いひまた男どち
も互に敬愛の情をあらはす時などには、なほいふ詞なり、○射立爲兼、五可新何本、
立ち給ひてありけん、嚴櫃の木のもとなり、射はつよめの辭なり、兼は過去の想像
辭、嚴櫃の嚴は、清淨にして齋ふ意、書紀、垂仁天皇の卷に、以天照大神、鎮座於嚴櫃之
本而祠之、なども見えれば、こゝも、神の座す所にて、まかいへるなるべし、たゞし
木は、櫃に限るにあらず、集中齋規、また忌杉などある、みなおなじ類なり、沉くは神

樹、齋木などもいへり、今も世に、ふるき社などに、神木として注連はへたるがあるは、
即ちこれなり、さて、この結句、嚴櫃が、本といひは、なちたるに、おのづから、あかづう
ち眺めらるゝ、状あらはれて見ゆ、夫君の、嘗てこの山のこの嚴櫃の木のもとに、遊
覽し給へりしことなど、聞きつたへられたるが、今その夫君にわかれて、獨行幸の
御供仕へまつらるゝなれば、このわたりをは、過ぎがてにせられしも、ことわりな
り

◎大意 わが夫の君のかつて天の香具山に登りまして、國見し給ひけるに、をり
しも、雲霧の晴れわたりて、四方のながめの、飽かずおもほしめしけるよし、のたま
ひけるが、今、かく悲しくも、獨わかれ來ぬる旅の空にて、その山を見れば、その立ち
給ひけんいづがしが、もとよ、あはれなづかしくも、おぼゆるかなとなり

さて、右の歌は、むめ二句は、荒木田久老が
莫器圓隣之、大相七兄爪鬮氣、吾瀬子之、射立爲兼、五可新何本

と訓めるにより、三句以下は、契沖が
莫器圓隣之、大相七兄爪鬮氣、吾瀬子之、射立爲兼、五可新何本

と訓めるにされるなり。久老の莫囂圓隣をカクヤマと訓めるは、まづ囂しきことなきは耳無しなり。圓は山の形にて、倭姫世記に圓奈留有小山支其所平都不良止號支とも見えたれば、莫囂圓は耳無山なり。この山に隣れるは、香具山なればなりといへり。大相土は續紀に相土建帝王之邑とあるによるに、大に相土は國見なるべし。但し、これは七を土の誤とせるなり。兄は一本、元（ナ）に作れば、爪（ナ）調の二字は調の一字を誤れるにて、元（ナ）調氣はサヤケミと訓むべきなりといへり。期も古寫の一本によれり。とぞかくて、一首の意は、わが夫の君の香具山の國見のさやけきにめで遊びおはしきして、もしもこの度の行幸におくれ給は、いつかは逢ひ奉らんと歎き給へるよしなり。さて、これは、夫の君を中大兄命（ナ）天智天皇としたるなり。そは、この命も、この時、皇太子にて御供仕へ奉り給へればなり。されど、よくおもへば、然にはあらじ。これを中大兄命として、この歌、いかに考ふとも釋き得られじ。さるからに、つひに詞もといのはず、意も通らぬやうになるなり。この射立爲兼（ナ）の兼も、甚あやし。されば、この訓も、四五の句は用ひられぬなり。なほ、次々この王（額田王）の歌の所をあはせ考ふべし。

契沖の莫囂圓隣の四字をユフゾキと訓めるは、舊訓にされるなり。この訓は、仙覺の施したるなりといへり。かくよめるは、いかなる故とも知られぬ。代匠記には、莫囂は無喧なり。夕にいたれば、靜かなれば、義を以て莫囂を夕とす。圓隣は、十五夜に對していへり。圓月に隣るなり。源氏に、五六日の夕月夜ともいひたれば、今は、十日餘なるべし。莫囂は、圓隣を待ちて、夕とよまれ、圓隣は、莫囂に依て月とよまる。引きわけては、ともによまるべからずといへり。また、大相七兄、爪調氣、この調の字、調なるべし。調は、雲状と注したれば、おほひなせそくも、勿覆雲とよむべし。云々、いたし、せりけむは、立ちて、我を望みて待つなり。いつか、しがも、とは何時歎己が許なり。然れば、月夜に立ちて、わが方見望むらん、妹が許に、いつか、歸り到らんとなりといへり。代匠記、本によりては、こゝに引けると、いたく違へるもあり。たゞし、これは、額田王を男として釋けるにて、誤なり。されど、訓は、はじめ二句こそ、ことばもなされ。下三句は、まことにあだやかなり。考もその意は、もとより異なれど、これと同訓なり。上の荒木田氏の初二の句の訓は、なほ、甚あぼつかなきを、契沖のこの下三句の訓は、うごくまじくあぼゆ。さて、この歌、元來つねの書きさまならぬがうへに、誤字

さへすくなからぬば説どもの多きは前にもいへるがごとくなれど今はさしも
用なければみならしつ

中皇女命、往于紀伊温泉之時、御歌 ○中皇女命、上に出でたり
君之齒母、吾代毛所知哉、磐代乃岡之草根乎、去來結手名

この御歌、たしかには知られぬと、上と同じ度なるべし、次の御歌をさもふに、道の
ほどにて、この岡わたりに、旅やどりし給はん時など、よませ給へるにや

○君之齒母、吾代毛所知哉、君は御兄の中大兄命を指したまへるなるべし、そは、
この御歌、上と同じ度の行幸の時とすれば、この命も、御供仕へまつり給へればな
り。齒も代も、ともに、よはひをいふ。所知哉は、領知んにて、神ぞしるらんなどの
しるにあなじつかさどる義なり。この詞、こゝにきるゝにあらざ、下の磐といふに
つゞけて心得べし。哉の字、諸本、武の誤としたるも、多けれど、集中外にも、雖見不飽
有哉また、鴨渡良哉、但これは、下につゞかず、切れたる例なれば、今とは、いさゝか異
なれど、など、なほあれば、さる本のなき限は、改むるにも及ぶまじきなり。○磐代、
同國日高郡なり。さて、この磐といふ詞、この歌の主眼なり。○岡之草根乎、去來結

手名、草根は、たゞ草のことなり。月のことを、月夜などいふと同例なり。去來は、
誘ひ立つる詞。結手名は、結びてんなり。結びてんなは、結びてあらんなり。な
は、例の歎辭、なほ、上の、熟田津の歌のところにいへるを、合はせ考ふべし。草また、松
が枝などを結びて、ゆく末長く、契をかくること、は、いにしへ、常のならはしなりし
なり。甘の巻に、夜知久佐能波奈波宇都呂布等、夜波奈流麻都能左要、太平和禮波牟
須波奈外にも多し

○大意 磐は、どこしへなるものなれば、人のよはひを領知なるべし。されば、君が
よはひの末も、わがよはひの末も、領知んその磐と名にちへる、めでたきこの岡の
草根を、いざ、疾く結びて、長壽のほどを契らんとなり

吾勢子波、借廬作、良須、草無者、小松下乃草乎、荊核
この御歌も、上のとあなじ時によませたまひたるなるべし

○吾勢子、上に、君どのたまひたるに同じく、御兄中大兄命を指したまへるなり
○借廬作、良須、借廬上に既にいへり。作、良須は、作りたまふといふ古言なり。宿
りたまはん料なり。いにしへ、旅にて、處々に借廬を作りてたゞやどりもし、またあ

もしろき處などには、あそびても居たりと見ゆ、三の巻にも雷之上(雷丘なり)爾(爾)爲須(爲須)鴨(鴨)などあり○草無者、草の字こゝに、カヤといふは屋を葺く時の料なればなり、舊訓のまゝなり、いにしへ何草にても屋を葺くときの稱をつねに、カヤといへり、今の世、茅といふ一種の草のあるも、専ら、屋を葺くに用ひられしよりの名なるべし、古事記上巻に、以鶴(鶴)羽(羽)爲(爲)葺(葺)草(草)造(造)産(産)殿(殿)とも見え、たれば、必草ならでも、なほ、しかいひしなり、これ昔、その用につきていへるなり、上に、額田王の歌に、美草(美草)葺(葺)葺(葺)なといへるは、その種々の草なるを、あもはせたるにて、體につきていへるなり、さて、この句は、葺草をもとめて、もしも、とめ得たまはぬならば、どの意なることはいふまでもなければ、實はいまだ、御兄の命の、たづねありき給はぬさきに、勞したまはざらんやうに、かくは、のたまひたるなり、そは、今もつねに、もし無くば、これを用ひよまた、それよくば、云々せよなどいふと、もはら、同じ詞づかひなるを、あもふべし、皆、かなたの心をさぐりていふことなり、さればまた、あつから、さし、叩いていふ意となるなり、こゝも、しかなり○小松下乃草(小松下乃草)平(平)蒔(蒔)核(核) ことに、小松が下の、のたまひたるは、あつから、ふさはしき草どもの、そのわたりに、有けんともいふべ

けれど上の御歌によりて思ふに、尙いはひ給ひたるなるへし、松は千歳のものなればなり、草こゝに、クサとよめるは、本居翁のよまれたる(古事記傳)によれり、この草の字、うつりては、やかて、カヤとも訓みたれば、舊訓(カヤ)のまゝにてあるべくや、されどなほ思へば、こゝは體、即ち、實物を主としてのり給ひたる處なれば、クサと訓まん方、まさるべく、あほゆ、蒔核(蒔核)は、からせ給はぬといはんことし、なほ、この詞のこと上の名、告沙(告沙)根(根)のところにいへるを見るへし

○大意 吾勢子(吾勢子)は、いま、こゝに、しも、借(借)虚(虚)をつくり給ふ、葺草(葺草)はいかに、もし、も、とめかね給はば、同じくは、かの小松が下なる草どもの、ふさはしきを、蒔(蒔)りとり來て、用ひ給はぬ、松は、千とせのものにて、めでたければ、となり
吾欲(吾欲)之(之)子(子)島(島)羽(羽)見(見)遠(遠)底(底)深(深)伎(伎)阿(阿)胡(胡)根(根)能(能)浦(浦)乃(乃)珠(珠)曾(曾)不(不)拾(拾)
この御歌は、上の二首と同じ時には、あらじ、子島(子島)わたりに、遊びまして、よませ給ひたるなるべし

○吾欲(吾欲)之(之) わが、かねて見まはしく思ひしなり○子島(子島)羽(羽)見(見)遠(遠) 子島(子島)所在(所在)つまび
あかならぬと、當時聞えたる所なりしなるべし、古義に、名草郡和歌山近傍に、見島

とてあるが、それなるべしと記したれど、地理に合はぬ心地すれば、甚ちほつかなし。見遠は、見しものをなり。この句、舊本「野島波見世追」とあれど、前後の句にうち合はねば、今は或本の方を用ひたり。野島は、上の磐代と同じく、日高郡にして、日高川の末、鹽屋浦の南にありて、景地なるよし。又、その海邊を、阿胡根浦といひて、貝の多くより集まる所といへり。見世追は、わがせこが、われに見せ給まひし意なり。さて、こゝの子島の、さばかり名高かりしにも、似ず、いつことも知られぬを、おもふに、或は、もとは、同じく野島とありしを、野の字の偏などのかけて、ついに、子島と寫し、あやまれるには、あらじか。予と子と、よく、字形の似たればなり。また、文字に誤なしとすれば、もし子島も、野島わたりなどにありしか。また、異處ながら、子島にも、野島にも、遊び給ひしかば、かく、二かたに傳へたるにも、やあらん。されど、なほ、その間、遠きところには、あらざりしなるべし。とにも、かくにも、この御歌にては、この二島とも、阿胡根浦より、いたく、離れたる處として、は、釋くべからず。尙よく考ふべきなり。○底深伎、阿胡根の浦の、清くすぐれたる意の形容なり。略解に、この句をソコキヨキと訓めるも、その意を得てなり。○珠曾不拾、珠は眞珠はもとより、たゞう

るはしき石貝をも、廣くいへり。曾は珠を拾はぬを歎き給へる辭なり。この辭にて、子島、また野島より、道程の幾許もなき意あらはれたり。不拾とは、この浦に遊ばぬ意なり。かゝるいひ、ひさま歌には、つねのことなり。不拾をヒリハヌと訓みたるは、集中假字書には、いづれも、東歌を除く。比利波牟、比利布などあればなり。なべて、ヒロフといふは、やゝ後なりと見ゆ。さて、この御歌、底深伎以下を、阿胡根の浦にも遊びたれど、その浦の底の深くて、珠の拾はれぬのみぞ、口をしきと歎き給ひたるなりとやうに釋けるが多けれど、こは、歌の釋きやうとも、あぼえぬがうへに、一首の意も、とほらねば、用ふべからず。そは、味ひてさとるべし。

◎大意、この旅にて、わが、かねて見まくおもひたりし子島は、見しものを、なほ、あかぬ心に、かの底すみわたりて、景色のすぐれたりとき、つる、阿胡根の浦にも行かましと、おもへど、かなはざるぞ、いと、残りをしきとなり。さて、右の御歌ども、左註に、右、檢山、上、憶良、大夫、類聚歌林、曰、天皇御製歌云々とあるによれば、天皇のよませ給へるなり。されど、例を、おもへば、右、幾首とあるべきに、然らざるは、末の一首のみのことなるべし。さては、或本の「見世追」とあるは、天皇の、御、供人等に見せ給ひし

意となるなり

中大兄 近江宮御宇天皇三山御歌 ○中大兄 上に、度々見えたり、天智天皇のま
だ、皇子にておはしける時の御名なり。註本、この大兄の下、命の字を補ひたるも多
けれど、日本紀などにも、句、大兄、安閑、古人、大兄など配し、ことに、この中、大兄にはい
づこも、命の字なければ、もとのまゝにてあるべし。大兄は、いにしへ皇子たちの中
にて、ことに寵愛し給ふを申す名稱なりしなるべしといへり。されど今もふに
たゞに寵愛し給ふのみにはあらず、大兄ひてすぐれ給ひしをめでへの稱なるべ
くや。紀には、大兄をオヒチと訓あり。ヒチは老成の義、中をナカチとよめり。○近江
宮云々、これは後人の註なり。○三山御歌、三山は、即高山、雲根火、耳梨なり。い
づれも、大和國にありて、その間、各五十町許づゝありて、鼎足のごとし。歌の上の

御の字は、目錄に補へるによれり

高山波雲根火雄男志等耳梨與相諍競伎カミコト神代カミヨ從如此爾有良之古昔母然爾有許曾虛ヒコノ
蟬毛セマ婦平フナヒラ相搭アヒナ良思ヨシ吉キチ

この御歌は、反歌の「高山與耳梨山與云々」の御歌によりて、播磨にてよませ給ひた

るを知るべし。この國におはしまして、その風土記の故事をきゝたまひて、今人の、
妻あらしひすることの疑を解き給へるなり

さて、この一篇、二段にわかれたり。相諍競伎までにて一段、以下また一段なり。
○高山、即ち香具山なり。高をカクとよむは、音をとれるなり。この高の字、郭とも
通ひて、古、カクの音もありしなり。香山をカクヤマと讀むとは、同例にあらずとい
へり。然るべし、但し、萬葉假字樹には、香具山と書くを略して、香山とも書れば、音の
通ふをもて、高山と書けるも、かゝ山と訓むべしといへり。されど、香山は、日本紀に
も、香山此云介遇夜麻とみえ、古事紀にも、香山とみえたれば、なほ、香具山の略書に
はあらず。○雲根火雄男志等、雲根火は、畝火山にて高市郡にあり。雄は辭にて、
つねにいふとまじ。男志は愛しなり。めでられて、捨てがたき意。等は、とてな
り。○耳梨、香具山と同じく、十市郡にあり。さてこの三山のうち、高山と耳梨とは、
男山にして、雲根火は女山なり。この雲根火を女山といふは、古事紀、安寧天皇の條
に、御陵在畝火山之美富登也とあり。日本紀、懿德天皇の卷に、畝傍山、南御陰井上、陵
などあるにて知られたり。カドは女陰のごとくなればなり。もとは、その山を鎮せる

神の男神、または女神なるなどより、いひはじめしなるべし。○相諍競伎、高山と耳梨山と、雲根火の女山を得んとて、あらしひしよしなり。伎の過去の辭、むかしがたりに聞き給へることなればなり。(以上一段)

○神代從、如此爾有良之、神代は、こゝらにては、たゞ上古といふ意にて、ひろくさしたるなり。今は、即ち、播磨風土記に見えたる三山のあらしひのありし時代をいへるなり。從は、今もこの字を書きてヨリとよむ、あなむことなり。如此爾有良之六言の句なり、かやうにあるらしなり。如此は、今人の妻あらしうことをさし給へるなり。良之は、上の今立須良之のところにいへり。○古昔母、然爾有許曾、古昔は右に神代といへるにあなむ。母は、今の世のみにあらぬ意を示し給へるなり。然爾有許曾、これも六言の句、さやうにあれば、こそうなづき給へるなり。この句一篇の主眼なり。然は右に如此とあるにむかひたるにて、古昔の妻あらしひのこをさし給へるなり。さてこの二句上の神代從云々の二句に對したり。○虚蟬毛、現身もなり、現身は人の世にある間をいふ。○婦乎、相格良思吉、婦乎三言の

句なり。相格は、上に諍競とあるにかはることなし。良思吉、これも上の良之に同じ。吉とどめたるは、許曾の辭に應じたる古格なり。たゞし今のことばにては、かゝる處も、ただらしといふが通例なり。(以上一段)

○一篇の總意、今かの大和なる三山のむかしがたりを聞くに、香具山の男山は、畝火の女山を愛して、わがものとせんとて、耳梨の同じ男山とたゞかひきといふ。(以上一段)さては、よろづ、あほらかなりし神代より、戀の上につきては、非情の山すら、なほ、かくあるらし。たゞ、すなほなりし古昔も、なほ、しかなればこそ、げにも、今の世人の妻をあらしそふらし、まことに、道理なりとなり。

さてこの御歌、燈にもいへるがごとく、たゞ、世人の妻を競ふよしによみなし給へれど、實は天武天皇と、額田王をあらしそひ給ひしを、あほしよせられしこと、次々の歌どもにて知られたり

反歌

高山與耳梨山與相之時、立見爾來之、伊奈美國波良

上の長歌には、三山の岡によりて、今世人の妻あらしそひすることの道理なるよし

をのたまひ、こゝにてはその國を諫めんとて、出雲國よりのぼり來ませる阿菩大神のどいまりませりといふ地を見たまひて、むかしをしのばせ給へるなり

○相之時、戦ひし時なり。日本記神功皇后の卷に伊弉和波那阿例波、また雄略天皇の卷に瀨致爾阿賦耶鳴之、慮能古などある阿波那も戦はん阿賦耶も戦ふやにて、今もあなじ、皆向ひたゝかふ意なり。こゝも雲根火の女山を得んとて、右の二山の戦ひしなり。男女の山の逢ふにはあらず、逢ふ意と見ては、上の長歌は釋き得られざるなり。○立見爾來之、立は即ち阿菩大神の出雲國を發ちてなり。見爾來之は、三山の國を諫めんとて來給ひしをいふたゞ、是給はんとしてにはあらず、實は見爾來之とばかりにては何のことゝも聞こえぬを、風土記にて、皆人の知るこゝとなれば、それにゆづり給へるなり。風土記に、出雲國阿菩大神、開大和國畝火香山耳梨三山相闘、以此欲諫止上來之時、到於此處、乃閉闘止覆其所乘之船而坐之、故號神阜阜形似覆、敷田年治の標注本に據る。仙覺が抄に引けるには、こゝの末文、號神集之覆形とありて、考に神詰といふ處、今も鹿子川の西に在り、こゝをいふかといへり、もしまことにさる處のありて、そこならば、この御歌によくかなへり、そは、鹿

子川は、今の加古郡の内なるべければ、その西即ち、印南の地なればなり。されど神集云々の文既にあやしければ、甚まばつかなきことなり。

○伊奈美國波良、伊奈美は印南郡なり。一郷一郡にてもむかしは國といへること、また波良のこと既にいへり。大神のこゝまで來給ひたるに、山の國やみぬとききて大和までのぼらで、やがて、この地にどいまり給ひきとつたへ聞きて、かくはのたまひたるなり。たゞし、風土記によれば、そのどいまり給へる神阜は、揖保郡にして、印南郡にあらず。されば、こはたゞ、あほよそによみ出で給ひたるものなるべしといへり。さて、この御歌、結句たゞ、いひすて給ひたるに、中々に、むかしをしのばせ給へるは更なり、その景色さへうかびて、飽かずあぼゆ。

◎大意、雲根火の女山を得んとて、高山耳梨の三山の戦ひあらそへる時、その山を諫めんとて、阿菩大神のほろゝと、出雲國より、いで立ちてのぼり來ましつるに、その戦のやみぬとききて、やがて、どいまりせ給ひきといふ、其の印南國原はど

なり
渡津海乃豊旗雲爾伊理比沙之今夜乃月夜清明已曾

この御歌は左註に右一首歌今案不似反歌也。但舊本以此歌載於反歌。故今猶載此歌。歟。元曆本古寫本には次に作れり云々ともありて三山の反歌にあらざることはいふまでもなしされどなほ同じ度印南の海邊などにてよみましつらん故にこゝに載せたるなるべしと考にもいへるがごとし。

○渡津海、たい海のことなり。海神を大綿津見神といふよりうつれる稱なり。この文字のやうにては渡つつはのに同じ海の意のごとく見ゆれどもさにはあらず山神を大山津見神といふにても知るべし。○海はたゞ假字に用ひたる也。字にかゝはるべからず。○豊旗雲、旗の靡けるが如き狀の雲をいふ。豊はゆたかに大きなる意にて稱言なり。豊原豊年などつねに多し。○伊理比沙之、入日指しなり。この下での辭を添へてきくべし。豊旗雲に入日さしての意雲の晴れんことをれがひ給へるなり。○今夜乃月夜清明已曾、月夜をツシヨとよむは古言なり。さてこれはたゞ月のことなり。今夜乃ともあるをおもふべし。たゞ草また岩のこゝを草根岩根などいふ類なり。これも古き詞づかひのさまなり。月の夜といふ意にはあらず。清明已曾この已曾はいかでしかあれかしと希ふ意の辭これまた

古言なり。集中夢爾見乞また相見所欲などあるこゝにちなじ乞欲の字をしか訓めるも義をもてなり。つねにいふこゝとまがふべからず。

○大意、うち見わたせば見わたすまゝにこの海上の景色のあかずおぼゆるを、あやにくにも雲のたなびけることよいかでこのたな引ける雲に入日のさし空の晴れわたりて今よひの月のさやかにあれかし。さらばおもふがまゝによるのさまさへ眺めてあらんをとなり。

近江大津宮御宇天皇代 ○近江大津宮、又たゞ近江宮ともいへり。滋賀郡にありしなり。今の大津の地なり。○天皇、天智天皇なり。日本紀には天命開別天皇とあり

天皇詔内大臣藤原朝臣鏡憐春山萬花之艶秋山千葉之彩時額田王以歌判之歌

○内大臣藤原朝臣、鎌足卿なり。日本紀また姓氏錄によるにこの卿實は大臣に任ぜられしも藤原氏をたまはりしも今はの時のごとなり。かつ朝臣の姓はその子不比等卿の時にたまはれるなればこゝは後より前に及ぼして記せるなり。卿はこの時内臣中臣連なりしなり。○鏡憐云々、春秋のあらそひといふこと代々

歌に文にこれかれ見ゆれど、これをもてはじめとす。さて、これはこの次に、近江へうつり給ふ時の歌を載せられたれば、後岡本宮にてありしこと知るべしと考へるがごとし。

冬木成春去來者不喧有之鳥毛來鳴奴不開有之花毛佐家禮村山平茂入而毛不取草深執手母不見秋山乃木葉平見而者黃葉平娶取而曾思奴布青乎者置而曾歡久曾許之恨之秋山吾者

この歌は、端詞にても著く、天皇の内臣鎌足卿にほせられて、人々をして、春秋の劣り優りを争はしめ給へる時、額田王の判断せられたるなり。王は當時の才すべれたる風流人なるからに、あつから判者などにも撰まれたりしなるべし。燈に、これは判断せしにあらざるべからず。たゞ、みづからの心引く方をことわるなりといへれど、端詞の意をよくおもへば、なほさにはあらじ。

○冬木成春去來者 冬木成は春の枕詞にて、集中また冬隠なども書けり。さるは萬物、みな冬の間、陰にこもりたるが春にいたりて、陽に發るものなれば、その意もてづいけたるなりといへり。この説はたやかなるべし。成は盛の誤にはあらじ。後

を委と書き、波を皮と書ける類の略字なりといへり。げに集中悉く冬木成とあれば、この説のごとくなるべし。春去來者は春になりぬればといふに、おなじ去といふも、今眼前もの、過ぎゆくをいふ詞なれば、字のごとく見てもたがはず。夕されば「秋されば」など、みなおなじ。○不喧有之鳥毛來鳴奴、冬の間、鳴かずありし鳥も、來なくよしなり。こは鶯は更なり、すべての鳥も、春はよく、囀るものなれば、かくはいへるなり。古今集にも、百千鳥さへづる春は云々などあるを、おもふべし。奴はいま現在なること、の、漸々過去になり行くをいひ、あらはす辭なり。されば、半現在などいはんも妨なし。こゝも鳥の鳴くこと、の経過しつゝあるをいへるなり。○不開有之花毛佐家禮村、不開有之は上の不喧有之とあるに、准へて知るべし。花毛佐家禮村は花も咲きてあれどなり。上の奴の辭の意もこゝのあれどにて、らしておもはば、あつものづから、明らかならん。さて、こゝの二句、上の二句と對したり。以上六句、春の賞すべきことをいひて、(離)の一言をもてうち返したり。そはなほ、春のあかぬことをいはんとなり。下の四句、即ちこれなり。○山平茂入而毛不取、山が繁さになけ入りても、その花を折り取らずとなり。取の字、或は見の誤として、花を

見ざる意としまたは、聽の誤として上の鳥毛來鳴奴の句を受けたりなどいふ説もあれどさる本のあるにもあらぬがうへに、この調をおもへば、きはめてさにはあらし入りても取らず、取りても見ずとつゞけるさま、味ひて知るべきなり。○草深、執手母不見、草が深さにその花を折り執りても見ずとなり。上世は草木のもえ出づる頃より、野山のやゝ繁り行く頃、今ならば夏のはじめの頃までを、大かたに春どしたりけに見ゆれば、こゝには、かく草深みといひ、上には山を茂みなどいへるなり。集中春去者、木陰多暮月夜、また春野之草根之繁、また春去者、宇乃花具多思吾越之云々、卯の花を雨に腐すなりなど、なほありこれ皆、いまの五月ごろの景色なり。執の字、タチルと訓めるもあれど、意に泥めるなれど、今は用ひず。集中タチルには、手折と書ければなり。さて、この二句また上の二句と對したり。實は春山は、草木のふかく繁れるが故にそこに分け入りて、花を折りとりても見られぬば見ずとの意なるを、かく二つにわけていへるなり。されば山乎茂以下の四句は、すべて上の不開有之花毛、佐家禮村の二句を受けたりと知られたり。さては、不喧有之云々の二句は、たゞ花の客のみなり。なほ端詞に、春山萬花之飽とある。また、秋

山の方に専ら紅葉のとのみといへる。端詞に、秋山千葉之彩とありなど、おもひ合はすべし。○秋山乃、木葉乎見而者、これより、秋山の賞すべきことをいへり。○黄葉乎婆、取而曾思奴布、黄葉乎婆は、もみちたる枝をばはなり。黄葉、こゝは名詞として用ひたるにあらねば、必モミツと活かして訓むべし。下の青乎婆にむかひたるなり。この詞、今は、チツツルツレと活けど、古くは、タチツテと活けるなり。集中、黄葉山また木葉、文未赤者、また和可加、敏流、氏能毛、美都庵、氏などある。にてさるべし。赤出の略言なりといへるは、ことわりきてなかく、に違へり。取而曾思奴布、思奴布は、その意種々なるが中にこゝは、賞翫する意なり。略解に、暮ふ意なりとあるは、きこえず。さは、この句にて、秋山は、春山の繁きがひとくならず、草木もかれわたりて、分け入りやすき意あらはれたり。○青乎者、置而曾歎久、青乎者は、いまだみちせぬ枝をばはなり。置而歎久、折りとらず枝ながら置きて、黄葉するを待ちつゝ、歎くなり。歎くとは既にいへる如く、すべて、心に當りて發する聲なり。○曾許之恨之、曾許は、其にて、青乎者云々をさせり。之は、例のつよめの辭、この句、俗にては、それがそれ恨めしたといふべし。黄葉したるを折りとりて愛翫す

七二
といふにむかひたるなり、恨の字こゝにきこえずと、玉小琴に、吟の誤としてオ
モシロシと訓まれたるより、これに従へる説も多し、古義には、なほ考へて、タ
シとよめれども、用ふべくもあらず、その句をもて、上の黄葉平婆以下の
四句を受けたりとするが故にこそあれ、こは右にもいへるがごとく、青婆平云々
の句のみを受けたるにて、春山の方にて不噴有之云々、不開有之云々と置きてさ
て、山平茂云々、深草云々といひて、不開有之云々の句のみを受けたると同例なれ
ば、恨之にて、その意ふかく、まことによきことたり、あやしむべきにあらが、山平
茂の句中、取の字を異字にあらため、また、こゝの恨の字をあやまりとして、はつひ
に恐らくは、原歌の意をそこなふに至らんすべて、かゝる處は、古人の説にのみよ
らずみづから、よく吟じ試み、よく考へわたして、後、さだめまほしきとなり、○秋山
吾者、人は知らず、吾は、春山より、秋山の方に心引かるとなり、さては春山より、秋
山は、まされりと判ぜられたるなり、考へ、こは、山の花もみちのことなれば、女の山
ぶみをおぼしてのたまふのみ、上に、花鳥をのたまひたるさまを思ふに、赤裳すそ
引き行きかふべき、け近きならば春に依りてことわりなん、所により、身につけ、を

りにしたるがひてことを分かれたるこそ、おもしろけれといへり

○大意 春の空ののどけくなりぬれば、冬のほどは、鳴かざりし百千の鳥も、こゑ
うるわしく來鳴きてあり、咲かざりし木どもの花も、色なづかしくさきいで、あ
れば山々のをかしさいはん方なけれど、女の身にては草木どもの繁くて、わけ入
らんよしのなく、その咲ける花ども、折り取りて見んよしのなきを、秋山は春山
のどかくならず、道もやすければ、まづ染めつくしたるを、は取りてそれを、愛しい
また青きをばさながら置きて、それをあかず待ちわたれば、そのまぢわたるのみ
こそは恨めしけれど、なほ吾は秋山よとなり

額田王下、近江國時作歌 ○諸本、この作歌の下に、井戸王即和歌の六字あるを、諸註
によりて、今は、綜麻形乃云々の歌の上にあくりつづけに、集中の例ならねばなり
味酒三輪乃山、青丹吉奈、真能山乃山、際伊隱、萬代道隈、伊積流、萬代爾、委曲毛、見管、行武
雄、數數毛、見放、武八、萬雄、情無、雲乃、隱障、倍之也

この歌は、端詞によれば、王の近江國へ下らるゝ時よまれたるにて、飛鳥(大和)にあ
りて明けくれ見なれつる三輪山の遠ざかり行くを惜しみたるなり、但し遷都の

時かいつかそれは定めがたし○味酒、三輪の枕詞なり美酒之神酒とつけたるなりといへり古義の説もたやかなり神に供ふる酒を今はミキとのみいへど古はミワともいへり○三輪乃山、略解にてこの下をの詞を添へて見るべしといひ萬葉新考に三輪の山をだにの意とせりさることなり○青丹吉、奈良の枕詞なり青丹は青土なり青土は主と女子の眉畫の料にていとよく粘たるものなれば和ぎ熟るゝ意をもてつけたるなるべしと新考の説なりこれなどや易らかならん吉のよは歎辭にてしは強めの辭なり集中眞管余斯玉藻余斯朝毛吉などあるよし昔おなじ○奈良能山、いはゆる那良坂なり。

○山際伊隠萬代、山際これも新考にこの際は即ち此の字の如く際限の意にて極といふに同じく漢語の雲際波際なども思ひ合はすべし今の俗言に摺ぐといふ意もこれなり又その周回或はその傍側をも麻といへることありてその字等をも際間曲など種々に書きて云々大かたは分別もなく言にもみづから云ひ心にも深くも念ひたどらで過ぎぬめり云々といへりまことに原は一つながらその意うつりてはその意にしたがひて釋かざるべからずふとしては間の意と

のみなどあやまることなきにしもあらず處につけてよく考ふべきことなりさて諸註この山際の下從字を脱したりとて或はこれをたうちにヤマノマユと訓みまたはさらに從の字を補ひたるもあるがしらはさることのやうにも聞こえてなかくに意とほらぬなりさるはこの句は次の道隈にむかひ伊隠萬代は次の伊積流萬代にむかひたるをもしヤマノマユと訓まんにはニはよりにてかちと通ふ辭なればこのニはなほ於の意なりなどいふは強ひたる説なり伊隠萬代の句をよきて下の委曲毛云々へついでて見ざるべからずさては次の道隈のたうち伊積流萬代についでて委曲毛云々へかゝるとその對をうしなひ然のみならず伊隠萬代の一句は全くいたづら者となるべし三輪山が何に隠るとかせんたい隠るといひて見ゆるかぎりの意にも用ひざるにもあらねどこゝは次の句どもにうち合はねばさは見がたきなりさればなほヤマノマユと訓むべきなり山際以下の四句實は道の遠く隔たりて山奈良山のかげになる三輪山がまでといふ意なるを二つにわけていへるなりよく味ふべし伊隠萬代はたい隠るまでなり伊はつよめに添へたる辭次の伊積の伊もちなじ隠は今は

レルル、ルレ(下二段)と活かし用ふれども古くは、ラリルレ(四段)と活けるなり。こゝは、即それなり。今ならば、カクル、マテといふべき處なり。○道限、伊積流萬代爾もるとはいへるなり。爾の辭上の、伊隱萬代をもうけたり。槍抓には、古本によれりとして上の句にも爾を補ひたり。積流、略解に、サカルと訓みあらためたるは、遠離天離などの離るの意なるべけれど、道の限の離るといふべくもあらねば、なほ舊訓のまゝにてあるべし。○委曲毛、見管行武雄、すなはち三輪の山をなり。委曲とあるにて、その情の切なるをよもふべし。雄は、ものをの意なり。○數數毛、見放武山雄、この二句上の二句の對にて、その意も實は、かはることなし。數數毛、つねにいふにもなじ、毛は、こゝのも、上のも歎辭なり。見放武山雄は見放む山なるものをの意なり。見放武は、仰ぎて遠く望む意、振放見などもいへり。○情無雲乃、隱障倍之也。情無は無心の意なり。情の字に泥むべからず。な、さけなく、つれなく、などの意にはあらず。雲乃、は三言の句なり。隱障は、隠すあり様をいふ。隠すといふ詞の延びたるなりといへど、意また、ちのづから異なり。花の散る狀を、花散らふ

なといふと同例なり。倍之也、也はうち返しにて、可しやはの意、雲をとがめたるなり。考に飛鳥岡本宮より、三輪へ二里ばかり、三輪より奈良へ四里餘ありて、その間たひらかなれば、奈良坂こゆるほどまでも、三輪山は見ゆるなりといへり。されば、この地こえては、いかいばせん。せめてはこの坂こゆるまではとよもひたらんかひもなく、まだきに雲の隠すを惜めるなり。

◎一篇の大意 はやく家のあたりは見えずなりぬ。京の空は、願れどもかひなし。せめては、朝よひに見なれつる三輪山を、だに今うち越え行くべき奈良の山の山のぼてに、隠れはつるまで、道の程の、いたく隔たるまでに、ねんごろにも、度々も願しつゝ行かんものを、遠く望みてもあらん山なるものをこゝろなく、雲の隠すかな。隠してあるべきことかはいと、いつらしとなり。

反歌

三輪山乎、然毛隱賀雲谷、斐情有南畝、可苦佐布倍思哉。

上の長歌には雲のこゝろなく、三輪山を隠す狀をなげきこゝには、その雲の、いかで、心あれかしとねがはれたるなり。

○三輪山乎、平の辭はなほざりに見すぐすべからざると吟じて知るべし○然毛隱賀、然は三輪山をば雲のかくすをさせり。毛は例の歎辭、賀も同じく歎辭にて、哉の意なり○雲谷毛情有南畝、たどひ無心なる雲なりとも、少しは、わが心中を察せよかしとなり、谷(タニ)は俗にナリトモ、また、チモなど譯すべし、燈にこの辭一首の眼目といへり、南畝は、こゝなるは、希望の辭なり、有りなむなどいふ時のなむは、たゞ未來を示す辭なり、まがふべからず○可苦佐布倍思哉、かさねてこゝにいへる、あはれの深きもふべし

◎大意 見るがうちをきし三輪山をかくのごとくにも雲の隠すことかな雲なりとも心あらばかくはあるまじきにかで心あれかしな隠してあるべきことかはとなり

さて右の歌左註に、右二首歌(例によればこゝに檢の字あるべきなり)山上憶良大夫、類聚歌林曰、遷都近江國時、御覽三輪山御歌焉とあるに據れば、天智天皇か、または、大海皇子命(天武)か、のよませ給へるなるべし、たゞし、集中、天皇には、御製歌とあるが例なるに、こゝには、たゞ御歌とあれば、大海皇子命とすべきにや

井戸王即和歌 ○井戸王、知られず○和歌、今いふと異なり、コタヘウタなること、傍訓にて知るべし

綜麻形乃林始乃狹野棒能衣爾著成日爾都久和我勢

この歌、端詞によれば、井戸王の右の額田王の歌に答へられたるなり、されど諸註にもいへるが如く、この處、いたく錯亂せりと見ゆ、なほ、下にいふを見るべし○綜麻形、上に、三輪山とあるそれなり、綜麻形の三字をかくよめるは、古事記に、活玉依毘賣、其容姿端正、云々、其美人姪身云々、是以其父母、欲知其人、誨其女曰云々、以閉蘇紡麻貫針刺其衣、爾故、如教而、且時見者云々、唯遺麻者、三句耳、云々、故因其麻之三句遺而、名其地謂美和也とある古事によれるなり○林始、林の前なり、集中岡前、また、夜麻乃佐吉なども見えたり、サキは地の突き出でたる處をいへば、こゝもさる處なるべし○狹野棒、棒は棒の木ともいへど、集中、榛をよめる歌どもを考へわたすに、なほ萩といふ方、たやかなるべし、播磨風土記に、萩原をハリハラ、萩根をハリテともよめれば、古萩をハリともいへるなり、新考には、萩の古名なりといへり、野榛といふは、この物、むねど、野にあるものなればなるべし、狹は又、眞とも

いひ、御とも通ひて稱言なり。佐^サ牡^ウ鹿^カを眞^マ牡^ウ鹿^カ狹^キ霧^キを御^ミ霧^キともいふにて知るべし。○衣爾著成、著は萩が花の摺れて衣に著くよしなり。成は如くの意以上四句はつくといふとの譬にて、この歌の意、全く下の一句にあり。○目爾都久、和我變、萩が花の衣に著くが如く目につきて見ゆるわが夫となり。たゞ目につくとばかりにて中々にその情あふれたり。借^セといふと、既にもいへるが如く、女より男を親しみていひ、また男どちらにても互に親しみていふ詞なるが、こゝは井戸王より額田王をさせることなるなり。女をさして、せといふこと甚いぶかしきなり。されば、燈^トに上の、味酒云々の歌の端詞を、井戸王下近江國時作歌、額田王即和歌とあらためて、さて、註に、今の本には、額田王下近江國時、井戸王、即和歌とあり。先學者、此端作をあやしまざるものなしと思ふに、奥の、綜麻形の歌、わがせとあれば、それ額田王の和歌にてこの長歌、反歌は、井戸王の歌にや、されば御名を置きかへたるにやとて、かくかけるなり。なほ考ふべし。井戸王は、額田王のうから親族などにやありけむ。云々といへり。たゞしこれは、上に挙げたる左註は、とらざる説なり。考には、長歌の方を、大海人皇子命、下近江國時御作歌とし、この端詞を、額田王、奉和歌と

改めたり。これは、左註によりて考へたる説なれど、井戸王をすてたり。(略解も同説なり)されど尙もふに、この説ものごとく改むれば、いづれにしても聞こゆることは、よくきこゆれど、果して左註をとらであるべきか。もしは、井戸王の女王などにてあらば、いかゞはせん。また、果して、井戸王をすつべきか。もしは、まことにこの歌主などにてあらば、またいかゞはせん。甚あやふきことといふべし。されば、かゝる處は、あかぬことながら、まつは、もとのまゝにてをくべきなり。但し、女をさして、わがせといふことあるべくもあらねば、上の長歌は、即、左註によりて、姑く大海人皇子命の御詠とし、井戸王は、歌によりて、姑く、女王と見てもあるべきなり。なほ、大體につきて疑はしきことは、次々にもいはんを見るべし。

◎大意 綜麻形の林の前に咲きみだれたる萩が花の、わけ行くまに、衣にすり著くがごとくに、つねに、目につきて、わすれがたきわが夫の君(夫)上にいへるが如くなれば、大海人皇子命をさせりとすべし)よとなり。

さて、この歌、左註に「右一首歌、今案、不似和歌、但舊本載于此、故以猶載焉」とありて、實は、右の長歌の和歌として見んこと、甚だおぼつかなし。されど、端詞にも正し

く、和歌とあるがうへに、この左註は、この「綜麻形」の歌を、よく訓み得ぬもの、後人のわざなりともいひ、また、上古の贈答には、かやうなるが多しなどいへれば、しばらく、なほ、和歌と定めて釋かん方、おだやかなるべきにや、さては、これは、井戸王は、大海人皇子命と共に、近江へは往かず、道まで送りまゐらせて、ひとり別かれて、舊都の方へかへらんとし給へる時などによみ給へりとすべし。そは、上の長歌の、途上の御詠なること論なきに、この歌の意を按ふるに、和歌として、今、わがせの君の、三輪山を、しばし、ふり返り見給ひて、雲の隠すを、いたく惜しみ給ふなるが、われも、今、こゝにして、つねに、目につきて、わすれがたきその夫の君に別かれ奉らば、その三輪山を、惜しみ給ふにもまさりて、いかに戀しく、くるしからんと歎かれたる意に聞こゆればなり

天皇遊獵蒲生野時額田王作歌

○天皇 即ち天智天皇にますなり ○遊獵、これは、左註にも引けるがごとく、紀に、七年五年五日、天皇縱獵於蒲生野、于時、大皇弟、大海人皇子命、諸王、内臣、及、群臣皆悉從焉とありて、藥獵なり。また翌年五月五日にも、山科野に從獵し給ひしよし見えたり。この日、山野にわけ入りて鹿茸をと

り百草をも採るをいふ、考に、から國の醫の書どもに、四五月鹿の茸を取ること、多く見え、又五月五日に百草を採ること見ゆといへれば、それにならへるなるべし。そも、この藥獵のこと、推古天皇紀に、十九年夏五月五日、藥獵於兔田野とあるをはじめとし、二十年にも、夏五月五日、藥獵之、集于羽田、また、二十二年夏五月五日、藥獵也とも見え、また、降りて、伊勢物語にも、菖蒲かり君は沼にぞまどひける。われは野に出で、獵るぞわひしき。實之集にもこの日を、くすり日とよめり、藥獵する日の意なり。されば、ふるくより、後々までも、とし、したりしわざなるべし。たゞし、本集十六の卷、乞食者詠、爲鹿述痛歌に、四月與五月間、爾藥獵、仕流時爾……矣待跡、吾居時爾、佐男鹿乃、來立嘆久云々、十七の卷、天平十六年四月五日の歌に、加吉都播多、衣爾須里都氣麻須、良雄乃、服曾比獵、服裝ひかざりて、獵をするをいふ、須流月者、伎爾家里、などもあれば、また必しも、五月五日のみには限らざりしなり。また、服曾比獵などいひ、紀の文に、是日、諸臣、服色、皆隨冠色、各著髻華云々、兔田野の御獵の條などあるを、おもふに、この藥獵は當時いと、花やかなる御遊なりしなり。さればこの度も、妃額田王をも、御供にはめされたるなるべしといへり ○蒲生野、近

江國蒲生郡なり

茜草指武真前野遊標野行野守者不見哉君之袖布流

この歌は御獵の野にて、皇太子の玉に御思をよせたまへるを恐れはかりある身なればよみて奉られたるなるべし

○茜草指、紫にかゝる枕詞なり。また日につけてもいへり、赤き氣のあらはるゝ意なり。俗に赤ミサスなどいふと、専らなじ詞のさまなり。紫色は赤き艶のあるものなればいふなるべし。○武真前野遊標野行、武真前野は紫草の生ひたる野をいふ。標野は占野また禁野なども書きて、豫ねてわが物と標めおける野をいふ。標めおくとはい、番人をつけ、また標などして、人を入り立たしめじと用意し、また只わが心のうちに占めおくをいへりとも、地名にはあらず。即ち蒲生野のことなり。皇太子の、と行き、かく行きし給ふを、斯くは、かさねていへるのみなり。さてこの二句は、句を隔て、結句の君之袖布流にかゝれるなり。○野守者不見哉、野守は、即ち標野を守り居るものをいふ。さて、こゝは、槍抓に三の巻山守之有家留不知爾其山爾標結立而結之辱爲都此歌と合せ考るに、野守は、本主の天智天皇を申

せる詞なり。次の御答歌に、人孀とよませ給ふも、此の故にぞあるといへるがごとし。不見哉は、見ずやはにて、反語なり。○君之袖布流、君は、皇太子、即ち、後の天武天皇にて、袖を振りいにしへ、人を戀ふる時、せしわざなり。給ふは下の心をほのめかし給へるなり。この句、下に、その辭を添へ、四の句の上にくらして心得べし。諸註、この歌の野をすべてノと訓みたれど、古義にもいへるがごとく、ノといふは、この頃より後にやとよぼゆれば、今はヌとよみつ

◎大意、今、かゝる行幸の野ともいはず、と行き、かく行きつゝ、懸想の狀を爲たまふを、もしも、あるじの天皇の見たまはずやはある。いとも恐きことなり。いかで心せさせ給へかしとなり

皇太子答御歌 ○皇太子、例によれば、大海人皇子命とあるべきなり
紫草能爾保敝類妹乎、爾苦久有者、人孀故爾吾戀目八方

これは、皇太子の、わが御心の、淺からぬを示し給へるなり。○紫草能、爾保敝類といは、心料の序詞なり。能は、例の、ノ如クニの意なり。上の武真前野をうけ給へるなり。○爾保敝類妹乎、妹は、即ち、額田王をさし給へるなり。爾保敝類は、艶ひて有

るにて、紅顔のつやゝかなるをいふ。○爾苦久有者、もし悪くあるならばとなり。○人婦故爾、吾戀目八方、人婦故爾は、人妻なるにの意なり。故爾は、俗にヂヤニドウシテなど譯すべし。今つねにいふと異なり。王は、當時天智天皇の妃なれば、かくはのり給へるなり。吾戀目也、方は、吾戀ひんやにて、也は反語、方は歎辭なり。

◎大意 紫のごとくに艶へる、うつくしき妹を、もし厭はしく、悪く思はし、人妻なるに、何として、ことばに、われ戀ひん、人妻ともいはず、あるじのちはしますすをも願ず、戀ふるこゝろの苦しさを、いかで、推しはかりてよとなり。

さて、この二首の歌によりて、おもふに、上の「綜麻形乃云々」の歌も、もしは、この御獵の時のにて、額田王の詠には、あらじか。檜抓には、全く錯亂せるなりとて、この二首の上につらねたり。さるは、歌の意も、こゝに、いと似つかはしく、調も王のに、いとよく似たればなり。また「綜麻形」の三字も、荷田翁の考へて、ミクヤマとよまれたるより、學者等多くは、この訓の考へ得たりとし、この訓によりて、解釋をもせれど、なほおもへば、これは、この歌をもて、三輪山の歌の和歌なりと、まづ、きはめての上のことにて、實は左註の説もあれば、ちほつかなきことなり。そは、同じミクヤマのこ

とを長歌、反歌には、三輪山と書き、この歌にのみ「綜麻形」と書かんも疑はしく、ことに、これは、舊訓ソマガタにて、柚縣は、近江國滋賀郡なりともいへればなり。さては、井戸王の和歌は、別にありしが、落ちたるにや。また、萩のこと、なほ、時に合はねば、いかかともあぼゆるやうなれど、これは、もとより、譬なれば、或は去年の秋など、この柚縣の野へ、御供仕へまつられしことなどのありしを、今、おもひ出でてつらねられざるにも、あらねば、難なかるべし。檜抓に、この歌は、柚縣の野にてよまれたるなり。また、この野は、大津宮より、ほど遠からぬ地にて、蒲生野への通路なるよしにいへり。さて、もし、この説をあたれりとするれば、綜麻形をミクヤマとよめるは、いたづらごととなり。たゞし、これは、この歌の、いかにも疑はしきまゝに、いさゝか、試みにいふのみなり。なほ、よく考ふべきことなり。

明日香清御原宮御宇天皇代 ○明日香清御原宮、上の岡本宮と同じ地にありしなり。○天皇、天武天皇なり。日本記に、天淳中原瀨真人天皇とあり。○御宇の二字、古本になけれど、今、補へるに従ひつ。

十市皇女參起於伊勢神宮時見波多横山巖吹黃刀自作歌 ○十市皇女は、天武天皇

の皇女御母は、額田王なり、紀によるに、この皇女阿閉皇女と共に、伊勢に参りたまへること、四年二月のことなり、考に今、十市皇女のみを挙げたるは、よみ人、この皇女につかへまつる女なればにやといへり、○波多横山、伊勢壹志郡、考に今も、八太里横山といふ處ありて、そこに、大なる巖ども、川邊にも多し、是ならんといへり、○吹黄刀自、つまびらかならず、吹黄は姓にや、刀自はよび名なりといへり、河上乃、湯都磐村二、草武左受、常丹毛、冀名、常處女、煮手、

この歌、端詞に巖を見て、よめる、とあるを、おもふに、その景色の、あかす、あもしろきを、愛でたるに、かの、鎌倉右大臣の、世の中は、常にも、がもな、渚こぐ、白水郎の小舟の、つなで、かなしも、などいへる、趣なるべし、

○河上、河のほとりなり、河は横山わたりを流れて、山河なるべし、○湯津磐村、湯津は、もとより、借字にて、五百箇の約言なり、數の多きをいふ、磐村は、磐のむらされるに、村は、群なり、○草武左受、ムスは、生すにて、古は、何にまれ、ものつから生ずるをいへり、草生さず、滑らかに、うつくしく、ての意、磐村の、いづも、あな、じきさ、まの意なり、さるを、これは、草の生えたるをいふに、て、草武左受の、受までは、かゝら

ず、年經たる巖の、草の生えぬこと、やはあるなどいふは、強ひるた説なり、本文のましたてあるべし、山中にある巖などならば、こそあらめ、つねに、瀧などの、落ちては、角さへなる、よしにいへるを、また、下に、處女ともあるを、おもふべきなり、草などの、生えぬ、ふるひたる、さほは、あらず、○常丹毛、冀名、八常にも、あれかし、なと、なり、長壽をいひ、れる、なほ、常とは、と、いひ、た、は、と、を、形へ、に、變はる、こと、なきを、いふ、別は、全盛の、辭、も、ナ、も、とも、に、歌、辭、な、り、○常處女、煮手、常とは、上の、常丹毛の、常、にも、あ、れ、く、と、と、い、ふ、を、い、ふ、常、磐、など、の、常、も、同、心、也、處、女、煮、手、は、少、女、に、て、な、り、た、形、也、處、女、は、た、り、煮、登、古、と、い、ふ、に、對、した、る、稱、也、若、く、さ、か、り、なる、女、を、い、ふ、こと、既に、言、ひ、入、る、か、と、い、ひ、必、支、字、に、な、つ、も、か、ら、ず、と、の、句、上、の、句、の、上、に、ま、は、る、心、得、た、し、さ、て、右、の、二、句、略、解、な、ら、ば、皇、女、の、御、壽、命、の、常、な、ら、ん、こと、を、祈、れ、る、と、い、ひ、た、れ、と、い、は、さ、き、こ、え、ず、也、
 ◎大意、あはれ、この、河、上、の、數、が、多、く、も、なき、巖、も、の、た、り、す、ま、ひ、水、の、流、る、因、に、
 巖、の、い、と、ひ、か、が、す、も、ある、か、な、い、か、で、と、の、巖、も、は、草、も、生、さ、ず、う、る、は、む、く、と、あ、る、か、知、り、た、れ、と、い、は、さ、き、こ、え、ず、也、と、い、へ、り、若、き、女、に、て、あ、れ、か、し、な、さ、ら、ば、つ、ね、に、も、

來かよひつゝ、あでゝあらんをとなり、麻績王流於伊勢國伊良真島之時、時人哀傷作歌、麻績王、在註に三品麻績王であり、くはしきはしられず、但し三品は紀に三位あり、またこの王、紀に終は因幡國に流され給ひしなり、よりて左註に、是云配于伊勢國伊良真島者、若疑後人縁歌辭而誤配乎、といへり、或は伊勢の方の世にきてえたるが故に、まがするに、またまことに伊勢にて、今さざりがたし、槍狝に伊良真嶋、今は參河に屬せれど、近昔まで、志摩國内なりければ、伊勢とはいへるなり、紀に因幡國とあるは、わろしきもの、麻績王の續の字、續に作れるとあれど、古かよはし用ひたれば、是のまじりであるべし、○時人、時之字補へるに從ふ、麻績王、時人、時、麻績王、白水郎有哉、射等、籠荷、四間乃、珠藻、菊、麻須、この歌は、端詞のまじり、王の、罪ありて流され給へる時、時人のかよひよるなり、○打麻乎、麻績の枕詞なり、打ちたる麻、績むどか入れたるな、麻乎は歌辭なり、みはかしを、劍の池、よすま路、を引手の山などあるを、もよふし、後ならば、やといふ

べきところなり、○白水郎有哉、漁人なれば、にやの意にて、王をいためるなり、これまではたゞ、貴き御身の上とのみ思ひたりしに、事たがひたれば、かくはいへるなり、さて、この句にて、王のさばかりの罪には、あはせぬこと知られたり、されど、打ちつけに、じかいひては、公に憚りあるをもて、姑く、漁人になど疑ひたる、巧なりといふべし、○珠藻、菊、麻須、藻を清るとなり、珠は藻をほめたる辭、麻須は、あがめていへるなり、但しこの麻須を、燈に、テスとも訓み、また、異本に、食に作れるに從ふは、下の和歌の食にあなじ、さてこれは、王のまことに藻を清りたまふには、あらねど、配所のわびしきさまをつよくいひなせるなり、○大意、麻績王は、かねては、さる貴き御方とのみ聞きつたつるを、まことば、漁人にて、あはせむせは、にや、この度、この伊良真島に、わたりあはせました、珠藻を清るを、いよと、なみとは、むすぶ、いよといふ、かじき事となり、空蟬之命乎、惜美、浪爾所、潔、伊良真島、之、玉藻、菊、食、これ、は、時人の、王を、漁人なれやと、あはせきて、いへるを、うけて、和給るなり、○

空蟬之命の枕詞なり世また人などにかけてもいへり。その意は既に上段の
り○命乎惜美命が惜しさになり。ながらへて、かゝる憂きめを見んよりは死な
んかた中々にまされりとは思へど、の意あらはれて見ゆ。燈に、これは人のあはれ
むをうけてもはら踏落の期もあらんかど、それをのみまつなりとの心なりとい
へり○涙爾所濕玉藻を流るに袖帯などのぬるをいふ○蒔食食は食ふこ
との古言なり。さてこの歌三句以下はすべて配所のおひしきよしを身ほせられ
たるなり

◎大意 げにもかゝ、若しく悲むき思ひをしつゝ、なまじひに世にあらんよりは、
死にたらんこそまさらめどは思へど、あつから罪ゆるされて、京に歸らむをり
の無きにしるあらねば、猶、さすがに命の惜しく、涙にさづぬれつゝ、この島の玉
藻を流りて、辛くも、生きなかつてあるぞよと、なかり、
天皇御製歌 ○天皇、天武天皇にませり、
三芳野之耳我嶺爾時無雪者落家留間無雪雨者零計類其雪乃時無如其雨乃間無
如隈毛不落思乍余來其山道乎

この御製は、端詞もなければ、いかなる時によませ給へりといふこと、たしかには
知られぬど、まづ、結句の思乍余來其山道乎とあるを思へば、御物思の状しるし、さ
れば、或は、天皇の、いまだ、芳野宮にまじりけるころ、女の許に通ひ給ひしと、
どのあかた、その時などよみ給へるにやといへり。また、かの、大友皇子の御事にの
きての御歌まかともいへれど、猶、十三の卷の相聞に、三吉野之御金高爾間無雪雨
者落云不時雪者落云其雨無間如彼雪不時知間不落吾者曾戀妹之正香乎など
あるを合はせ考ふるに、前説のかた、まだやかなるべし。さて、こゝに、天皇とあるは、
後よ、あがめて記したるなり。次の、淑人乃の御製と、あかち擧げたるを、あもふべ
し
○三芳野、大和國吉野郡吉野なり。三は、眞の意にて、ほめたる辭なり。この辭のこ
と、上にもいへり。○耳我嶺、これ、右に引ける、十三の卷の歌なる御金高と、同山な
るべし。所謂金峰山なり。この山は、古より、佛法を修するものゝこもる山なれば、今
も天皇の出家して、こゝに入り給へるなるべし。略解には、みよがの山といふも、吉
野にあるなるべしといへれど、ちほつかなし。槍狝には、嶺の下、更に、嶽の字を補ひ

て、ミカチノタラと訓み、考には古、うるはしくは御美我嶺といひ、常には美我嶺とのみいひげんといへり、たれどなほ證あるにあらぬは、今は舊訓に由れり。○時無曾雪者落家留間無曾雨者零計類、これの山の高きが故に、つねに雨雪の降るよしなるを雪と雨ををわちてのり給へるなり。間、とよめるは、古義に、といふ言古語ともあはれぬほど、訓み改めたるに従へり。さて曾の辭例の意あもければ、他山は雨雪のかくばかり繁からぬ意ふくみたり。○其雪乃時無如其雨乃間無如、この四句は、上の四句をうけたり、其は即上の雪雨をさし給へるなり。さてこの句までは、御物思の繁きよしをのり給はん序なり。一篇の意は、全く下の三句にあり。○隈毛不落、隈は下に、其山道乎とあれば、道の隈なり。不落は漏れずなり。この詞とも、こと既にいへり、物をもほしめずしな。○思乍余來、そのまはしませ處よりなり。思乍、モロ文、とも訓めれど、すべからざる處の君のはぶかるは、運聲の時にかざるものなれば、猶、まほさ、せしく訓むべきなり。さて、はじめに思ひたるが如きこの御製を、戀歌とすれば、妹のこころを思ひ給ふなるべし。○其山道乎、芳野の山道なり。この句上の隈毛不落のうへに、め

くらしてきくべし乎の辭味ふべし

○一篇の總意、この三芳野のうちにも、耳我嶺は、ことに高山なれば、他山とは異にて、雪も雨も、いのと定まりたる時なく、のれに降ることなるが、われも、今その雪雨の繁きが、さるに間なく時なく、その山道の長きほど、しばしも忘るることなく、妹を思ひつゝ、來るがわりなきよと、なり。○或本歌、三芳野之耳我山爾云々、意は詞も、かはることなれば、今は、こと更に載せず。天皇幸于吉野宮時御製歌、これは、御位につかせ給ひて後の御事なるべし。左註にも、紀曰、八年己卯五月庚辰朔甲申、幸于吉野宮、是あり。淑人乃其跡吉見而好當言師芳野吉見與其人四來三、この御製は、吉野の勝地なるをほめ給ひたるなり。○淑人、多いに人の賢人をさしてのり給ふるなり。○其跡吉見而、三、其とは、勝地の意、跡は例の、さての意なり。○吉見而は、熟覽したなり。○好當言師、まことに勝地ぞとさだめいひしましなり。○芳野吉見與、聲に、この芳野即上の三句を冠りた

るにてよき人のよき處ぞとてよく見てげに（一）よき處なりと定めいひし吉野
をどつしけるなりといへるがごとし。吉見興は昔のよき人の如く熱く見よと
從龍のさるべき人々の御をば近きたのり給へるなり。○其久四來三、この其人
は則ち王の句に吉見興との御言を禁れる人をまひ出で給へるなり。四來三は
熱く見よにて再び給へるなり。かく再まで傍にのり給へるにて、畏かれど天皇
時の御實蹟の狀推しはかり奉るべきとて、この句キヒトヨクミツと訓めるも
ありし。か訓む時はこの其人は初句の淑人にて、上句をうき返賜給へる意とな
て、古のよき人のよく見つることを歎き給へるよしとなるなり。これも古歌の
一體なれば、捨ておたけおれど猶四の句よりのつよきをあもつば、玉小琴の或
人の言ふまじきよあるを用ふべし。見よのみいひても見よといふ意になる古言の
例ありとあるに從はばほしきなり。○山嶽の早き鳥を、鳥野の志る人よき
○大意は、いかによき人のいとよき地なりと定めいひて見てげにもよき地
ぞと定めいひしこの吉野をよく見よ、今の良き地はかみす、石山、正見はとな
り、さてこの御製句の頭とて、同語のある一體にて、四の巻にも、將來云毛不來時

有乎不來云乎、將來常者不待不來云物乎とあり、後世この體をよめるは、皆これら
にならざるなり。○藤原宮、天和國高市郡にありしが、○天皇、藤原宮
には持統天皇、文武天皇、御三代は、いまじりなり。持統天皇は、紀に高天原廣野、
天皇とあり、文武天皇は、續紀に、天之眞宗、皇祖、天皇と見えたり。舊本、この天皇の
下、持統天皇をのみおびたるは、あるそかなり。○天皇御製歌、○天皇、持統天皇にませり、たゞし、これは天皇の、いまだ清御原宮
にておはしませし、いほのことなる事は、下の歌どもにても知らるれど、文武天皇が
いれさせ給ひては、清御原宮の標中に入るべきならねば、この御代の標をたて、
取めたるなり。○春、過而夏來、其之、白妙能衣、乾有天之香來山、○天皇、大天原宮、白妙能衣、
この御製は、燈になほ、春なれど、おぼしめし、が、香山社なり、衣ほしたるを御覽
じて、夏來であらと、時のうつれるを、驚き歎き給へるなりといへるがごとし。
○春過而夏來、其之、一頁之は、一つの證とすべし、もの得で、推察する意の辭なるこ

と、既にいへり。この二句は、景色の、いたぐかはれるを、あどろかせ給へるなり。○白妙能、白布能なり。タへは、すべて、織れるものといふ。さて、この詞は、衣袖また襟などにつけてもいへり。また、後には、たゞ白き意として、雲、雪などにもつめていへり。といはん。枕ならんは論なけれど、猶、その衣、大かたは白かりしなるべし。枕詞ならんからに、紅緑などの色々なるを、さしつけて、白妙の衣とは宣ひ出でじと思へばなり。と、百首異見(香川景樹)にいへる。さることなり。○衣乾有、衣ほしてありとなり。夏來れば、去年より、ものに藏めおける衣、どのかひ臭き、また春まで著つるを藏めんとて乾す、今も、つねのことなり。これ、即、夏の來たる證にて、上に、良之とのり給へるも、このゆゑなり。○天之香來山、既に出でたり。たゞ、かくのり給ひて、そのわたりの家、もときこゆるがめでたきなり。

◎大意、きのふまで、たゞ、春とのみ思ひたりしに、早くも、その春の過ぎ去りて、夏こそ來たるらし。打ちむかふかの天のかぐ山、わたりに、衣をかけほしたりなどなり。さて、この御製新古今集、夏に、二の句を、夏來にけらし。四五の句を、衣ほすてふ、あまのかぐ山と改めて載せられたり。その世のふりに合はせられたるなるべけれ。

と、まづ、來の一字に、けの二音を、つけて讀まんも、あぼつかなく、また、衣ほすてふのて、ふは、といふ、といふ言のつゝ、まれるなれば、いよく、理なし。一首のうへ意とほらぬなり。あまも、訓みひがめたるなり。古くは、必、アメンカクアマとよめり。されば、すべて用ふべからず。

柿本朝臣入麻呂(近江荒都時)作歌 ○柿本朝臣入麻呂、傳つまびらかならず。但「考」の別記に、此人は、崗本宮(後崗本宮)にて、齊明天皇(なり)の比に、や生れつらん。藏原宮の和銅三年(元明天皇、奈良へ遷都前)のころに、身まかれり。齊明天皇の元年より、藤原宮の和銅三年(元明天皇、奈良へ遷都まで五十六年)と見えたり云々。且、出身は、かの日並和皇子、命の舍人にて、その後、高市皇子、命の皇太子の御時、同じ舍人なるべし云々。また、位は、六位より上にあらず。官は、豫目(豫目)の間のよしにいへり。皆、集中の歌、并に、端詞等によりての考説なり。尙、くばしくは、集中につきて考ふべし。古今集の序に、正三位とあるは、後人の書き加へたる偽りなどにて、いふにたらず。さて、この柿本云々の七字、今本、いづれも、時の字の下につらねたれど、今は、古本によりて改めたるに従ひつ。前後の例も、しかなればなり。○近江荒都、天智天皇六年、飛鳥崗

本宮より近江、大津宮へうつらせ給ひ、十年十二月崩御したまひ、明年の五月、大海人、大友の二皇子の御軍ありしに、事平らきて後、大海人皇子尊は、飛鳥清見宮に天下しりしめられたれば、近江宮は、舊都となれりしなり。さて朝臣のこの舊都を過ぎたりしは、いかなるをりなりしか。今いふべき限りにあらず。

玉手次、欽火之山乃、檀原乃、日知之御世從、阿禮座師、神之靈、櫻木乃、彌繼嗣、爾天下所知食之乎、鹿見、倭乎、置青丹、吉平山越、而何方御念食可、天離、夷者、雖有、石走、淡海、國乃、樂浪、乃、大津宮、爾天下所知食、兼天皇之神、御言能、大宮者、此間等、雖聞、大殿者、此間等、雖云、既立、春、日香、霧流、夏、草香、繁成、奴留、百、磯城之、大宮處、見者、懸毛。

この歌は、朝臣が近江、大津宮の世にもたつて、今は見るおけもなく荒れ

はてなるを、深く歎き、歌なり。○此本、阿禮座師、神之靈、櫻木乃、彌繼嗣、爾天下所知食之乎、鹿見、倭乎、置青丹、吉平山越、而何方御念食可、天離、夷者、雖有、石走、淡海、國乃、樂浪、乃、大津宮、爾天下所知食、兼天皇之神、御言能、大宮者、此間等、雖聞、大殿者、此間等、雖云、既立、春、日香、霧流、夏、草香、繁成、奴留、百、磯城之、大宮處、見者、懸毛。

○玉手次、櫻木乃、檀原乃、日知之御世從、阿禮座師、神之靈、櫻木乃、彌繼嗣、爾天下所知食之乎、鹿見、倭乎、置青丹、吉平山越、而何方御念食可、天離、夷者、雖有、石走、淡海、國乃、樂浪、乃、大津宮、爾天下所知食、兼天皇之神、御言能、大宮者、此間等、雖聞、大殿者、此間等、雖云、既立、春、日香、霧流、夏、草香、繁成、奴留、百、磯城之、大宮處、見者、懸毛。

○欽火之山にありて、今、柏原村のある處なり。さてこの宮は、神武天皇のおはしき

しゝなり。日知は、徳の廣大なるをいふ、漢字の器の字につきての訓語なるべし。さういふ。この詞を、やがてこゝの日知の字の意として、天、日嗣しるしめす天皇を稱し奉る詞なりといふは、いかにあらん。そは、かしくおかれど、史上を按ふるに、いづの御代にても申しまつれりとも、おぼえず。また、古くより、高僧達人などをさして、もいへればなり。但し、こゝは、即聖帝の意にて、神武天皇をさし奉れるなり。從は、よくなり。○阿禮座師、神之靈、生れまし。歴代の天皇、皆ことごとく、この意なり。神は、天皇を申しまつれるなり。○櫻木乃、彌繼嗣、爾、櫻木乃、枕詞なり。下の繼にかゝれり。言の相かよへるは、つゞけたるなり。櫻は、今、梅の字を用ひて、ツカとも、ツカともいふといふ。彌繼嗣、爾は、御代々御位をつがせ給ひしよしなり。彌は、ものいかになる意、燈にこゝに、倭、爾、面、といふことあるべきを、上の從下の倭乎、置而に、しるはれば、おかれなるなり。詞の方あることあるべきといへり。○天下、所知食之乎、天下をわらしめ給ひしを、をさなり。こゝは、天下の何方御念食可に、つゞけて心得ずし食之乎の三字、或本に、食來とあるをよしとして、説けるも、おれど、この語勢を、おぼふに、は、本文の方だに、あるべきなり。○鹿見、倭乎、置青丹、吉

平山越而...の四句本文に、天爾滿倭乎置而青丹吉平山乎越とあるを、今は或本文の方まさりさまに改めれば、それをとれるによれり。虚見も青丹吉も共に枕詞にて上にいへり。倭乎置は御代々の京なりし倭を捨ておきてなり。平山は奈良坂にて倭より近江へ行く道なること、これも上にいへり。何方御念食可、何方は俗のイナウニなり。御念食可は、おもほしめしてかありけんとなり。しての、ちのつからせと約まり、可の下ありけんのは、おかれたるなり。凡虚ばかり難じとなり。さてこの二句、姑く上の虚見云々の上にうつじてみれば、心得やすし。天離、夷者雖有、天離は夷の枕詞なり。天に離る日とつけたりといへり。夷、こゝは京にむかふて即ち近江國をいへり。京をはなれてゐなかにあれどとなり。さて、このにはあれどといふ詞を、おもふにこの下に猶ほ、と違からずよき處とて、いふほどの意をふくめたり。味ふべし。石走、淡海國乃樂浪乃、大津宮爾、石走は淡海の枕詞なり。石走る、海水といふ意につけたるなるべし。その方やあだやかならば、水の溢れて石の上を走り流るべしなり。石走を、いふべし。よみて、石橋の意に用ひたるもあれば、こゝも、しか訓めるに據るべくもあはれど、

八の巻に、石激垂見之上乃云々とある。石激は、イハハシと訓むべきに、十二の巻に、石走垂、水之水能云々とあれば、今はこれらになぞらへて訓めるに従ひつた。よし、イハハシと訓む時は、あはひ間とつけたる意なりといへり。あはひのあは、と、淡海のおふと、言のかよへばなり。間とは、山川の渡り瀬などに、石を並べ、すゑて其上をふみて渡り行くやうにせる。石と石との間をいふなり。樂浪、反歌に、樂浪の思賀ともあれば、古志賀よりも廣き名なりしなるべしといへり。思賀は、即ち今の滋賀郡なり。大津宮、爾實は大津の地に宮づくりし給ひて、その宮にといふ意なるを、今は宮の名にゆづりて、しか聞かじめたるなり。天下所知食兼、兼は例の過去の想像辭。こゝにて、意きるべし。非ず、下の、大宮者云を、大殿者云を、つゞけて、こゝろうべし。天皇之神、御言能、天皇、スメキとは、六の巻に、皇祖とも書ける字の意にて、すべて前代の天皇を申しまづる例なりしを、後には、當今天皇の御代までをもこめて申しまつり、つひには、當今天皇御一人をさして、スベラキなど申しまつるやうにもなれり。こゝは、天智天皇をさしまつれり。神之御言、神之尊にて、たふとめる稱なり。神は即ち天皇なり。大宮者、此間等、雖聞、大

をさせるもあれど、こゝは宮地をいへるなり、悲毛、かなしとは、すべて深く心に
 しみておぼゆるをいふ言なり。されば、苦しきにも、愛づるくはしくいへば、これに
 また、かはゆき意とあもしるき意とありにも、哀憐に思ふにもいへり。たゞ、悲哀の
 意とせるは、後のことなり。こゝは、即ち、帝都の荒れはてたるを、あはれに思ひて、
 たく、うち歎きたるなり。毛は例の歌辭、こゝの結句、或本の方には、見者左夫思母と
 あり。うら悲しくさびしき意なれば、あなじことなり。

○一篇の總意、畝火の檜原の宮の聖帝の御世よりこのかた生れ繼ぎたまひし
 天皇のかぎり御代々、大和の國にて、天下を治めたまひしを、その大和の國を置き、
 奈良山を越えて、いかさまに思しめして、かありけん、都をはなれて、都にはあれど、
 なほ、間遠からぬよき處とて、近江の國の、大津の地に、宮をうつし造らせ給ひて、そ
 の宮にて、世を知り給ひけん、天皇(天智)の大宮處は、大和に在りて、遙かに、此處なり
 とは聞けど、今日來て問へば、たしかに、此處なりとはいへど、いかにしつるにかあ
 らん、跡かたもなし、さばかり、聞こえし、大宮處のあらぬこと、やはある。もしは、春霞
 などの立ちへだてたるにかあらん、または、夏草などのあはひ隠せるにかあらん、

あやしどもあやし、かくあやしみながら、その大宮處を見れば、目さへかきくれて
 いと、悲しきことよとなり。

反歌、
 樂浪之、思賀乃、幸崎、雖幸有、大宮人之、船、麻知、兼津、
 この歌も、大宮の今も、なほあるがごとく、よみなしたるなり。

○樂浪、上の長歌にいへるがごとし、○思賀之、幸崎、幸崎は、滋賀縣の内なれば、
 がくいへるなり、○雖幸有、幸は、無恙、また、平安など、も書きて、かはらずあるを
 いふ、さてこの詞は、今は、上の幸崎の崎をうけてつゞけたり、幸崎は、ありし代のま
 して、今もかはらずあれど、なり、○大宮人之、船、麻知、兼津、大宮人は、大津の宮
 の宮人をいふ、船は、大宮人の船を待ち得ぬよしなり、麻知、兼津、作者の待ち得ぬに
 は、あらず、幸崎が、大宮人の船を待ち得ぬよしなり、兼は、今、俗にいふとは、異にて、集
 中、不得ど、かける字の意なり、津は例の過去の辭にて、こゝは、幸崎の船をまつら
 んに、つひにより來ねばいへり、扱、こゝの二句は、いかに淋しきことならん、幸崎
 の心を、深く、愁みたるなり、尙、この歌は、二の卷なる、八、隔知之、吾期、大王乃、大御、船待、

可將戀四賀乃幸崎とあるを合はせ考ふればその意のづから明らかならん
 ◎大意 樂浪の志賀の幸崎は、ありし世のまゝに、今もかはらずあれど、そのかみ
 出で、遊びけん、大宮人の船は待ちどり得ずて、さびしげにも見えわたるかな。そ
 の心のほどやいかならん、おもひやられて、いとあはれなりと女もはれぬ。
 在散舞彌乃志我能大和太與抒六友昔人二亦母相目八方

この歌は、盤石上の幸崎の歌を、今一たび歌かれたるこゝろ、言外にあふれて見ゆ
 といへるがごとし、
 ◎志我能大和太 和太とは、水の入りとみて、廻れる處をいふ、即ち入江なり。大
 は、廣大なるをたゞつたるなり、檜川に、此は、大津の濱町の前、打出濱の邊、四宮松本
 の下まで入り廻りたる江をいふ、即ち昔の大宮處の前通なりといへり、されば、便
 りなき處なれば、宮人などの常に、釣魚のあそびなどせし處とは知られたり○與
 抒六友 たどひ、いかやうに淀むともとなり、入江の水を見て、かく昔ながらにも
 淀めるものと、悲しさにいへる、なるべし、よどめどもといはざるに、心をつくべ
 しと、檜川にもいへり、さて、水の淀めるは、ちのすから物を待つ、状のあれば、やがて

待ち、淀むといはんがごとしといへり○昔人二亦母相目八毛 昔人は、大津、宮の
 時の人をさぐるなり、亦母相目八毛は、再も逢はんやは、えわじといふなり、毛は、
 例の蘇絆、こゝも、上の歌の大宮人之船、麻知兼津と同じく、大和太の昔の人にあは
 りよしなり、さて、この歌も、上のも非情のものに、情あらせていへるが、いとあれな
 るなり、さるは、作者、みづからが悲しめること、ちのすから言外にあふれたれば、な
 り、
 この歌、或本の方云の句、比良乃とあり、結句、將會跡母戸八とあり、いづれにてもあ
 るべし、將會跡母戸八は、集中、忘れん、ちのすこと、を、忘而念哉、などいふへる類
 にて、た、あは、ん、あは、え、あは、は、と、いふなれば、本文の意とあはれることなし、
 ◎大意 さらなるみの志我の大曲よ、汝はたどひ、いかやうに待ち淀むとも、都は、は
 大荒れはてたれば、大宮人の船をそびすべきよしもなし、されば、昔ありし、その
 宮人に、またも逢はんやは、あはれむべきこととなり、
 高市古人、感傷、近江、舊、堵、作歌 ◎高市古人、或本の方に、高市連、騷人、とあり、三の卷
 にも、この人の、近江の舊都の歌あれば、この方正じかるべし、古人は、諸註にいへる

がごとく、まことに歌の初句よりまざれたるにもやあらんされど、證あるにもあらねば、今はしばらく本文のごとし。黒人の傳もしられず。舊塔三の卷に、難波塔ともみえたり。拾穂本に塔を都に作れり。かよはし用ひたるなるべし。古人爾和禮有哉、樂浪乃、故京平見者悲す。

あまりに荒都のかなしさに、おが身の上をさへあやしめるなり。

○古、入爾和禮有哉、古人とは大津の宮の時代の人をいふ。有哉は、あればにやなり。○見者悲す、三の句の疑ひのやをうけてとちめたり。

○大意、今の世の人ならば、むかしのことのさまで、悲しきことは無かるべきことわりなるを、もしは、在りし大津の宮の御代の人に、われあればにや、このふるま

都を見れば、みづから、あやしきまで悲しき、おもへば、なほ、その世の人にもあらぬ

ものをいかなることにかぞなり。

樂浪乃國都美神乃浦佐備而荒有京見者悲毛

近江の都の荒れたるも、畢竟はその國の神の御心にかなはざりしが故にて、せん

すべなきこと、深く、うち歎きたるなり。

○國都美神、樂浪の國を領し給ふ御神なり。御は、たへたる詞なり。樂浪の國は、

例の、吉野の國、泊瀬の國などの類なり。○浦佐備而は、心裏暴びてなり。

○大意、さばかり、全盛なりし、大津の京も、國の神の御心にかなはず、つひに世の

みだれ、壬申の亂さへいで来て、荒れはてたる、その大宮所を見れば、さまざま、昔の

事どものまのばれて、いと悲しきことよとなり。

幸于紀伊國時川島皇子御作歌。○紀に據るにこの行幸は、持統天皇、朱雀五年(左

註に、四年とせるは、誤なり)九月のことなり。○川島皇子、天智天皇の皇子なり。天

武天皇の紀に勅を奉じて、國史を撰み給へるよしなどみえたり。

白浪乃、濱松之枝乃、手向草幾代、左右二賀年、乃經去其武

これは、手向草にことよせて、懷舊の情を述べたまへるなり。

○白浪乃、濱につづけたるは、濱はつねに、浪のうちよする處なればなるべし。な

匠、白菅之真野、濱乃春などいふと同例なり。白菅の生ふる野、炎のもゆる春、どつ

く意なり。○濱松之枝、濱に生ひたる松なり。○手向草、草は借字にて種なり。何

にまれ、手向に用ふる物をいふ。さて、手向とは、すべて、旅路おもに、首途に山上など

にせり)にて、無恙を祈りて、道守の神に物を献るをいふ。後には、つねに神佛に物を献るにもいふは、うつれるなり。○幾代左右二賀年乃經去其武。濱松が枝の、その手向種は、今は幾代までにかなりぬらんとなり。さて、燈籠の巻の上に、齊明天皇紀の温泉の幸あり。又、中皇女命、紀の温泉におはしての御歌あり。齊明天皇は、この川島皇子の御祖母にまじり、中皇女命は御伯母なり。されば齊明天皇中皇女命などの紀國におはしつゝ、この濱松のあたりに、たむけさせ給ひし事をよほせ給へるにこそいふる。よくこの御歌を味ふるに、けにさることなるべし。たゞし、濱松が枝の手向やさであるを、もへば、そのかみ、この濱松のあたりに手向して、その物を、松が枝にかけ置きたり。なほいふことを、かねて聞き給へるに、もやあらん。また、齊明天皇の紀の温泉の行幸の時より、この時まで、わづかに、三十九年に過ぎざるを、幾代までにか云々など、おぼつかたげに、給ひるは、かの手向のとき、たゞそのほの事のみならず、ほの事も、今にその手向種が、ゆたに、おぼれは、幾代まで、年の經ぬるに、おぼれんとあやしみての給へるにこそ。○經去其武。或本に經爾計武とあり。いつれにてもあるべきやうなれど、なほ

本文の方なるべし

○大意。御祖母の君、御伯母の君たち、この濱松のあたりに、手向し給ひたりと聞きつるは、たゞそのほの心地するに、今來て見れば、松が枝にかけあかせ給へり。とさつる、手向種もなし。さては、そのもの、幾代といふまで、年の經ぬるにかあらん。おぼれは、その君たちも、今は世におはしまさざりけり。おはれ、昔のしのはる。まことよとなり。○右の行幸と、なほ度なるべしといへり。○勢能山。孝徳天皇紀に、紀伊兄山ともあり。○阿閉皇女は、天智天皇の皇女、日並知皇子命(天武天皇の皇子)の御妃、文武天皇の御母、即ち元明天皇にませり。○此處是能。倭爾四手者、我戀流木路爾有云、名爾負勢能山。○此處是能。これや彼のといふ意なり。すべて、かのといふべきを、このといふる。古く例も、はしがの、蟬丸の歌の、これやこの、行くもかふるも、おかれつゝ云々の歌

も多しとて、此也の此は、即ち勢能山をさしてのり給へるなり也。疑の辭、結句
 まで既かけて見るべし。彼のとは、つねに閉き居ること、或は世にひび習ふること
 などとさしていふこと、今もかはることなし。こゝも、これやかの紀路に在りとき
 と居たる云々といふ意なり。○倭爾四手者、倭にありてはなり。この御詞にて、從
 御の御身の止にては、夫君の御事をも、ちばし絶えておはする意を示し給へり。こ
 れど、なかく、下に、下の御心のあらはれたる、あはれと申しまつるべきなり。○吾戀
 流、この御句、結句の勢につけて心得べし。わがこふる夫の君の意なり。○木路
 爾有、蓋山紀路に、さる山ありと、人のいふを、ききもき給へるよしなり。○名爾負勢
 能山、夫の君の夫といふことを、名に負ふ山ならんかとなり。上にもいへるがご
 とく、初句のやの辭、こゝまでかゝりたれば、こゝにて、かたうつして聞く方心得や
 すし。夫の君は、即ち日並知皇子命なり。○大意、この山が彼の、大和にありては、わが戀ひまつる夫の君の夫といふこと
 を名に負ふる山にして、かたて、紀路に在りて聞き居たる勢の山ならんかとなり
 幸于吉野宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌。○この行幸も、持統天皇なり。たゞし、左註

にもいへるがごとく、この天皇の、吉野宮に、幸し、事度々なれば、いづれの時とも
 定めがたし

八隅知之、吾大王之所聞、食天下爾國者、志毛澤、三雖有山川之清河内跡、御心乎、吉野乃
 國之花散相、秋津乃野邊、爾宮柱、太敷座波、百破城乃大宮人者、船並、且川渡、舟鏡夕河
 波、此川乃經事奈久、此山乃彌高、其之珠水、激瀧之宮子、波見禮跡、不飽可聞、
 よ吉野のすぐれてめでたき地なることを感歎せるなり。さて、この篇二段にわか
 せたり。舟鏡夕河渡にて一段、此川乃云々以下一段なり。○澤三雖有、多にぬれ
 ◎所聞食、所知食といふに同じ。天下を治め給ふをいふ。○澤三雖有、多にぬれ
 どもなり。○山川之清河内跡、山と川との清々めやれるよき地なり。さて、河
 内は、字のごとく、川のめぐれるうちをいふ。○御心乎、吉野の枕詞なり。吉義に、天
 皇の天御心よ、善しと稱へ奉れる謂にて、つゞけたるならんかといへる方、ただや
 かなるべくや。○花散相は、ひきつゞきて、絶えず花のちるさまなり。さて、この詞は、
 吉野は、もはら花に名ある地なれば、秋津野の枕詞とせるなりといひ、また、時のさ
 まむも、形容したるにて、なほ、霞立春などの類なりともいひ、今いづれとも定

めがたけれど、なほ後の説に心ひかるゝなり。そは、たどひ、枕詞なりとて、時にもあ
 げぬに、花ちらふなどの詞の、うち出でられぬこと、ちのすればなり、燈、檣、柁には、こ
 の行幸を、秋と定めて、秋花のさるよしにいへれど、これまた、おぼつかなし、考には、こ
 の一の一句をとり出で、春にはありけんといへり。されば、花散相は、時の形容と
 見ても、春秋は、なほ定めがたきなり。○宮柱、太敷座波、天皇の、離宮にまし／＼とて、
 その宮を、やすく、まろじめすよしなり。太は、稱辭、敷は、知にて、領し給ふをいふ。○船
 並、且川渡、舟競、夕河渡、これは、從駕の宮人等の精勤しまつる状をいへるにて、
 やがて、天皇の御徳を、たしへ奉れるなり。且川は、朝にわたる川、夕河は、ゆふべに渡
 る河をいふ。さて、この四句づゝ、相對したり(以上一段)

○此川乃絶事奈久、此山乃彌高其之、此川、此山は、みな、上の山川をうけたりども
 に、下の詞をいはんがためなり。乃、下の、如く、のゝを合めたり。絶事、奈久は、この
 川の流れの絶ゆることなく、つねに、行幸し給ひてなり。彌高、其之は、この山の高
 きがごとく、いよ／＼高く、大宮所の立ちさかえますらしとなり。らしは、既にもい
 へるが如く、現在のことを、おしはかりていふ辭ながら、こゝは、未來をもかけてい

へり。そは、まのあたり、貴き御ありさまを、見奉りて、後をもはかりたればなり。この
 つかひさま、今、俗にも、つねのことなり。但、らしは、俗にラシイといふ。高くは、隆盛の
 意なり。さて、この四句、また、二句づゝ、相對したり。すべて、賀さまつれる詞なり。○珠
 水激、瀧の枕詞、瀧の岩をはしり流るゝよしなり。羨をもて、書ける文字なり。○瀧
 之宮子波、宮の前、瀧川なれば、かくいへるなり。宮子、は、宮所にて、既にもいへり。波
 の辭、こと、心をつくべし。行宮の多き中にも、この宮所は、の意なり。
 ○一篇の總意、おが天皇の治め給ふ、この天の下に國は、あまたあれど、山高く、川
 清く、ことにすくれて、めでたき、みよし野の、河内の、私津野に、大宮あかせ給ひて、行
 幸ましますれば、從駕の宮人等は、われあくれども、船を並べ、相競ひて、朝川をわたり、
 夕川をわたる(以上一段)如此、宮人たちの、いそしみ、仕へまつるを見奉るにつけ
 て、も、なほ、御行くすまは、たきり流るゝ、この川のごとく、絶えず、つねに、行幸もし給
 ひ、また、天に聳ゆる、この山の如く、高く、さかりに、大宮所も、榮えいまさんと、おしは
 かり奉らるゝなり。あはれ、貴きことかな。かしこかれど、みづからも、今、御供に侍り
 て、見奉るに、このめでたき瀧のみこや、は、幾たび、みれども、みれども、なほ、飽く世し

らぬ處かなとなりては、
 反歌 雖見飽奴吉野乃河之常滑乃絶事無久復還見奉
 「燈に長歌には帝の御うへをもはらよみ、この反歌にはみづからのうへをよめる
 なれといへるがごとし」
 ◎雖見飽奴 長歌の結句をうけたり○吉野乃河之 即ち瀧の宮子居いへるな
 る○常滑乃 常滑のごとくなり常滑は底滑なり水垢のいど滑らかなるが綿の
 やうにて水底の岩などにつけるものをいふこゝは實は河の絶ゆることなく此
 てもありぬべきをこのもの水の流るゝかぎりあるものにてことごとしへな
 る岩にさへ親しみのあればとり出でいあやなしたるなるべしさてこの句まで
 は今までのあたり眺むる處をもて絶事無久といはん序としたりこの句の下に
 絶地をなどの詞を入れてみるべし○復還見奉 初句に應むたり復は燈に再還
 のことといふと上の絶事無久にひかれていくたびもといふ意となるなりこれ
 ならでも上にひかれ下に引かれて義のうつること詞のつねなりといへるがど
 とし

◎大意 かく見れども見れども飽かぬとこるなればこの後もつねに行幸ある
 べしさらばおれも御供仕へまつてこの吉野の河の常滑のごとく絶ゆること
 なくこの勝地を幾度も立ちかへり來て見んとなり
 安見知之吾大王神長柄神佐備世須登芳野川多藝津河内爾高殿乎高知座而上立國
 見乎海邊有青垣山山神乃奉御調等春部者花柳頭持秋立者黃葉頭刺理遊前川之
 神母大御食爾任奉等上潮爾鵜川乎立下瀬爾小網刺渡山川母依氏奉流神乃御代鴨
 ◎上の長歌にはみづと臣下の精勤し奉る状を述べたことには神までも任へまつ
 り給ふおれをいへり
 ◎神長柄 また神隨とも書きて神にておはしますまにといふ意なりなほ集
 中に皇は神にせむまはまをむもまもまじの神佐備世須登 神佐備は御
 遊覽の御心やりをいふ神をまじでの御遊びなどいはんがごとし佐備は手遊び
 日遊びなど奉もつぬのことなり世須は爲るの敬語爲給ふにあむ○多藝津
 河内爾 だまり流るゝ河内にたりカギツは多行四段のはたらきの詞なり○高

殿乎高知座而高殿は、いかにもあれ、たゞ高くつくりかまへたる殿の稱なり、たゞしこゝは、樓閣なるべし。高知座而上の長歌に、大敷座とあると同意なり。○上立、古義に、山、上へ騰立なりと註せれど、なほこゝは、高殿になるべし。○國見乎爲波、國見乎の乎の字、檜杵に古本に隨ふとて、之に改めて、クニミシセレベと訓めり。げに、こゝは、作者は從ひてこそあらめ、みづからの國見するにあらねば、スレベにては、種やかならねど、乎はもとのまゝにて、よく聞こえたり。古義には、國見勢爲波のうつし誤れるなりといへど、中々にわるし。○臺有、青垣山の枕詞なり。山々のより合ひて重疊せる状をいふ。但し本集六の卷に高知爲芳野離宮者立名附青垣十三の卷に、田立名付青垣山之、又古事記などにも、このつゞけさまの見えたれば、こゝも臺有の有の字は、或は付の誤といひ、檜杵或は著の誤といひ、古義で、タ、ナヅクともよめり。この方、まことに理あるに似たり。されど本文のままにて、もきこえぬには、あらぬがうへに、別に證本のあるにもあらねば、たやすく改むるにも及ばざるべし。さてこの句より、下の小網刺渡といふまでは、天皇の、この高殿にましますにつけて、山河の神までも仕へまつり給ふよしといへり。○青垣山、

青山の垣の如く、立ちめぐるをいふ。玉の小琴に、青垣山のものも、じを添ふるは、あろし、あをがき山と、六言にまむべし。青垣山者といふ意なり。青垣山は、花かざし、あちどつゞく意なりといへり。○山神乃奉御調等、奉は、俗に献上といふに同じ。古言なり。タマツルを略していふには、あらず。○春部者、花挿頭持、春部は、春方なり。花挿頭持、山上に、花のさけるを、山神のかざし、もてるさまにいひなしたるなり。持は、添へたる詞にあらず。○秋立者、黄葉頭刺理、黄葉頭刺理、或本に、黄葉加射之ともあれど、こゝは、山神のわざの、とちめの處なれば、本文の意の切れたる方を用ひつ。さて、こゝの二句上の二句に對したり。○遊副川之、この川、新考に、大和志、吉野川、説に、原、自大臺原山流云々、至東川、舊名、遊副川とありとせるを、まことに、この説のごとくなれば、こゝもなし。されど、もしは、これは、この歌をもととせるには、あらじか。おぼつかなし。上の、青垣山になぞらへても、一は、一つの川の名には、あらざるべきか。或説に、これは、結ぶ川の意にて、山麓をめぐれる川をいふといへり。されば、即ち、吉野川をいへるなり。なほ、本集、七の卷に、大王之御笠山之帶爾爲流細谷川之音乃清也、などよめるものあるを、おもふに、こゝも、吉野山の、帯にせる

川なれば結ふ川ともいへるにやあらんまた同じ巻に妹之紐結八河内乎云々と
 よめるも八は歎辭にて結河の内の意即ちこの長歌に多藝津河内とあると同意
 とまこゆさてまたこの句上の青垣山山神乃云々とあるにはあはせてあもつば遊
 副川川之神母とありしが川の一字の脱ちて傳はれにはあらしかざるは上の青
 垣山云々に應じてこゝも遊副川者云々の意とあはゆればなり檜杵に下の句の
 神母の上岡象の二字を補ひたり岡象は水神の御名山の方山神の御名ヤマツ
 き岡ればあちたるにて言も一句に足らずとてなりされどこれは調をなせりと
 考ふべし尙考ふべし○神母三言の句なり○大御食爾御膳にといはんが
 こと長○上瀧爾鵜川乎立鵜川は鵜をつかひて魚をとるをいふ點なるべし立
 は令立の意にて鵜川のわざをする人どもを立たしむるをいふ○下瀧爾小網刺
 渡言されは網もて魚を捕る状をいへりこゝの二句また上の二句に對した上
 瀧下瀧は別に意あるにあらざだといつこの瀧にも意にて處をわかぬをいふ
 渡言はとよみつるは燈の説によりてなり燈に上の秋立者の下或本の黄葉加
 射之を探らばこゝはワタシと訓むべくまた本文の黄葉頭刺理といひ切りたる

をとらばワタシとよむべしといへりげにことありなりさて鵜川も小網刺渡も
 皆人のするわざながら川の神の仕へまつるさまにいひなしたるなり○山川母
 依氏奉流臣民のみなも山之神も川の神も歸依して天皇に仕へまつるとな
 り亦王を指はて天皇の御徳をたよまひれるなり○神乃御代鴨天皇の御代か
 なるは感敷きなるなり○
 ○三篇の總意人かしときわが天皇の神そのまゝの御身に於て御すさびの御心等
 りをし給ふとこの吉野の瀧の河内に高殿を貴く占めさせ給ひてそれに上りた
 るて四方を見渡し給へば立ちかきなりて垣のさどくうちめられる青山をば
 山神のたてまつる買調とて春へは花をかざし持ち秋立ち來ればもみちをかざ
 して仕へ運のれりまた遊副川の神も御膳の料にとてその川の土つ瀧下つ瀧に
 或は鵜川を立たしめ或は網をわたして勵みつとむることよあはれこのさまを
 是れは臣民のみならず山河の神までも仕へまつるゆでたぐ尊き天皇の大御代
 なるかたどなつ山に給ふとよみつるは燈の説によりてなり燈に上の秋立者の下或本の黄葉加
 射之を探らばこゝはワタシと訓むべくまた本文の黄葉頭刺理といひ切りたる

山反歌 高葉集 三三三

山川毛因而奉流神長柄多藝津河内爾船出爲加母

これは天皇の船出し給ふを見奉りて、うち歎けるなり。大意は、臣民のみならず、かく山河の神までも任へまつる神にまはしまして、この瀬つ河内に船出せさせ給ふかな、おはれたふときことよとなり。幸于伊勢國時、留京、柿本朝臣麻呂作歌。○幸于伊勢國、檜杵に伊勢國といひて志摩のことなり。別に伊勢國に幸す處のありて、そのついでに、志摩へもめぐらせ給ひしにはあらず。志摩はもと伊勢に屬てありし故に、幸志摩をも、この頃、專伊勢といふ。歌には、中古まで、伊勢島といひ、又、うちまかせて、伊勢の海人とよめるは、昔、志摩の海人のことなりといへり。さて、この行幸は六年三月辛未六日にて、同月乙酉廿日、遷幸ありしなり。諸註にもいへるがごとく、左註あやまれり。嗚呼見乃浦爾船乘爲良武姫婦等之珠裝乃須十二、四寶三都良武香。○船乗爲良武姫婦等之、もしはかれるなり。いつも行幸の度には、行宮の前わたりの海な

どにて、船あそびなどのありしなるべし。姫婦等は、從駕の女官等をさせるなり。○珠裝乃須十二、云云、珠は例のほめたる詞、裾に潮のみつとはたし裾のぬるゝことながらふのづからまた、船より、渚などに下りあて、計らず、浪のかかりて、いたくぬるゝことなどのあるをさへもはれて、めでたき詞づかひなり。○見禮跡不飽可聞、勝地の上じなり。○大意、この度の行幸に、御供仕へまつりて、嗚呼見の浦に、船のりすらん女官等のつねに、宮中のみあれば、いかにめづらしく、おもしらく遊びて、裾などさへぬららんか。いかにむらむらをかじきことなるべしとたり。○劍著手節乃崎二、今毛可母、大宮人之玉藻荇良武。○劍著は、枕詞、劍を著ぐる手節とかいれるなり。劍は、また、玉劍ともいひて、玉をかされる臂環なり。○手節乃崎は、志摩の答志郡の崎なり。○今毛可母は、今かにて、二つのおは、ともに歎辭なり。○大宮人は、從駕のをのこたちをいへるなり。さて、この歌の大意も、上にさざらへて知るべし。羨みたるなり。潮空爲五、五十良見乃島邊、榜船荷妹乘良六鹿荒島回乎。

これは上の二首とは異にて女のあそろしくおもふらんをいたはれるなり

◎潮左爲は潮のみち来て、浪のさむぐをいふ。○五十瓦見乃島、檜杵に近きところ
参河に属すといへども、志摩の答志の崎とは海上、わづかに三里なれば、御船のつ
いでに、以前もこの島へ渡り給ふことのありしにつきて、想ひやれるなりといへ
り。この島邊は、とどに、浪の荒き處とぞ。○島回これをシヤミと訓めるによりつる
は、集中に浦回と書けるを、借字には、浦笑と書きまた隈回とあるを、假字には久麻
尾ともおければなり。回は、字の意にて、メケリメケリの古言と知るべし。

◎大意、御船のついでに、またかの五十等見の島をも見そなはさんどて、つねだ
にめるを、潮のみち来る時などにしも、女たちの船に乗るらんか。いかりあらん、浪
の荒き、その島のめぐりなるを、いかにわびしからんとなり。

當麻真入麻呂妻作歌。○當麻真入は、姓なり。今、當麻真入は、
吾勢枯波何所行、良武已津物、隱乃山乎、今、日香越等六、
と撰も、上と同じ度なり。麻呂も、行幸の御供仕へまつれるを、京にとどまれる妻の
おもひやれるなり。

○何所行良武、夫の君は今はいづくあたりを歩き給ふらんとなり。まづ、大かた
其うたがへるなり。さて、次に、推量之處をさせり。○己津物、枕詞なり。奥津藻乃の
意、奥は、とよは水底の意にて、水底の藻は、かくれて見えぬは、隠にかはれたる女なり。
オハ、隠るゝの古言。己は起の省略なり。○隱乃山は、伊賀國名張郡の山なり。○
今日香越等六、隱に、この今日といふこと、あるそかに見まじきなり。云々上は、ひ
ろく、いづこをが行くらんと言はるるに、さて、日をかぞへなどしてみれば、天抵、今
日など、は名張の山をこそもすらんかど、さまざまに、思ひわづらふ情かく、をさな
げなる詞づくりにて、かへりて、おもひやりふかきなみといへり。歌の意がぐれた
るところなり。○
石上大臣從駕作歌。○麻呂卿より慶雲元年に右大臣となれるにて、この時、いま
だ、大臣ならざりしかど、例の後よりめぐらして書けるなり。三の巻に、石上卿と
見えたり。○
吾妹乎、去來見、乃山乎、高三香裝、日本能、不見國、遠見可聞、
これも、同を度にて、みやこを戀ひたるなり。

○吾妹子乎、枕詞なり。いざ見んとかいれるなりといへり。○去來見乃山は、佐美山なるを伊の發語を添へていざ見んといふ意につけたるなりといへり。この山三見の浦にありて、其の麓の小川を今も佐美川といふとぞ。○日本能不所見、たゞかくいひて、妹があたりの見えぬといふ意にきこゆるは、初句の詞のつゞけに、西の方に、はるかに見放けらるゝを、この山を漕ぎめぐりては、やがて見えずなるといへり、みえずなるを知りつゝもをさなく前後の句にて疑へるなかりに、あはれなりといふべし。

◎大意はわが別かれ來つる大和の方のみやれど見えぬは、この佐美山の高きが故にかあらん。もむは國のいよゝ遠ざかれるにかあらん、いづれならん、いともいふかしのきことよとなり。

輕皇子宿于安騎野時、楠本朝臣人麻呂作歌。○輕皇子は文武天皇の御少名、天武天皇の皇太子、草壁皇子尊の御子にませり。草壁皇子は日並知皇子尊の御事にて、持統天皇三年四月に薨じ給へり。この御父尊、御在世の時、度々この安騎野に御獵

したまひしことのありければ、今ももはらその御跡を慕ひ給ひてなり。さて、この歌は輕皇子の、いまだ王と申し給へる時なりしを皇子と書けるは、例の後よりたふとみてなるべしといへり。○安騎野は、大和國宇陀郡なり。

八隅知之、吾大王高照日之皇子、神長柄、神佐備世須登、太敷爲、京平置而、隱口乃、泊瀬山者、真木立、荒山道乎、石根、楚樹、押麻坂、鳥乃、朝越座而、玉蟬、夕去來者、三雪落、阿騎乃、大野爾、旗須爲、寸、四能乎、押麻草、枕、多日、夜取世須、古昔念而。

皇子の御孝心をふかく感じ奉れるなり。

○八隅知之、この句以下四句は、皇子を尊みて申せるなり。天皇御一人にかぎらず、皇子をもかく申す、古つねのことなり。高照は枕詞日にかゝれるなり。日乃皇子とは、天照らす日の社の御子といふ意なり。○神佐備世須登、こゝは安騎野にいで給ふをいへり。○太敷爲、京平置而、太敷爲は、太敷給ふといはんがごとし。淨御原の宮より出でたゝせ給ひしなり。藤原宮へうつり給ひしは、これより後のことなり。○隱口乃、枕詞、泊瀬にかゝれるなり。泊瀬は、山ふところなる故に、籠もり國の泊瀬といへるなりとぞ。○泊瀬は、城上郡。○真木立、荒山道乎、真木とは木をほ

めていへるにて、むねと檜にいへり。この木おもに深山にあるものなれば、つねにかくつゞけていへるなり。こゝも、下に引けるが如く、檜原山なり。荒山道乎は、荒山道なるものをなり。檜原にいはゆる、檜原山を越えて、宇陀へ出でたまふ。この間、嶮なりといへり。この句より、下の朝越座而といふ句へつゞけて心得べし。○石根楚樹抽靡、楚樹は雄略紀に、其聚脚如弱木林ともみえたれば、若き木立をいふ。また説文に楚、撥木也とも見えたり。楚の字、舊本禁に作れど、いま古本によりてあらためたるによりつ。押靡はあしなびかせてわけ行くをいふ。さてこの石根楚樹をいづれの本も、みなイハガチノシモトと訓めれば、石根などに生ひたる楚樹の意ときこえたれど、おもへば、あだやかなりともいひがたし。もしは、脱字などのあるにや。或説に石根楚樹と訓むべし。のを添ふべからずといへり。されば石根を押しなべ、楚樹を押しなべてといふ意となるべし。これもきこえてはあれど、なほおもへば、石根を押し靡かすといふこと、いかいあらん。きくなれぬやうなり。檜原には、今勘へて加へつとて石根の下、路の一字を補ひてイハガチノミ云々と訓めり。これは、さもやともあほゆれど、たゞおしめてのことなれば、またいかいせん。なほ

考ふべきなり。○坂鳥乃朝越坐而、坂鳥乃は枕詞、これは鳥どもの山の樹どもにやどれるが、あしたに里へ出づる時、坂の形に隨ひて、うねりて飛ぶ故に、それをやがて、坂鳥といひて、朝越にはつゞくるなりといへり。○玉根夕去來者、玉根も枕詞、陽篋かきろふ火のつゞまれる詞とぞ。かきろふは、かげの、きらめくをいふの義、陽篋のもゆる夕とつゞけたるなり。夕日はことに輝きてもゆるやうに見ゆるものなればなり。玉根の字十五の卷に、玉蜻夕去來者ともあれば、玉蜻の誤なるべしとて、改めたるもあれど、また玉は添へたるにて、限の一字をカヤロヒと訓むべしともいへれば、今は、姑くもとのまゝにちきつ。玉蜻をよめるは蜻蜒の古名、カヤロヒといひし故に、借りもちひたるなり。玉蜻と書けるは、博物志に、五月五日、迎蜻蜒頭於西向、戸下埋至三日不食、則化為青真珠とあるなどによれるにやといへり。○三雪落、三は例のほめたるなり。深の意とのみおもふべからず、檜原にたゞ、軽く置けるなり。この日、雪の零りしにもあらず、雪のよく零る處といふにもあらず、昔より、雪中の鷹狩をよくする大野なる故におけるなりといへり。されど、この詞にて、その夜のさむさおもひ知られたり。阿騎の大野とさへあれば、いよ／＼堪へ

がたきこしちす○旗須爲寸、四能乎押靡。旗須爲寸、薄は百草の中にも、ことに高
くあらはれて、旗の如く、ひらめき靡くものなれば、かくいふなるべしといへり。後
世は、つねに、波奈須々伎とのみいひならへり。四能は靡ひなりといへり。薄は、よ
く靡ふものなればなるべし。但、古義に四能乎の乎は、爾の誤にて、四能爾押靡なる
べし。四奴は、裏に押しふせ靡かする形容をいふ詞なりといへり。けにも、十の巻に、
秋穂乎之努爾押靡ともあるをおもへば、さもあらんか。されど、強ひて改むるにも
あよばざるべくや押靡、こゝは、薄の志なひを押しなびかせて、その上に寐るをい
ふ。さて、こゝに、薄のみをとり出でたる、疑はしからぬにもあらねば、燈には、四能は、
小竹にて、旗薄、小竹などをおしなびけてと二種なるべしともいへり。あだやかな
る説なり。されど、なほ薄は、ことに、目につく草なれば、それをとり出で、他をもこ
めたりと見てあらんも、妨なかるべし。○古昔念而、父尊の、この野にて、遊獵し給
ひしことをおもひて、旅やどりし給ふとなり、この句上の多日夜取世須の上へか
へして心得べし。

○一篇の總意 かしこき輕皇子の神隨神さびし給ふとて、榮華をきはめ給ふ、そ

の大宮を太まかす都の空をよそにして、泊瀬の山は、世にきこえたる、真木立荒山
道なるものを、その山の岩が根の叢木どもをさへおし靡けて、朝まだきより越え
させ給ひて、暮れぬれば、さしも寒き、阿騎の大野に、草どもを押しなべ伏せて、父尊
の、ありし昔をしのびて、旅やどりをし給ふかなとなり

短歌

阿騎乃野爾宿旅人打靡寐毛宿良目八方古部念爾

上の長歌には皇子の御孝心のあまりに、さばかりの辛苦艱難をもちわすれ給
ひて、旅やどりし給ふよしを述べ、こゝには、やどらせ給へる、夜の御心のほどをお
しはかりまつれるなり
○阿騎乃野、長歌の三雪、落を上に添へて見るべし。○宿旅人、皇子をはじめ奉
り、從親のすべての人をいへど、實は、皇子をさし奉れるなり。○打靡寐毛宿良目八
方、うちどけて、寐入られんやはとなり。○古部念爾、この句上の、寐毛宿良目八
方の上には、まはしてこゝろうべし。ありし昔の空をおもふに堪へかねてとなり
歌の意あきらかなり

眞草荊荒野二者雖有黃葉過去君之形見跡曾來師

「燈にわが歎をのみいふがほにて、皇子の御うへはよそにしたるやうに詞をつけたるに、なか／＼皇子をいとほしみ奉れる情言外にあふれたりといへるがごとし

○眞草荊荒野、即阿騎野をさせり、眞草は既にもいへるがごとく、草をほめたるなれば、よき草といはんがごとし。よき草は、荒野ならねば生ひぬものなれば、かくいへるなり。○黄葉過去君之、黄葉は過ぎにしといはん料なり。君は、即皇子の御父、日並知皇子尊をさしまつれり

○大意、かゝる草ふかき荒野なれば、大かた人の來べき處にはあらぬと、悲しくも、今は世におはしまさぬ君の御かりし給ひし御舊跡の處なれば、その御形見とちもひて、かくは來つるなりとなり

東野炎立所見而、反見爲者、月西渡

この歌も、次のも、あけはなる、翌朝の空のけしきなり
○炎、こゝは、朝日のさしいづる光なり。○月西渡、在明の月の落ちかゝれるさ

日雙斯皇子命乃馬副而御獵立師斯時者來向

まなり、歌の意吟じて知るべし
皇子命のありし朝獵のさまをちもひ出で、うち歎きたるなり

○馬副而、從獵の人どもと馬を並べてなり。○立師斯は、立ち給ひしなり。○時者來向、燈に、朝獵に立ちまし、時の來むかふといふなるべしといへるがごとし。時節のめぐり來たる意とするは、前の歌をちもひはね説なり。あはれふかき歌なり

藤原宮之役民作歌 ○この宮は、書紀によるに、持統天皇四年の冬、宮地を觀たまひて、同じき八年の冬、落城せしなり。さて、清御原宮よりこゝにうつらせ給ひしは、同年十二月の事なり。○役民作歌、かくはあれど、これ或は、當時のよき歌人の、彼の民に擬へて、よめるなるべし。人麻呂などにやといへり。歌のさまなどちもふに、まことに、さもあるべくや

八隅知之吾大王高照日之皇子荒妙乃藤原我宇倍爾食國乎賣之賜牟登都宮者高所知武等神長柄所念奈戸二天地毛織而有許曾磐走淡海乃國之衣手能田上山之與木佐苦槍乃燻手乎物乃布能八十氏河爾王藻成浮倍流禮其乎取登散和久御民毛家忘

身毛多奈不知鴨自物水爾浮居而吾作日之御門爾不知國依巨勢道從我國者常世爾
成幸爾留神龜毛新代登泉乃河爾持越流真木乃都麻手乎百不足五十日太爾作派
須良牟伊蘇波久見者神隨爾有之

この歌は、天皇の都をうつし給ふにつきて、天地の神々も御心をよせたまひ、臣民もわが身をさへ忘れてつとめ仕へまつるは、ひとへに、帝徳の至極なりと感歎せるなり

○八隅知之云々　こゝは、持統天皇を申せるなり○荒妙乃、藤の枕詞なり、クハは、絹布の總稱、細かにてよきを和布といひ、鹿くてあしきを鹿布といへり、藤の皮もて織れるは鹿ければ、つゞくるなるべし、妙は、例のかりもちひたる字なり○藤原我字倍、字倍は上にてホトリの意、即ち藤原の地をさせるなり、必しも丘とみずてもありぬべし、この巻の終はりに、高野原之字倍とあるも、ホトリの意なり○食國乎、賣之賜牟登、食國、こゝにては、天下の意、所知食國をばぶける詞なり、賣之賜牟登は、見給はんとてにて、これも所知食の意なり○都宮者、高所知武等、都宮、ミアラカとよめるは、御在處の意、またオホミヤと訓みてもありぬべし、高所

知武等高は、上に、太敷などみえたる、太と同じく稱へたる詞なり、さて、以上の四句は、天下を治め給はんがために、まづ、新に都を定めて、桓武天皇以前御代々、必遷都の事ありしなり、大宮をつくらせ給はんと、の意なるを、二つにわけて、二句づゝ對せしめたるなり○所念奈戸二は、おぼしめすにつれてなり○天地毛、縁而有許貫、この大宮づくり、に、天神地祇も、歸依してましませば、こそあらめとなり、この下も、し、さらば、いかで、か、次に述ぶるが如き事、の、あらん、といふ意を、ふくめたり、天地毛は、臣民のみならずの意、さて、以下の句どもは、即ち、みな、こゝの二句の仔細を述べたるなり○衣手能は、田上の枕詞、衣手の、た長とかゝれるなるべし、たは、古義に發語と見たるぞよろしかるべき、本居翁の説は、足なり、そは、九の巻に、衣手乃名木ともあればなり、名は、長の意も、つゝけたるなり、た、し、こゝも、たがの、が、ま、では、かゝらず、といへるは、泥めるに似たり、ナガを、ナ、ともいへれば、何れにかけていはんも、妨なかるべし○田上山は、近江國栗本郡○真木佐苦、檜乃、繻手、真木、佐苦は、檜の枕詞、真木を、さく、檜と、つゝけるなり、檜、に、真木は、檜の木、佐苦は、拆き割るのみに、あらず、截り、分くるをも、兼ねて、一切の材を、山にて、荒伐取するを、い

ふ、また、しか荒伐取して、桂、檜、長押、椽、鴨居等を大概に、截り分け、木づくりしたる材を、婦手といふ。さて、婦手は、椽取の義なりといへり。○物乃部能、これまた、枕詞なり。物部の、氏々の、廣く多きを八十といひて、氏川についたるなり。物部とはすべて、武職をもて、朝廷に仕へまつるもの、稱にて、後世までも、武士を、モノ、フといへり。また、武人の、みにもあらず、朝廷に仕へまつる、すべての、人どもをもいへるは、上代、武職を、主とせられしが、故なり。○八十、氏河、八十は、枕詞のつかけにつれて、そへたる詞、なほ、振山を、袖振山といへる類なり。氏河は、宇治川にて、山城國、宇治郡。○玉藻成は、玉藻のごとくなり。○浮倍流禮、この下に、例のばを、添へて、聞くべし。○其乎取登は、その流せる材を取るととなり、但、取るは、陸へどりあぐるにあらず。○諸註の、陸へあぐるよしにとけるは、上の、檜乃婦手と、下の、真木乃都麻手とを、同物とせるがゆゑなり。取りて、筏に作りて、宇治川と、泉川との川俣のところにて、泉川の方へ、流しやるをいふなり。○散和久御民、毛家忘、身毛多奈不知、散和久は、御民、即ち、人夫の、つとめはげむ状なり。家忘は、父母妻子をもあもはずてなり。身毛多奈不知は、わが身の事をも、意得なしに、うちわすれての、意なりといへり。たい

し、多奈は、諸説あれど、いづれも、おぼつかなし。九の巻に、身者田菜不知、また、十三の巻に、事者柵知などもあれば、知らず、知りといふ詞にかゝるは、知られたれど、その意は、まことはいかかなるにか、檜柵には、すべて、物を置くを、柵といへば、身の置き處も、知らずといふ意なりといへり。不知は、知らずになり。○鴨自物、水爾浮居而、鴨自物は、枕詞、自物は、ノ如クの意なりといへり。なほ、鳥自物、犬自物などいとおほし。水爾浮居而は、即、宇治川になり。さて、この處、説々あれど、とりつゝいめていへば、上にもいへるが如く、上の、檜乃婦手と、下の、真木乃都麻手とを、同物とする。別物とする。このたがひめより、わかるゝに、外ならず、大かたは、同物の説にて、この句より、九句を隔て、下の、泉河につけて、見るべしといひ、燈には、この句の、而もむに、水に、浮き居て、その、真材どもを、とりて、藤原には、こびて、切りもし、こなしもし、してなどいふほどの、事をもたせたるなり。さて、不知國、依以下は、また、別事として、見ざれば、事交はりて、義をなさいるなりといへり。この二説のうち、燈の方や、まさりさまには、おぼゆるものから、なほ、あかぬ心地す。さるは、なほ、くりかへし、吟むこゝろみるに、不知國、依以下、別事として、見るは、さることながら、もしは、水爾浮居而、吾

作、日之御門爾、須、良、牟、といふついきなるをそのあひたに、諸國よりも、おなじく、
 官材を引くよしをはさみたるにはあらざるか。この説、あたれりや。あたらずや。知
 らぬと、今は、いづれの説によるべくもあはねば、しばらく、みづから、かく、おもひ
 定めて、とくべし。○吾作、日之御門爾、吾は作者の吾なり。日之御門は、日の御子
 のまします大宮なる故に稱すとぞ。即、藤原宮をいへり。五の卷に、高タカ光ミチノ日ヒ御ミコ朝カド廷マドと
 もみえたり。○不知國、依、巨勢道、從、燈、に、しらぬ國とはいと遠き國をいふなり。大
 かた、ゆきて國こそあらめ。わが御國の内に、しらぬ國とては、あるべくもあらぬを、
 かく、不知國といふはいと、遙かなる國々をおもはせむがための詞づくりな
 り。依はこの下の、從も、二つながら、泉乃河爾、持越流にあちあるなり。巨勢道はこの
 都に、たよりよき道なればなり。はるかなる國々より、其材をきり出で、巨勢道よ
 り、泉河に持ち越すをいふなりといへり。この二句、不知國、依、巨勢道、從、と、五言七言
 により、みて、不知國は、外國の、皇化に服して、歸化するよしにて、依までは、唯、巨勢の序
 なりといふ説によれるも、多けれど、よく味ふるに、さる調べども、あはねぬのみな
 らず、これまた彼の、ツマテども、同物と見んとての説なれば、從ひがたし。○我國

者、常世爾、成、牟、これより以下、新代といふまで、五句は、ほぎ詞を以て、泉の、イヅ出
 といはん序としたり。常世は、どこしへにかはることなき世の意なり。○圖、負、留、
 神龜毛、新代登、圖、負、留、神龜とは、支那の禹の時に、龜負圖、出、洛、水、などいふこと
 あるを思へるなるべし。わが國、天智天皇の御代、九年六月にも、神龜の出でしよし、
 「書紀」に載せたり。わが國は、常世と成らん、その瑞祥としてかゝる、あやしき龜も、新
 代とて、出でんとなり。新代は、新京にて、代を治めたまふをいふ。○泉乃河は、山城
 國相樂郡にて、今の木津川なりとぞ。○持越流は、燈に、かの遠國より、巨勢路をもち
 來て、この泉河に浮くるをいふ。越すとしもいふは、その國にて、きり出でけむ山に
 も、また、路のほどにも、河海など、必ありて、そこにかせたりし材なるを、一旦、陸路
 にあけて、さて、又、泉河にかぶる故に、いふなりといへるがごとし。諸註、上の、宇治
 川へ流したる材をとりて、陸路を、泉河まで、持ち越すよしにいへれど、今は、とらず。
 ○真木乃都麻手、上なる、真木佐苦、檜乃婦手、と同じ義なり。たゞし、これも、燈に、前
 のは、田上山の材なりこゝは、かの、不知國よりの、ぼする材なり。ひとつに見まじき
 なり。云々、まへに、檜乃婦手とよみ、また、同じ婦手をば、ふたゝびいはむは、いと、稚く、

古人の詞づくりにあらねば、かへすく、これは前のは、ことなるぞかしといへるによるべし。今いはく、前のは、檜乃婦手乎、云々して、日之御門爾、訴すらんとつゝ、意こゝなるは、云々せる、真木乃都麻手乎、日之御門爾、五十日太爾作、訴すらんとつゝ、意なるをもても、同じものならぬと知られたり。○百不足、五十日太爾作、訴すらんとつゝ、意なるは、五十の枕詞なり。五十日太は、篋なり。これは、かの、不知國よりの材につきていへるなり。訴須、真牟は、上の田上の材と、こゝのどをかねていへるなり。真牟は、作者の想像せる状なり。そは、作者は、大宮づくりの地にありてよめるよしにて、すべて、その訴するわざを見ざることなればなり。○伴蘇波久見者、神隨爾有之、かく、御民どもの精勤するさまをみれば、げにも、わが天皇は、神にておはしますらしと、ちどろけるなり。これは、宮材どもを、宮地に運び來たるを、まのあたり見たるをいへるなり。伊蘇波久は、勤の字をインシとよめり。同言なり。

◎一篇の總意、かしこき天皇命の、こたひ藤原の地にして、天下を治め給はんとて、まづ、大宮を作り給はんと、神隨、ちもほしめすにつれて、天神地祇も、歸依してこまします。即、國々の民どもの、うちつとひて、まづ、近江の田上山より、宮材を、伐り

出で、宇治川に下せば、それをとりて、篋につくりて、泉河に流しやらんとて、さわか民ども、家も身も、うちわすれて、水に浮き居て、また遠き國々より、巨勢道を経て、泉の河に持ち越せるも、篋につくりて、どもに、わがつくる日之御門に訴すらんかく、臣民の勤しみ仕へまつりつゝ、宮材をはこび來るありさまを見れば、たゞことにはあらじ、まことに神々の助け給ふにて、天皇は、神そのまゝにておはしますればなるらしとなり。

從明日香宮、遷居藤原宮、之後、志貴皇子御作歌、○志貴皇子、天智天皇の第七の皇子、光仁天皇の御父にませり。後に、尊みて春日宮御宇天皇ともまた、田原天皇とも申せり。

妹女乃袖吹反、明日香風、京都平遠見、無用爾布久。

この御歌は、持統天皇の、藤原宮にうつりましての後も、なほ、この皇子は、飛鳥の地に残りおはしまして、その故京とされるを歎きて、よませ給へるなるべし。

○妹女、妹は、宇染に倉代、切音、葉女、字とあれば、妹女とはいふべからず、媛の字の誤りなるべし。媛は、宇書に弱好、貌とあれば、手弱女の意に書けりといふ。この説、然

るべきにや。但、小山田與清の説に、採女の字、大智度論に見え、その外、佛書に所見あり、タフヤメと訓むべしといへり。これによれば、もとのまゝにてあるべきなり。さて、これは、宮女をひろくさしての給へるなり。○袖吹反、明日香風、袖吹反は、むかしならば、袖ふきかへすべきの意なるを、かくいへるなり。明日香風は、明日香にて、吹く風をいふ。なほ、佐保風、伊可保風、泊瀬風などいふ類なり。

◎大意 今も、むかしの空ならば、むかしのまゝに、宮女どもの袖ふきかへすべき明日香風の都が遠さに、いたづらにのみ吹くことかな。あはれさびしきことよとなり

藤原宮御井歌

○歌に、藤井我原爾とよめれば、古來、こゝに、名高き清水のありて、つひに、處の名ともなれるにやといへり。さて、これも、檜抓には、人麻呂の歌とせり。八偶知之、和期、大王、高照、日之皇子、龜妙乃、藤井我原爾、大御門、始賜而、埴安乃、埴上爾、在立之、見之、賜者、日本乃、青香具山者、日經乃、大御門、爾、春山跡、之美、佐備立有、畝火乃、此美、豆山者、日韓能、大御門、爾、彌豆山跡、山、佐備伊座、耳高之、青宮山者、背友乃、大御門、爾、宜名、倍、神、佐備立有、名、細、吉野乃、山者、影友乃、大御門、從、雲居、爾、曾、遠久有、家、留、高知也、天之御

陰天知也、日御影乃、水許曾波常爾有米御井之清水

この歌、專、御井をほめてよめるなれど、あつから御代の行くすゑも、いかに榮えさせ給はんと祝ぎまつれるなり

○和期は、我にて、大につく當時の音便なり。○藤井我原、即ち、藤原の地なり。御井あるによりて、負へる名なるべし。○大御門、始賜而、宮殿をつくらせたまひてといふにて、即ち、遷都したまへるなり。○埴安乃、埴上爾、在立之、埴安乃、埴は、二の巻にも、埴安乃、池之、埴之、隱沼之、云々など見えて、いにしへ、香具山の麓についで、高き處なりしなるべし。在立之は、在りて立ち給ふなり。をりて、ごどに、絶えず立ち出で、望み給ふをいふ。○見之、賜者は、見させ給へばなり。○日本乃は、大和之なり。大和のうちにて、かくいへるは、いにしへ、都をさして、專、いへればなり。この下に、幸吉野宮時に、倭爾者、鳴而、畝來、其武、呼兒鳥、云々とよめるも、京、藤原京をさして、倭といへるにて、今とあなじ。○青香具山は、樹木の青々と繁れる香具山といふ意なり。○日經乃、成務天皇の紀に、隨、阡陌、以、定、邑、里、因、以、東、西、爲、日、縱、南、北、爲、日、横とありて、こゝは、香具山は、東の御門に向へるをいへるなり。○春山跡、之美、佐備

立有、まことに青山といひつべく、青々として繁茂して立てりとなり。佐備は
 いつも進む意ながら、こゝは樹木のいたく繁れるをいへるなり。春山、玉の小琴
 に、青山の誤りなるべし。この歌すべての詞どもをふに、分けて春といはんこ
 とのいか。そのうへ、畝火乃、此美豆山者、彌豆山跡といへるに對へても、青香具山者、
 青山跡とあるべきものなりとあるによりつ。○此美豆山、美豆は、瑞穂、瑞垣な
 どの美豆に同じく、もの、雅々しく、うるはしきをいふ詞なり。こゝは樹木のうる
 はしく繁れるをいへり。○日緯能、南北にて、畝火山の南の御門に向へるよしに
 いへるなり。古義に、そも、香山は東、御門に向ひ、畝火山は西、御門に向ひ、吉野山
 は南、御門に向ひ、耳梨山は北、御門に向ひ、立ちたれば、香山を、日經と云、吉野山を、影
 面と云、耳梨山を、背面と云るは、いづれも、正しくあたれることなるを、畝火山も、西、
 御門に向ひたれば、實はこれも、日經と云はむぞ、正しくあたれる事なる。然れども
 此歌、日經、日緯、山陽、山陰の四をいひて、またたたるにひとり、日緯をいひもらすべ
 きにあらざれば、日緯の言を、西、御門にやとひたるものなりといへり。この説然る
 べし。玉の小琴にも、畝火山は、正しくは、西の御門に當るべけれど、日經は、既にいへ

れば、こゝは、必、日緯といはでは、よろしからぬ處なる故に、少しまひて、かくいへる
 なりといへり。○彌豆山跡、山佐備伊座、まことに彌豆山といひつべく、雅々とし
 て、山進ひおはしますとなり。佐備は、上にいへるにあなじ、伊座は、敬語にて、山を神
 として、いへるなり。三の卷にも、富士の山を、日本之山跡、國乃、鎮、十方座、神可聞とも
 よめり。されば、こゝの之、美佐備も、山佐備も、下の神、佐備も、あなじ、山神の御心の進
 みて、樹木の繁茂せるよしにいへるなり。○耳高之、高は、爲の誤りなりといへり。
 大宮地のさまを、おもふに、疑ひなし。されど、なほ、無耳とも書けば、高は無の誤りな
 らんも知るべからねば、今は、文字は、もとのまゝにあきつ。○青苔山、苔は、清々し
 き意にて、青苔山なるべしといへり。耳無山を、ほめたるなり。○背反は、背つ面にて、
 北なり、上に、引ける、成務太皇の紀のついきに、山陽曰、影面、山陰曰、背面とあり。耳無
 山は北の御門に當ればなり。○宜名倍、神佐備立有、宜名倍は、満足の義なりとい
 へり。また、檜杵には、依り、並ぶ意といひ、燈には、里言に、チヤウドヨイといふ程の意
 といへり。このうち、燈の方、稍、近きに似たれど、尙あかぬ心地す。さるは、この外、鳴く
 なべに、聞きつるなべに、なといへるは、皆に、つれて、と譯して、よくきこゆるをこれ

のみ違へて、釋かん事の、心ゆかねばなり。よりて、思ふにこれも、尙宜しきにつれての意にて、耳無の青清山は、背面の御門に、その御門を守衛るに、ふさはしく宜しきにつれて、ますく、神々ど、繁茂して立てりといふ意なるべし。○名細は、名の細しく、世にきこえたる意にて、いはゆる、名高きよしなり。○影友は、影つ而にて、南なり。○大御門從雲居爾曾、遠久有家留、南の御門よりは、むねと、吉野山の見えたれば、かくいへるなるべし。さて、以上は山々の、大御門を持ちわけて、まもり仕へまつれるさまには、いひなしたれど、實は、御井の、どこしへならんことを、おもはせたるなり。さればこそ、山ごとくに、殊に、繁茂せるよしには、いへるなれ。そは、水は、樹木の繁れる地より、湧きいづるものなればなるべし。○高知也、天之御蔭、天知也、日御影乃、水許曾波、高知也、云々の四句は、實は、たゞ、高天を知領る日といふことを、三つにわけていへるのみなり。されば、高知也は、天は、高きを知る意にて、天についけ、天知也は、日は、天を知る意にて、日についけたるまでの、あやなりと知るべし。天之御蔭も、日之御蔭といはん、異なることなし。さて、日御影之、水とは、天津日の御蔭のうつろふ清水のよしにて、御影といふに、やがてうつろふ意は、こもれりといへり。さ

れど、檜栂に、この四句(高知也云々の四句)二聯の、愛對、古今、援群の、語と、賞すべし。祝詞に、天、御蔭、日、御蔭、登、穩、坐、座を、とあれど、いたく、立ちまさりたり。この妙句にて、水も、彌さむく、常じくにかはるべからず、見えたり。然るに、世に、日の、光明の、照らし、宿る水と心得たるは、あたら妙句を、まゝ知らぬのみならず、さては、ぬるくなりて、愛づるに、足らざるをや。大和名勝志に、多武峯、南記を、引きて、云へる、趣むき、往古、藤井と云ふ名水あり、清水の上に、松栢おほひたるに、大なる、藤は、ひかゝりて、日の影を、さしえければ、水無月の望にも、齒にしむばかりなりき。その藤の、古株、驚栖、杜の傍に、近來までも、遺れりと云々といへり。とあり。これによれば、前の説は、とり用ひがたし。どにも、かくにも、水は、冷やかなるを、賞するものなれば、天日の、うつろふといふは、心ゆかねとなり。檜栂の説用ふべし。○常爾有米、とは、水を、どこしへにあらんといふにて、やがて、大宮の、どこしへならんことを、祝ぎまつれるなり。○御井之、清水、マシミゾといへるは、例のはめたるなり。上に、水許曾波といひて、ふたしび、かく

○一篇の總意

かしこき、わが天皇の、あるが中にも、藤原の美地を、撰ませ給ひ、都

をうつさせ給ひて、つねに、埴安の堤の上に、出でたしして、四方を見はるかし給へば、近く遠く、めでたき山々の繁り榮えて、御門ごとくに、まもり仕へまつれば、大宮どころの動きなきは、いふも更にて、其の景色さへすぐれたる、言葉も及びがたし。さてかく、山々の繁りさかえたるが中に湧き出で、天の御蔭、日の御蔭と隠るへるこの御井の水こそは、御代ともにも、どこしへにさかえ行くらめ、めでたしどもめでたき、この御井の眞清水はとなり

短歌

藤原之、大宮都加倍、安禮衛哉、處女之友者、之吉召賀聞。

めでたき藤原の大宮づかへする、官女のともがらをうらやめるなり

○安禮衛哉、安禮は齋内親王を阿禮乎度女と申せる阿禮と同じく、奉仕する意

衝は伊都伎(齋)の伊のはぶかれるにて安禮衛哉は即ち仕へまつり、齋きまつる

意なり。六の卷の讀久通、新京長歌に、八千年爾安禮衛之乍、天下所知食跡、云々、とあるも、百官に仕へまつり、齋きまつらしめつゝの意なりといへり。たゞし、檜杵には、

在衝の意にて、衝は、就ておなじ云々、さるからに、六の卷なるも、久通、新京につきて

よみ、今も藤原、新京なるにつきて云へる、皆その宮に親み附くよしなりといへり。げにも、新京にのみつきていへるを思へば、なほ考ふべきなり。生繼の意とせるは、ことによつられず。そは繼の意に衝を書かん、甚おぼつかなければなり。哉の字、武に改めたるも、おほけれど、集中に例もあれば、この事、上にも既にいへり。もとのまゝにてあるべし。さて、安禮衛哉といへば、今より、未來をかけていへるは、もとよりなるを、類聚抄には、哉の字、也に作れりといへり。それによる時は、アレックヤと訓みて、やは歎辭なり。○處女之友は、官女をいへるなり。○之吉召賀聞、乏は、うちやましき意なり。呂は助辭、持統天皇は、女帝におはしまし、かば、ことに、官女の親しく仕へまつれりしを、われも、女の身ならまし、かば、かゝるめでたき大宮のうちにて、つねに、仕へまつらましを、うらやめるなり。さて、この句を、かく釋くことは、之は、乏、召は、呂の誤なりといふ、本居翁の説によること、畧解にも擧げたるがごとし

右歌、作者未詳

大寶元年丑秋九月、太上天皇、幸紀伊國時歎 ○持統天皇にませり

巨勢山乃、列列椿都、其都其爾見、乍思奈、許濤乃、春野乎

一五二

秋ながら巨勢の野の椿の多かるを見て、花さく春の景色をちもひやりたるなり
○巨勢山は高市郡古瀬村にありとぞ、檜杣に巨勢は藤原宮より正西にありて、
葛上郡より河内の草香に出づる道なり、かれ待乳山の順路なれば、紀伊國の幸に
は巨勢にかゝらせ給ふなりといへり○列列椿、これも檜杣に古は實を取る(實
は油を取る)料のみにあらず、染物の灰にも多く用ひて海石榴市といふが立ちけ
るほどなりければ、列ねてうゑしなるべしといへり、さてこれは今目の前なるも
のをとり出で、即ち次の都其都其の詞をいひよこさん料としたるなり、都其都
其は熟なり○見乍思奈、奈は歎辭○巨濤乃春野乎、この句より、四の句の思奈
につゞく意、この巨勢山に處狭きまでつらね植えられたる椿を見つゝ、その花さ
かん春の景色のいかばかりちもしろからんと、ちもひやらるゝかなとなり
さて、古義にこの歌の端詞、大寶元年云々とあるは、甚く錯亂たるものなり、大寶元
年、辛丑の六字は、太上天皇幸吉野宮時、歌とある上にありしが、混て此處に入しな
べしとて、そこにうつし、また秋九月とあれば、この歌、春の景氣をよめれば、この

三字は續紀の文などによりて後に補入せるなりとて削り、太上天皇幸吉野、紀伊國
歌の十一字は次の朝毛吉云々の歌の題詞なるが亂れたるなるべしとて、下にう
つしさてこの巨勢山云々の歌を下の幸吉野宮時歌(倭爾者鳴而歎來其武云々)
の末に載せ、有の吉野宮に幸せるは續紀によりて、二月とする時は、その同じ度に、
幸の道すがら、巨勢の春山の風景を見て、從駕の人のよめるなりとせり、されば、見
乍思奈をミツ、シヌ、バナと訓みて、さて歌の意は、さしぬだにゐるを、まかして、椿
の花さへ吹きにはひたる、巨勢の野の春のけしきのあかすちもしろく思はるれ
ば、つら／＼に見つゝ、一向に賞愛をちむとなりといへり、この説あまりに、端詞を
取捨し、歌の序を改めたるものなれば、快しどもち譯えねと、下に或本の歌(河上
乃列列椿云々)とてあげたるも、季節もよくあへば、今は参考にまでとて、こゝには
ぬき出でつるなり、たゞしこの歌は巨勢の野を賞し、奈のは、眞土山を賞したる、そ
の道のついで、この道のついでなどによりて、なかく亂れて、こゝには入れり
ともいふべけれど、などをちもふに、全く引きはなちて、別時とせんは、あだやかな
らぬにやらん、尙よく考ふべし

右一首坂門人足 ○傳しられぬ人なり
朝毛吉木人乏母亦打山行來跡見其武樹人友師母

亦打山の景色のちもしろきを見て紀伊の國人をうらやめるなり

○朝毛吉は枕詞なり朝毛は麻裳吉は助辭にて上の玉手次云々の長歌に青丹吉
とある吉にあなじ麻裳を著とついでたりといへるなどやあだやかなるべき○
木人乏母は紀伊の人がうらやましきよとなり○亦打山は實は眞土山にて大和
國宇智郡なり大和に近き紀伊の山なりといへるはあやまりなりまた待乳山と
も書けり今は例の借字なり(タウ)の約チなればなり○行來跡見其武は行くどて
は來どては見るらんとなり○樹人友師母この句は上の二の句をふたひびうち
返せるなり當時景色のすぐれたりけんちもふべし四の卷にも眞土山越其武公
者黃葉乃散飛見乍親吾者不念草枕客平便宜常思乍公將有跡なども見えたり
○大意一あはれ紀人のうらやましきことかなかゝる風景のすぐれたる眞土山
を行き來につけて見んどもちもはでも見るらんあはれ紀人のうらやましきこ
とかな今もつねの旅ならば心あくまで愛でもあらんをさながら見すて行

きすぐるが惜しきことよとなり

右一首調首淡海 ○續紀によるにこの人は正五位上にいたり後に連の姓を賜

はりし人なりこゝに首とあるはこの姓を賜はらぬ前なればなるべし

或本歌

河上乃列列椿都良都良爾雖見安可受巨勢能春野者

この歌諸註にもいへることく春の歌にてこの度の歌とはきこえず燈にこの幸
は九月なりされは思ふにこの歌は古歌にてこの時春日藏首從親して處にかな
へる歌なれば誦せられたりしをみづからよまれたるやうに聞きつたへられけ
るなるべし古歌の時にあひたるを誦したるはあらたにのみたるよりもあはれ
なるものなればこの集中にも古歌を誦したるが多し袋草紙によど河の舟中に
てよどのわたりのまだ夜ふかきにといふ古歌を誦したりしをいたくめでたり
し事ありこれ上古の風の残りたるなるべしといへりもし古義のやうに端詞を
轉置し歌のついでを改めなどすればこどもなけれどこの處上の巨勢山云々の
歌よりこの歌まで一ついきものとして釋かんには考へたる説といふべし今本

はこれによりてあるふに、これはまことに古歌にして、上の「巨勢山云々の歌も、この古歌をば、時に似つかはしく、いさゝか吟じかへたるものにはあらざるか、いかにして、この二首は、全く、別物とは見え、さればこそ、古義の既もあるなれ、されど、古義は、或本歌とあるを主として、これに合はせんとし、或本歌といふより、舊本すべて錯亂て云々、今は道晃親王御本類聚抄拾遺本等によりて、こゝに收つて、この歌を「巨勢山云々の次に小字もつらねたり、今は、或本歌の三字は、あやまりにて、この歌も、なほ本文なりといふなり、但しかゝることは、あながちに推し究めていはんも、かひなかるべきにや、たゞ、見ん人の心々なるべし

○河上乃列列椿、河上は、三の巻に、小浜磯、巨勢道有能登瀛河とある河上なるべしといへり、この河の上の岡道は、紀伊へのかよひ路にして、椿を多く植ゑたりきとぞ、さて、この二句また、上の「巨勢山乃列列椿」とあると同じく下の都、其都、其の序なり、椿の花の多く咲きにほひたる、巨勢の春野は、つら／＼に見れども、あかすおもしろきとよとなり、上の「巨勢山」の歌の大意、この「巨勢山」に云々と、序の詞より引きつらけてとけるは、まぎらはしかりき、この「巨勢」の野の椿の多かるを、つら／＼

に見、つゝ、その花さかん云々といふべきにこそ

右一首、春日藏首老、○續紀、大寶元年、三月壬辰、令僧辨紀還俗、代度一人賜姓春日、倉首名老授追大壹と見えたり、後に從五位下常陸介にまでなりし人なり

二年壬寅、冬十月、太上天皇幸于參河國時歌、○續紀、大寶二年、冬十月の條に、この行幸のこと見えたり、されば、冬十月の三字、例によりて補ひたるに從ひつ、○太上天皇は、持統天皇にませり

引馬野、爾仁保布、榛原入亂、衣爾保、波勢多鼻能、知師爾

これは、從駕の人の、同列の人などにおほせたるなるべし

○引馬野は、遠江國敷智郡、十六夜日記に、こよひはひくまの志ゆくといふところにいまる、この所のおほかたの名をば、濱松とぞいひしとあり、檜杵に行囊抄にも、濱松の城の邊の景色よき小松原を、引馬野といふと見ゆといへり、また、三方之原ともいふとぞ、行幸のついでに、この國へもまはらせ給ひしか、または、官人ばかり行きしかなどなるべし、○榛は、萩なるよし、既にいへり、この時、十月なれば、季節のあはぬやうなれど、新考にもいへるがごとく、十三の巻に、九月之、四具禮之、秋者

大殿之砌志美彌爾露負而靡芽子乎云々なども見えたれば、おくれてさく年もあ
るなるべし。○衣爾保波勢は、衣飽はせよと、人におほせたる詞ながら、みづからも、
その中にこもれるもどよりなり。この引馬野に、咲きにはふ萩が花をわけて、衣を
飽はせよ、京にかへりても、旅のしるしの見ゆばかりにとなり。

右一首、長思寸與麻呂 ○知られぬ人なり。集中、また、意寸麻呂、意吉麻呂なども書
けり。

何所爾可船泊爲良武安禮乃崎榜多味行之、柵無小舟

これは、安禮の崎の海上の景色をよめるにて、小舟の島がくれ行きつるを惜める
なり。

○安禮乃崎は、諸註にこの度の幸に、美濃を経たまへる由、續紀に見えられたれば、同國
不破郡の荒崎にやといへど、なほ、檜杵に前の歌の並びなれば、これも、遠江なるべ
し。同じ、數智郡の今の荒井は、もと、荒江なりといへば、古くは、荒の崎ともいひし
なるべしといへるや、近からん。○榜多味行之、多味は、横に、折れ曲るをいふ詞な
り。漢字に、回轉運など、さまざまに書けり。また、舌たむなどいふたむも、これなり。こ

いは、小舟の榜ぎめぐり行きて、見えずなりしをいへるなり。○柵無小舟は、柵(船柵)
の無き小舟なり。柵とは、舟子らのありきする傍の板にて、小舟には、それなけれ
ばいふなり。歌の意きこえたり。

右一首、高市連黒人 ○既に出でたり

譽謝女王作歌 續紀慶雲三年六月丙申、與謝女王卒とみえたり。さて右の例によ
れば、これより以下三首とも、端詞は、歌の左にありて、右一首云々であるべきなり。
古義には、既に、しか改めたり。されど、檜杵には、この三首は、右と別時の歌なりとい
へり。もしさらば、もとのまゝにてあるべし。

流經妻吹風之寒夜爾吾勢能君者、獨香宿良武

これは、女王の京におはして、夫君の旅のやどりをおぼしやり給へるなり。

○流經妻とは、寝衣の裾の長くはへたるをいふにて、寝たるさまなりといへり。妻
は、端にて、何にてもハシをいふ名なり。こゝは、即ち裾をいへり。燈に、衾は、裾の方の
ひまありとはなけれど、風の吹き入りて、寒きものなれば、かくいふなるべしとい
へり。略解に、衣といはずして、たぐちにつまどつゝくべきにあらず。誤字あるべし。

といひ久老は妻は雪の誤ならんといへるによりて、これに従へるもあれど、今はしばらく本文のごとし。そは妻を雪に改めても、なほ心ゆかぬこゝちのすればなり

長皇子御作歌 ○皇子は、天武天皇の第四の皇子なり。○御作歌 作の字例によりて補へるに従ひつ

暮相而朝面無美、隱爾加氣長妹之、廣利爲里計武

これも京におはしまして、おもひやりて、よみ給へるなり

○暮相而朝面無美、この二句は、隱の序とせるなり、そは夜逢ひて、翌朝はづかしさに面がくしする意をもてつゝけたるなり。ナバリは、隱るの古言なるよし、既にもいへり。○隱は、上に、隱乃山と見えたるも、同處勝景の地にや。○氣長妹之、廣利爲里計武、氣長は、來經長きにて、月日のたつを來經といひ、さて、きへのあつから約まりて、氣とはなれるなり、されば、氣長妹は、旅に、久しくとゞまれる妹といはんがごとし。さて、この妹は、皇子のまことの御妃か、また、從駕の女房の中にさし給へる人のありてか、それは知られず。○廣は、たゞちに、行宮をさせりともいへど、なほ、

別に、從駕の人々のやどれる處といはんかた、あだやかなるべし。

○大意 さても別かれて久しき妹の歸りのおそきとか、かく遅きをおもへば、もしはその妹が、このころは、かの景色のすぐれたる隱の地などに、いはりして、とどまれるにやとなり。第四の句、ケナガシ、妹が云々ともめるもあり。その時は、意いさゝか異なり。

舍人娘(子)從駕作歌 ○傳しられず。二の卷に、舍子、皇子とよみかはしたる歌あり。

舍人は、氏にや。○娘子、子の字補へるによりつ

丈夫之得物矢手挿、立向射流圓方波、見爾清潔之

これは、圓方の浦の他に、すぐれて、眺望のよろしきをめでたるなり

○得物矢、サツは、得物の字をよめる意にて、幸なり。集中、佐都由美、佐都雄などおほし、幸は神代紀に、海幸、海にて、諸魚を得るをいふ。山幸、山にて、諸獸を得るをいふ。など見えたり。さてこの歌、射流といふまで二句半は、圓(的)の序なり。丈夫が云々射るの的とつゝけたり。○圓方は、仙覺抄に、伊勢風土記曰、的形、浦者、此浦地形、似的故、以爲名、今已跡、結成江湖也とあり

三野連入唐時、春日藏首老作歌。○三野連は岡麻呂なり、古義に官本、中御門本、阿野本等の勘物に、國史いづれをさせるにか。知られず、類聚國史には、この事見えず。日、大寶元年正月、遣唐使民部卿粟田真人、朝臣以下百六十人、乘船五艘、小商監從七位下中宮少進美奴連岡麻呂云々とありといへり。續紀にこの時、この人の見えぬは、もらせるなるべし。舊本連の下名、闕の二字あるは、後人の書き加へたるなるべしといへれば、今は、けづれるによりつ

在根良對馬乃渡渡中爾幣取向而早還許年

いはゆる、わかれを借しめる歌なり

○在根良、檜爪に、これは誤字にはあらず、アリネヨシとよみて、對馬國の在明山をさせるなり、其は、實に、高山なりければ、異國船の御國に入るも、この山を目當とし、御國より、異國へ渡るにも、まづ、この山を目當として出づる故に、在嶺、嶺よ津島と呼び出だせるなり、さて、この山、さるよしありて、古くは、在嶺といひけんを、後に、在明山と訛れるか、本より、在明山なるを、省きて、在嶺とよみたるか、定めがたしといへり、今は、しばらく、この説によりつ、玉の小琴に、この三字を布根良(泊)の誤りと

いひ、古義には、大夫根之とありしを、大夫の二字を、在に誤り、之の字の草書を良に誤れるなるべし、大船之なりといひて、ともに、枕詞とせり、されど、いづれも、文字をうごかしての説なれば、こゝろよからず、○對馬乃渡、渡は、つねに、江河などにいへど、古くは、海にもいへるなり、○海中爾云々、陸路のみならず、海中にても、必幣奉る處あれば、かくよめるなり、海上の事なからんを、いのるためなり

○大意、海上はるけき境に遣はさるゝ君なれば、よろづ、心して行け、かの、船人の往くも、來るも、在嶺よとて、目當にして渡る、對馬の渡りの海中は、ことに、大事の處なれば、神に、手向よくして、恙なくて、一日も早く、歸朝せよかしとなり

山上、巨億良、在大唐時憶本鄉(作歌) ○これも、右と同じ度のことにて、この時、億良、无位少録たりき、後に、從五位下に、叙せられ、伯耆守などになれり、○作の字、目錄、古寫本等によりて、補へるをよしとす

去來子等、早日本邊、大伴乃御津、乃瀬松、待戀奴、良武

これは、端詞のごとく、唐土に在りて、本國の戀し、堪へがたきことゝるなり
○去來子等、去來は、人を誘ふ詞、子等は、漢語に、小子といはんがごとし、われに從

へる者をさせるなり○早日本邊は早くも船出して大和國即ち京へ歸らばやど
 なり○大伴乃は御津の枕詞大伴氏の稜威とかけたるなりといへりそは、大伴氏
 は世々武勇をもて朝廷に仕へまつり來しが故なり○御津乃濱松、御津は難波
 の御津なり、天皇の御船津なる故に、あがめていへるなりさて、この句は待といは
 んためなりといへり○待戀奴其武は、家人がなり、燈に、この濱松が、おれらの歸る
 を待ちこひぬらんとよまれたるなり云々、松が、まぢこひぬらんとよめるは表な
 り、家人の事は情なりといへり、櫻をとき放ちて、かくるしまでかへり見しつゝ、別
 かれ來しその松どもの持ち戀ひつゝあらんといふなるべし、この方あわれも深
 くまされるやうなれど、今は本文のごとし

慶雲三年丙午秋九月、幸于難波宮時歌○難波宮は、孝德天皇大宮なりき、この大
 宮、當時甚盛なりしかば、後々までも修理を加へて保存し給ひしなり、ゆゑに今も
 幸し給へるなり○秋九月の三字、歌の字補へるによりつゝ

志貴皇子御作歌

兼邊行鴨之羽我比爾霜雪而寒暮夕和之所念

旅宿のたへがたきによりて、京を戀しくおぼしめしたるなり

○羽我比は、たいはねなり、鴨の羽にさへ霜のふりてこの給へるにて、その夜の
 ほかたの寒さ、おもひ知られたり、たいは、實はまのあたり、霜のふれるを見給ひて
 には、あらし、羽音のいたく、身にしみて寒ければ、かくは、いひなし給へるなるべし、
 ○夕は、者の誤り、和は、もど、倭どありしが、後に書きあやまれるなるべしと、略解に
 いへり、大和また、和の一字をもて、ヤマトとよめること、集中に見えねばなり

長皇子御作歌

安良禮松原住吉之弟日娘與見禮常不飽香聞

安良禮松原の景色のすぐれたるを、賞し給へるなり

○安打は、燈に、あられ松原とかさね給はん爲ながら、この時、九十月の比なれば、御
 まのあたり、露の降りければにもあるべしといへり○安良禮松原、安良禮は地
 名にて、その松原なるべしといへり、安良禮は、疎々にて、稠密からぬ松原ともい
 へれど、この攝津國なるは、ふるくより、地名ともなれりしよしなり○住吉、これ
 を後にスミヨシといふは、文字につきて、唱へあやまれるなり、ふるくばスミノエ

どのみいへり○弟日娘與云々、弟日娘は兄弟のこゝを、後世あといひといふと
 同じことにて、姉妹をこめていへりといへれど、なほ弟日は娘の名とせん方、あた
 やかなるべし、繪柄に、これは、國司より、繼承のために出だせる、いはゆる、遊行の女
 婦などにてあるべしといへり、與はと、あな、じく、の意なり、心は、水と清しなど、つ
 ねにもいふめり、この與を、と、も、に、の意として、娘子と共に、松原を見給ふよしに
 説き、また、松原と娘子と並べて見れども、あかぬよしに説けるも、あれどいかと、こ
 の時、娘子をもめしつれ給へるなるべし、さて、この娘子、かゝる尊き御前にめさる
 ことなれば、多かる中にも、ことに撰まれたるにて、よそひさへ、たいならざりけ
 れば、皇子も、いたく、めでさせ給ひなるべし、歌の意、このあられ松原のけしきの
 すぐれたる、たゞ、この娘子のうるはしきと、あな、じく、見れども見れども、あかぬこ
 とかなとなり

太上天皇幸于難波宮時歌、持統天皇にませり、これ、太上天皇の尊號のはじまり
 なり、さて、この幸は、續紀に、文武天皇三年正月癸未、幸難波宮、二月丁未、車駕至自難
 波宮と見えたる度のことにて、やこの時、太上天皇も、同じく、御幸ありしにや、また、續

紀には、太上天皇の四字脱したりとすれば、このことと、太上天皇のみの御幸な
 るべし、さては、上の慶雲三年より、八年以前のことなり、ついでのみだれたるなる
 べし、もしは、この端詞と、上のと、あき違へたるには、あらざるか、とにもかくにも、
 この太上天皇は、大寶二年(慶雲二年)より、五年前(十二月崩じ給へれば、こゝにある
 べきにあらざ

大伴乃、高師能濱乃、松之根乎、枕宿村家之所、偲由

旅のわびしさに堪へかねて家をおもへるなり

○大伴乃、こゝは、猛き意もてつとけたり、○高師能濱は、河内國大鳥郡なりとい
 へり、この時、隣國へも、幸ありしにや、また、從駕の人のみ行きしにもあるべし、○枕
 宿村、村の字、本居翁の夜のあやまりとせられたるに從ふべし、枕をマキテとあ
 るは、枕といふも、纏くよしの稱なれば、はたらかしたるなり、○所偲由は、したはし
 くおもはるとなり、濱とあるにて、あづから浪の音もひきき、松が根とあるにて、
 嵐もきこえたり、歌の意、明らかなり

右一首、置始、東人、○休しられず

旅爾之而物戀之伎乃鳴事毛不所聞有世者孤悲而死萬思

○この歌、説々あれども、新考の京より旅へよみて贈れる歌ありて、それに鳴の言ありしに、報へておくれるなるべしといへるや、意を得たりといふべからん
○旅爾之而は、旅に在りてなり○物戀之伎は物戀ひしきなり、物とは何物につけてもの意にてこゝは戀ひしさの繁きを一つにしていへるなり、物うし、物がなしなど、なほ多し、コホシキは、集中に古保志、積ども書き、齊明紀に姑衰之、積ども見えたり、音のうつれるなり、さて、物戀之伎の之、伎に、鳴をよせたり○鳴事毛云々、旅の空のしのばれて、おれも、やど近く、鳴く、鳴の、鳴きあかすなどいひおこせたるによりて、かくいへるにや

○大意 われも、かく、旅にありては、何事につけても京のみ戀ひしくて、え堪へぬを、このたび、そなたよりも、おなじさまに、いひおこせ給へれば、たゞ、それを命にて、世にもこそあれ、もし、その事だに、きこえざりせば、戀ひくへて、つひに、死なましと、なるべし

右一首高安大島 ○これも、知られぬ人なり、目錄には、作主未詳歌とありて、下に

高安大島とあり、されば、この人は、この歌のよみぬしども、さだめがたし

大伴乃美津能濱爾有忘具家爾有妹乎忘而念哉

○これは、旅にありて、久しく音づれもせざりけるころ、京より、家をおすれたるに、かなど、恨みおこせたるに答へたるにやといへり

○大伴乃美津能濱爾有忘具、難波の御津の濱に在る忘具にて、これは、下の忘而といはんとして、まづ、眼ぢかきものをとり出で、序としたるなり、さて、忘具は、古義に土佐の海濱にありて、今も、忘具といへり、蛤に似て小なり、何方の海にもあるべしといへり、こゝなるも、まこと、これにや知らず、○忘而念哉は、たゞ、忘れんやの意なり、念は、軽く添へたる詞なること、上に既にいへり、おもへや、おもはめやの約まれるなり、歌の意、片時の間も、家なる妹をおすれんやは、たゞ、今はわたくしの旅ならねば、音づれも、心にえまかせぬにこそ、其のくるしさのほど、推しはかりて、おれか、しと、なり

右一首身入部主 ○この王は、また、六人部王とも書けり、即、續紀、天平元年正月の條に、正四位下、六人部王卒とみえたり

草枕客去君跡、知麻世婆岸之、埴布爾仁寶播散麻思乎

○これは娘子の皇子にわかれ奉らんことを惜しめるなり
○客去君は長皇子を申せるなり。そは皇子のしはしにても娘子のもとに住みわたり給へるに、今還御にしたがひて京へ歸り給ふとなれば、しはいづるなり。○知麻世婆はしらしせばにて知るべくありしならばといはんがごとし、皇子のかねてさる御けしきの聊もあはしまさしりしによりて、かくいづるなるべし。燈にかねて御わかれの期をしらざるにもあらざるべけれど、いつまでもこの皇子にめされて仕へまつるべきやうに、のどかに思ひしに、今わかれに臨みて、わかれ奉るべきこと、ちもせずいとわびしく悲しき心を告げ奉れるなりといへり。○岸之埴布爾云々、岸は住の江の岸なるべし。埴布は埴生にて、埴は赤黄青など、色のうるはしき粘土をいふ。これは岸の絶壁などより出づるものなれば、岸之埴生といへるなり。生は芝生、蓬生などもいひて、實はそのもの生ずる處をいふ。名なれども、こゝに於ては、たゞ埴土の意に用ひたるなり。○仁寶播散麻思乎、染はすべかりしものその意なり。にははすとは衣に、その色を摺りのくるをいふ。古事記

仁徳天皇の條に丹摺之袖なども見えたり。これも赤土も摺れるなり。色のうるはしき土草木の花などにても、衣を摺ること古のつねなり。今も伊豆の八丈島の絹は多く土も染むるなりとぞ。
○大意 皇子のいま京へ歸り給はんといふ事をかねて御けしきにて、うかひ奉りたまししかば、せめてその御餞に御衣をだに、どのへましものを、それだに、せせりしが、いと口惜しとなり。
右一首清江娘子進長皇子 ○これ即前の皇子の御歌に、弟日娘との給へるそれなるべし。たゞしこの御幸を大寶二年とする時は、上にもいへるごとく、慶雲三年まで、八年の間あれば、同じ娘子なりと、きはめてはいひがたし。
太上天皇幸于吉野宮時、高市連黒人作歌 ○この幸は續紀に大寶元年二月癸亥行幸吉野離宮、庚午車駕至自吉野宮とある度に、やさでこれも上の慶雲三年の歌の上にあるべきが錯亂せるなり。
倭爾者鳴而歎、來良武呼兒鳥、象乃中山、呼曾越奈留
○呼兒鳥の聲をきんで、京をもへるなり。

○倭爾者云々、吉野も同じく倭なるにかくいへるは京をさせるなり。燈にわざと他の國よりいふやうにいへるは、古人の手段なり。かくいふにて、故郷をいふはるかたよもふ心は見ゆるぞかし云々、また爾者の爾は倭をさし、者は他方にわかてるなりといへり。來、夏武はこゝにては、まづ行くらん、意ともいふべし。されど實は燈にもりへるがごとく、ゆくは、こなたに心をききていふ詞來るは、おなたに心をききていふ詞なれば、今もわが戀しくもふ京の方を、こなたとしていへるなり。○呼見鳥は、新考に、鳴くを、物を呼ぶに似て、カカウ、カカウとよきこゆる故に、容鳥ともいへり。今の世、田舎人はカツボウ鳥とも、或はカニ、ニ鳥ともいふ。鳩に似たりといへり。○象乃中山は、離宮に近き處なるべし。○呼曾越奈留は、京の方へなり。奈留は、詠歌の辭、ア、と譯せり。この辭にて、京のなづかしき情いよ、あらはれたり。

○大意、京なる家のあたりには、今來鳴くらんか。呼見鳥の象の中山を呼びつゝ、ア、越ゆることよ。羨まじきことかまどなり。○文武天皇を申しまつれるなり。さて、大行とは、すべ太行天皇、幸于難波宮時、○文武天皇を申しまつれるなり。さて、大行とは、すべ

て天皇の崩御まじ、いまだ御謚奉らぬほどに申す稱なれば、漢書音義に、大行、不在之稱天子崩、未有謚號、故稱大行と云々の端、詞理なきことなれど、これは、文武天皇崩御の後、御謚奉らぬほどに、前にありし幸の時、の歌をき、傳つて、人の記しあけるを、そのまゝに載せたるなるべしといへり。次のもちなじ

倭懸寐之、不所宿爾、情無此、法崎爾、多津鳴倍思哉

○さらぬだにあるを、鶴の鳴く音にいよ、御思の堪へがたき意を述べたり

○此渚崎爾、此とは、旅宿せる處、即、難波宮わたりの洲崎をさせるなり。この句、また、コ、ノ、ス、ザ、キと訓めるもよろし

○多津鳴倍思哉は、鶴鳴くべしやは、鳴くべきにあらぬをとなり、歌の意、かく、旅の空にありては、ひたすら、京の戀しく、たゞ、たゞでも、寐入ること、の能はぬに、處もこそあれ、こゝろもなく、この近き渚の時に、鶴の鳴くべきことかはとなり

右一首、忍坂部乙麻呂、○傳じられず、玉藻劫與、敵波不榜、敷妙之枕之、邊忘可彌津藻

○これは、人の渙の方に、船あそびせんなど、誘へるに答へたるなるべしといへり

○玉藻苜云々は玉藻を刺る奥の方は榜かじとなり玉藻の玉はほめたる詞なる
 こと上にいへるが如し○敷妙之は枕の枕詞なり敷妙は床に敷く布の意にて
 また床袖衣などにもつけいていへり敷妙の敷は織目の繁き意にていはゆる絹
 布をいふともいへれどこの枕詞は夜の物にのみつけたるをさへば猶さら
 はあらじ○枕の邊云々燈に枕之邊とは家にて妹を寝たりし枕のあたりの事
 なり云々つねに玉藻を妹のなびきぬるにたとへたるが如く玉藻のなびけるさ
 まにて妹のぬたりしかたちのさもはるればなりそれを枕のあたりとよめる例
 のみやびなりといへり結句の藻は歎辭この處語説あれどもまづこの説をあた
 やかなりとす歌の意われは玉藻を刺る奥の方は榜かじ玉藻のなびけるさまを
 見れば京なる妹のさもひ出でられて忘れんとすれどもおすれかねて苦しけれ
 ばとなり

右一首式部卿藤原宇合 ○目錄には作主未詳歌とありてその下に式部卿云々
 とありされは必しもこの卿の歌とさだめがたし卿は續紀に天平九年八月參
 議式部卿兼太宰帥正三位藤原朝臣宇合兼贈太政大臣不比等第三子也と見え

たり

長皇子御歌

吾妹子乎早見漢風倭有吾松楸不吹有勿勤

○風にさほせてよみ給へるなり

○吾妹子乎早見漢風 攝津國に早見の漢はなければこゝは上の歌に佐美山を
 吾妹子乎去來見山といひかけたるに同じく見漢は御漢にてたゞ漢の事なるべ
 し御津御浦などもいへば御漢ともいふべきなりそれを妹を早見んといひかけ
 たりといへる玉の小琴の説然るべし○吾松楸不吹有勿勤 吾はまたマツにい
 ひかけて妹の待つ意をよせたり古義には松楸は松樹の誤りなりといへる説に
 よりマツノキニとよありされどこの歌の全體より考ふる時はなかりに改め
 る方なるべくちばゆことなる本のありとしもきこえぬばましたの事なり
 楡楸に吾松楸は京の御園にこの木ありしなるべけれど今よりはいやしげにき
 こゆるなりこの前後の旅の歌いづれもめでたくきこゆるに只かの物戀之伎乃
 どこの歌のみつたなきはこのほどの一辭なるべしといへり不吹有勿勤は吹か

すにあらなゆめ吹けよかしの意なり。勤はまた、努謹なども書ける意にて、今、
ゆめ、なごいふ物なむ物を禁ずる時に、かたく、それをつゝしめと仰する詞
なり、ごいは、あつらしき詞づかひなり

◎大意 吾妹子を早見んといふみの詞のなつかしきこの御濱の風よ、倭なる、わ
が園にたてる、妹が、われを待うといふことを、名に負ひたる松や、椿やを、ゆめ、吹
吹かすに、あるごとくなかれ、家人の、その風によりて、わが、この旅の空のわびしきを
も、あしはかるべく、寒く吹けよかしの意なり、この風を、妹と吾との間の使せんため
に、吹きかまへといふ意なりと、説けるも、あれども、し、さらばこと更に、吾松椿云々
などのり結ぶべくもあらず、いかに

大行天皇幸于吉野宮時歌 ○ごいも文武天皇にませり
見吉野乃山下風之寒久爾爲當也今夜毛我獨宿半

◎旅の空に、備練の、わびしきを、歌けるなり

◎寒久爾は、寒けくあるに、なり、○爲當也、爲當は、このごとく用ひたるは、すべ
とさしあたりて、自然事の意外になり行くを、歌く副詞と知るべし、接続に用ふる

ものどまがふことなかれ、接続の方は、マタハなど譯して、よくきこゆ、古今集夏の
部に、ほととぎす、なく、聲きけば、あぢきなく、ぬし、定まらぬ、懸ひせらるは、たどある
も、今とちなじ、也は、疑ひの、辭なり、歌の意、かく、山下風の身に、しみて、寒けく吹く
にかつては、あもは、ざりしを、從薦のわが身なれば、今よひも、また、わびしく、獨ねん
かとなり

右一首或云、天皇御製歌 ○かくは、あれども、考に、端詞に、御製歌となきは、みな、從
薦の人の歌なりといへるに、從ふべし、なほ、歌の意を、味へてよ

宇治間山朝風寒之旅爾師手衣應借妹毛有勿久爾

◎朝風の寒きを、うちみ給へるなり

○宇治間山は、大和國吉野郡、○衣應借妹毛有勿久爾、京にありては、かく、寒き朝
げなどは、妹が衣をかすべけれど、けさは、さる妹もあらぬに、この宇治間山の朝風
の、寒くも吹くことかな、こゝろせよ、かしの意なり

右一首、長屋王 ○高市皇子命の御子なり、續紀によるに、慶雲元年、无位より正四
位上に、叙せられ、後に、左大臣正二位までになり給ひしなり

和銅元年戊申、天皇御製歌。○例によるに、戊申の下月をかしくべきなり。諸註、冬十一月と補ふべしともいひ、既に補ひたるもあれど、たしかなることにもあらねば、今はもとのまゝにておきつ、またこの和銅元年の前に、寧樂宮御宇、天皇代とあるべきも例なり。古義には補ひたり。下の和銅五年の歌の次に、寧樂宮とあるはみだれたるなるべし。さて、この天皇は元明天皇におはしまして、日本紀には、日本根子天津御代、豐國成姫、天皇と見えたり。

丈夫之、鞆乃音爲奈利、物部乃大臣、楯立良思母。

◎この年、陸奥、越後の蝦夷ども叛きて、和銅二年、討手の使ひをつかはされし事あれば、これは、その前年、軍の訓練などのありける時の御製にやといへり。御位のはじめの事なれば、歎かせたまへるなり。

○丈夫之、鞆乃音爲奈利。丈夫は、討手の使ひにしたがふ武夫どもをさして詠へるなり。鞆乃音爲奈利、古事記傳に、鞆は何の料に著くる物ぞといふに、古歌などにも、鞆には、音をもいへるを思へば、この物に、弓弦の觸れて、鳴る音を高からしめん爲なり。音をもて感ずること、かの鳴鶴なども同じ、然るを師(眞淵翁)は、袂をさ

へ、弓弦を避くる物なり。故に、弦のあたる音あるなりと云はれつる。己も、さきにはさるとなりと思ひしを、後によく思へば、しかにはあらずといへり。奈利は例の詠歌の辭なり。○物部乃、大臣は官軍の大將を詔へるなり。物部は、武職をもて、朝廷に仕へまつるもの、稱なること既にいへり。大臣は大前津公にて、天皇の御前近く、伺候する公の意なり。○楯立良思母は、楯を立てて並べて、訓練するさまなり。天皇のおましとごろにましく、て、鞆の音を聞かせ給ひて、おしはからせ給へるなり。

御名部、皇女、奉和御歌。○天皇の御姉にませり。

吾大王物、莫御念、須賣神乃、嗣而賜流、吾莫勿久爾。

◎天皇の大御心を慰め奉り給へるなり。

○須賣神は皇祖天神を申せるなり。○嗣而賜流、嗣の字一本に、副に作れりといふによりて、副みつ。○吾莫勿久爾、この下や、はの反語を添へて、聞くべし。歌の意あなかしことわが大王、しか御心をな煩はし給ひそ、かしとけれど、皇神の、大王に副へて賜へるわれなげなくにやは、もし、一大事のありとも、みづから代り仕へまつらん、いかで御心つよくおぼしめせとなり。雄々しき御歌なり。四の卷の安部女郎

の吾脊子波物莫念事之有者火爾毛水爾毛吾莫亡國とある歌をもあはせ考ふべし

和銅三年庚戌春三月從藤原宮遷于寧樂宮時御輿停長屋原迺望古鄉御作歌 ○
從藤原宮云々諸註これを從飛鳥宮遷于藤原宮時とありしを誤れるなり(和銅三
年云々はいふに及ばず)と云はば檜杵に飛鳥より藤原まではわづか十町にも足ら
ぬ間なれば迺望古郷などいふべきにあらず又長屋原は山邊郡にて今の長原村
なれば藤原より奈真へ行く道の半なりこの間はいと遠くしてこれ等の文よく
叶ひたりといへるに從ふべしさてこの遷都は續紀に和銅三年三月辛酉始遷都
于平城と見えたり

一書云太上天皇御製 ○本居翁この歌を一書には持統天皇の御時に飛鳥より
藤原へうつり給へる時の御製とするなるべし云々といへれどなほこれは元明
天皇を申しまつれりとせん方穩當なるべしそは元正天皇の御代の人などのか
く記せるをそのまゝ傳へたりとする時はこともなければなり
飛鳥明日香能里乎置而伊奈婆君之當者不所見香聞安真武

○古郷のわかれを惜しみ給ひて途上よりよみて贈り給へる御歌なるべし
○飛鳥は枕詞とよ鳥の幽かどつゞけたりといへり古義には飛鳥島の足輕とい
ふ意なるを明日香にいひつゞけたるなりといへりこの方いさゝかおだやかな
るには○明日香能里 前に檜杵の説を引けるがごとく藤原と十町ばかりの間
の處なればやがてこゝをとり出で給へるかもしはかくほど近き處なればこと
に親しき人などのこゝに住めるをおぼしやり給へるかいつれにてもあるべし
○君之當者 これ即古郷人なれど誰とも知られず歌の意今かくしもこの古郷
をあとに残し置きて遠く奈真にうつり行かば君があたりはつひに見えずなり
なんかさらばいかに戀しからん今よりおもひやらるとなり
或本從藤原京遷于寧樂時宮時歌 ○或本の二字諸註にもいへるが如くおだやか
ならず削るべし拾穂抄にも無く考檜杵にも削れり

天皇乃命畏美柔備爾之家乎擇隱國乃泊瀬乃川爾艇浮而吾行河乃川隈之八十阿不
落萬段願爲乍玉梓乃道行晚青丹吉檜乃京師乃佐保川爾伊去至而我宿有衣乃上從
朝月夜清爾見者栲乃穗爾夜之霜落磐床等川之水凝冷夜乎息言無久通乍作家爾千

代二手來座牟公與吾毛通武

◎考に、これはよき人の家を、親しき人の事とりて作れるにや。また親王、王たちの家も、即造官使にとり作らしむべければ、その司人の中にもみたるかといへり。さてこの歌、とりつゝめていへば、新家をいはへるなり。

○柔備爾之家乎擇、ふるく住み馴れて調和たりし、藤原の京の家を放れてなり。擇の字は誤りといへり。擇の容書、擇は放に似たれば、草書より、つひに混へるなるべしといへり。○泊瀬乃川爾、爾は泊瀬川より、舟にて、奈良へうつり行くをいふ。○川隈之八十阿不落云々、川隈は上に道隈とあるに同じく、川の折れ曲れる處をいふ。さる隈々の多きを、もるゝことなく、その隈ごとに幾度もく、古郷の方をかへり見しつゝとなり。八十阿、八十は數の多きをいふとあるにて、その道のはるけきさまおもひやられ、願爲乍にて、古郷のなづかしき情しられたり。○王梓乃枕詞、梓の乃とつゝけたりといへり。○道行晚、これなほ、舟路をいへるなり。上の願爲乍よりつゝくこといふも更なり。○佐保川爾、伊去至而は佐保川近き假屋に至りてなり。○我宿有衣乃上從云々、假屋なれば、いまだ、よろづ整はずして間

隙などの多かりしなるべし。衣の字、床の誤りなりといへるによりつゝ、衣にては心得かたければなり。さて朝月夜はさやかなる者なれば、目の前なるものをとり出で、今は次の詞の清爾の序としたり。清爾見者はそのわたりの景色の隈なく見ゆるを見るなり。○栲乃種爾夜霜落、栲は白布、種は秀にて、物の色の、それとあらはれて見ゆるをいふ。爾はノ如クニの意なり。霜のふれるさまの白布の如くに見ゆるをいへるなり。○盤床等、川之氷凝、盤床となりて、河の氷の凝れるをいふ。盤床とは盤の床の如く、平らかにされるをいふなり。○古義に、盤もて、臥具の床につくれるをいふといへれといかがあらん。○冷夜乎は、霜ふり、川の氷凝りて、寒さ堪へがたき夜ごろなるをとなり。○息言無久云々、さばかり、わびしきをも願はず、つねに藤原の舊都より、奈良の新都に行きかよひつゝ、作れる家にとなり。○千代二手來座牟公與云々、來は爾の誤りなりといへるによりつゝ、公は家の主人なるべし。この作れる家に、千代かけて住み給はん公として、吾も行く末長く、かよひ來んとなり。祝ひたる詞なり。考に、この歌はじめには、大御ことのみ、に、人皆の所をうつすこゝろをいひ、次に、藤原より奈良までの道の事をいひ、次に、冬さむきほど

家作りせし勞をいひ、末に事成りて、新家をことぶく言もて結べるば、よく調へる歌なりと云へり

反歌

青丹吉寧樂乃家爾者萬代爾吾母將通忘跡念勿

◎長歌の末をうけてよめり

◎吾母將通忘跡念勿、長歌にもことにもわれも通はんとあれば、この家作りの事とれる人は、異處に住めしなるべし。忘跡念勿は古義に、今こそあれ、末はいかかと主人はあもふべけれど、さらさら心にあらず。千代萬代までもかはらず、ことに通ひ來んとあもふぞ忘るゝことありとあもひ給ふなといへり。右歌作主未詳

和銅五年壬子夏四月遣長田壬子伊勢齋宮時山邊御井作歌

◎長田王は續紀に、和銅四年四月壬午、從五位上長田王授正五位下と見えたり。後に正四位下までに至り給ひしなり。三代實錄によれば、長親王の御子なり。○山邊御井、伊勢に山邊村といふがかりて、そこに御井の跡とて、今も残れりと、本居翁

いへり(玉勝間)

山邊乃御井乎見我氏利神風乃伊勢處女等相見鶴鴨

○山邊の御井のあたりのあかす、あもしろきに、うつくしき少女どもをさへ見つるをよるこべるなり

○見我氏利は、見がてらといふに同じ、がてらは物を相かねてするをいふ。この下に來つれば、詞を添へて聞くべし。○神風乃、枕詞なり。神風は、即息なれば、いへり。言につけたりといへり。○相見鶴鴨、あもひもかけず、少女どもの逢へるを、

深くよるこべる状、この句にて知られたり

浦佐夫流情佐麻彌之久堅乃天之四具禮能流相見者

◎これは、旅中さびしき時雨さへふるを恨めるなり

○浦佐夫流は、心中のさびしきをいふ。浦は、借り字にて、心の意なり。○情佐麻彌之、佐は、添へたる詞。佐夜中などの佐に同じ。麻彌之は、物の多きと、しげきことにてこへは、うらさびしき心のしげきなりといへり。但、彌は、彌の誤りとせむによれるなり。集中まねく、また、まねみなどある、皆しげき意なれば、まことこの説の

とどくなるべし。○久堅乃、枕詞、日刺す方の天とつゞけたりといへる久老の説などやまづ、ちだやかならんか。この詞、また、月雨、都などにもつゞけいふは、うつれるなり。○天之四具禮、耳遠きやうなれど、時雨は、天より降るものなれば、かくもいへるなり。○流相見者、古く雨雪などの降るを流るともいへり。但ナガラフといふ時は、もとは、流るの延びたる詞ながら、その意、あつから緩まりて、つねに降りつゝある意となるなり。花散ると、花ちらふと、その意同じからぬなどを合はせ、おもふべし。さて、この歌、この句より、初二の句へ返して心得べし。こゝろ明らかし。

燈に、この王を伊勢につかはされしは、四月と端作にありしぐれは、長月のしぐれの雨と、この集中によめるが如く、九月より冬かけて降る雨をいへば、この歌は四月より、九月までも、伊勢にありて、よみ給へるにこそ。これは、時たがひ、次の歌は、立田山、伊勢よりの道にあらねば、もし、この二首は、こと人のにて、端作の脱ちたるにや。それは、知らずされど、これは、九月までも、伊勢におはしてよみ給ひ、立田山は、その歸路に、伊勢より、この山をこゆべき公務ありて、しかよみ給ひしにや、實事知らねば、定めがたけれど、上の歌のつゞきなれば、それに従はんが穩しかるべしといへり。

海底奥津白浪立田山何時鹿越奈武妹之當見武

○妹が家のあたりを見んこと、のまぢ遠き意なり

○海底奥津白浪、この二句は、下の立田の立をよび出でん序のみ、今古集にも、風ふけば、奥つ白浪、立田山とつゞけたり。さてまた、初句の海底は、奥津の枕詞にして、海の底の奥深きとつゞけたりといへり。○立田山は、大和國平群郡。○何時鹿越奈武云々は、いつか、立田山を越えて行くならんは、やく、その時にもなれかし。妹があたりを見んとなり。

右二首、今案、不似御井所作、若疑、當時誦之古歌歟。○この疑ひもさることながら、上に引ける燈の説のごとくもありぬべければ、きはめがたし。

長皇子、與志貴皇子、於、佐紀宮、俱宴歌。○佐紀宮は、長皇子の宮なるべし。佐紀は、大和國添下郡。さて、この處、諸本、長皇子云云の前に、寧樂宮とあれど、今は削れるに從ひつ

秋去者今毛見如妻戀爾鹿將鳴山曾高野原之宇倍

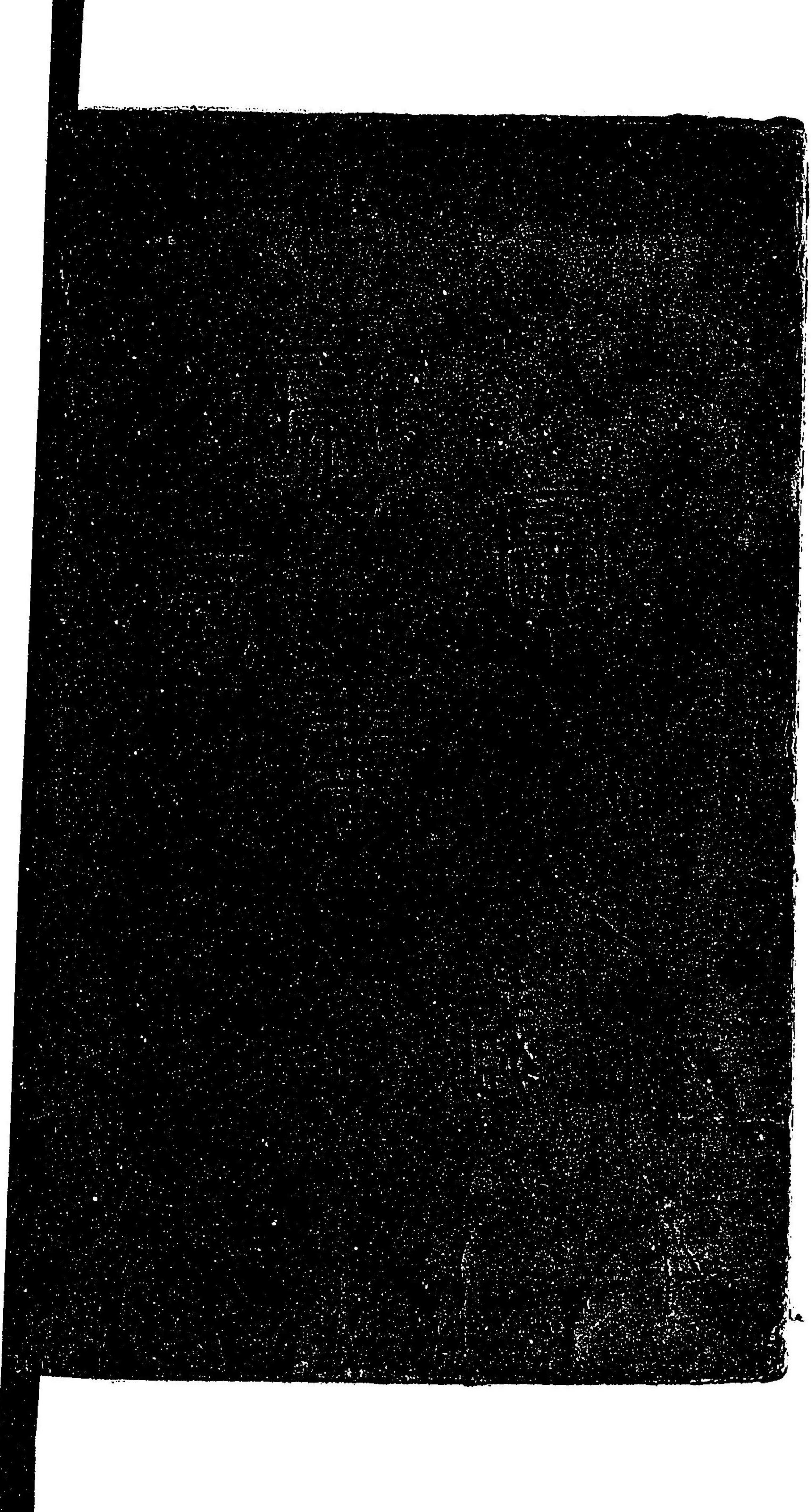
◎今日のあもしろさに志貴皇子に再會を催し給へるなり
○秋去者、この詞によるに、この宴は、春夏のほどなりしなるべし○高野原之宇倍、高野は佐紀郷に在りて宮に近き處ときこえたり。宇倍は、ホトリの意なり。歌の意、秋になりなば、今も、かく興あるがごとく、この高野原のうちは、鹿の鳴きてあもしろからん山ぞや、いかで、また、おはしましても遊び給ひぬとなり
右一首、長皇子

萬葉集卷第一終

本集を逐次講了せんは紙數限りある講義録のもとよりなし能はぬとたれば
卷の一講了の後殊に秀逸なるを選び其の義を釋せん豫考のところ講師忙は
しく筆執りかたき由につきやむなくこゝに終りどはなしつ讀者諒せよ

62
355

東京大学校文庫
第三三三号
録





205334-000-2

62-355

万葉集积義

畠山 健/述

[刊年不明]

EDV-0513

